

『まあ好いさ。』

其處へ、村の人が十圓紙幣を兩替して貰ひに來たので、お靜は用筆筒の方へと立つて行つた。

光二もお春も、飯がすんで、父親が元氣に話してゐる明るい居間へと集つて來た。光二は羊羹を出して、茶を澁く煎れて、何杯も何杯も飲みながら、

『父さん、今度は電氣を引くんですね。瓦斯は臭かつたり、蟲が寄つて來たりしますよ。』  
などと言つたりした。

金藏は赤く酔つた顔をあたりにかゝやかしながら、

『光二、お前は何になる。兄貴の支店か？』

『いやなこつた。商人は眞平だ。それは旨く行けば好いけれども、懸引が難かしくつて……。それに、僅かばかりの資本ぢや、中々成功しやしない。それに、頭は無闇に下げなければならず、拂ひを待てと言へば、はいと言つて、いつまでも待たなければならず、弱い者よ、汝の名は商人なりと言ひたい位ですよ。僕はそれよりか銀行か役所へ出た方が好い。その方が氣樂だ。』

其時、お靜は既に店に戻つてゐた。

金藏は、『そんなことを言ふが、月給取なんか慘めなものだぞ。首になりやそれ切りだ。年中、上役の顔色ばかり見て、やれ免職になりやしなやかと心配する。餘り好いもんぢやないぜ。懸懸へ行つて見ろ、

役人で御座候と威張つてゐても、精々四十五圓か五十圓で、その中から、やれ積立だ、同僚の見舞だ、辨當代だつて差引かれて、にに残るのは、僅かしきやありやしない。それで、妻子を養つて行かなければならぬんだからな。だから、彼奴等の顔色を見ろ、皆な營養不良といふ顔をしてゐる。兎に角、世の中は金がなければ駄目だ。金を儲けるのは、矢張商人だ——』かう言つて大きく笑つた。

さういふ父親の意見の立場から、商人でなければ何うしてもいけないといふところから、器量は十人並であるのに拘らず、お春の婚期は後れたのであつた。

『なア、婆さん。』と今度はお靜を顧みて、『今年の秋こそ、二人で伊勢詣りをしやうぢやないか。それまでには普請の方もすつかり片附くし、何時でもこの身代を俊介に渡すことが出来るばかりになるし、年寄も、もうそろそろ引込む時節だ。俊介もお蔭で、五年や六年この家の何處にも手を入れずに住めるよ。』  
『本當ですね。もう引込んで好い時分ですね。私も随分、竈の前に踞んだから、もう好いかも知れない。』

かうお靜も笑ひながら言つた。

『何でも金ね。』

ふと、何を思ひついたか、傍からお春が言つた。

『さうだらう。だから、お春の亭主には、金持を見つけてやらうと思つて、父さんは心配してゐるんだ。』



『はア、はア、』とお春は袂を顔にあて、笑つた。

『俊介は何うした？ むないか。』

『さつき、何處かへ出かけて行きました。』かうお靜は言つた。

『あいつも困るんだ。餘り早く持たせすぎたもんで女房の味もよく味へなかつたと見える。(俊介は昨年兵營から歸つて、間もなく妻を持つたが、二月と経たない中に離縁した。)そいつも、何處か一人好いのをさがさなければならぬ。好いのがないかなア、何處かに——』そればかりが苦勞だといふやうに、それさへきまつて孫でも出来れば、もう俊介に家を譲りわたしても好いといふやうに、ちよつと頭を傾けて考へたが、さうした念からはすぐ離れて、またもとの機嫌よく、『光や、何かやれよ。』

光二は笑つて、

『やりますかな、何をやりませう。』

『何でも好いやな。』

『父様は、呂昇の壺坂が好きだ。あれをやりませう。』

かう言つて光二は起上つた。

『今夜は、大變御機嫌ですね。』かうお靜は笑ひながら言ふと、

『うん、今夜は少し飲みすぎた。かう呑べエになつちや、やり切れない。仕舞には、家も身代も飲み

潰して了ふぜ？』

『酒はお旨くして飲むのが一番結構ですよ。』お靜はかう調子を合せた。

『光や、座敷でやれ、蓄音機は少し離れて聞いた方が好い。』

『私も行かう。』とお春も起上つた。

お靜は子供達の飲んだ茶碗や急須を片附けながら、『また、往來に、一杯、人がたかるでせうね。』

奥の座敷では、光二やお春の他に、小僧や下女達も大勢集つたらしく、やがて蓄音機の壺坂が靜かに始まり出した。

六

それから二月経つた。

ある日、外から入つて來た光二は、いきなり母親を捉へて、

『母さん、僕は赤面しちやつた——』

かう言つて呼吸をはずませた。

『何だね？』

『お春ちやんるるかね？』



『ゐるよ。何うしたの？』

光二は母親の耳に口を寄せるやうにした。お静の耳には、思ひもかけないことがきこえた。

『……………』

思ひ廻して見るやうにして——更にまた、さう言はれて見れば、そんな印象もほつ／＼見えないことでもなかつたことを思ひ出して、お静はちつと一ところを見詰めるやうにした。

暫くして、

『本當だらうか？』

『うそか本當か知らないけども、僕は顔から火が出るやうな氣がした。さう言はれて見れば、僕も可怪しいと思つたことは二三度ある。用もないのに、春ちゃんは、よく裏に出掛けて行くが、あれが變だ。相手は傳次ですぜ。彼奴はするい奴だから……。今の中に何うかしなければや駄目ですぜ、母さん。本當によろしくない。相當な家庭に育つて、教育もありながら。』

『でも、ね、お春だつて、そんな馬鹿ぢやあるまいがね。』

『それがいけないですよ。母さん。わかるもんですか。』

そこに、お銀が入つて來たので話は切れた。

お静はいろ／＼に考へた。これは金藏に話してはいけない。それよりも當人に譯を言つてきかせる方

が好い。思ひ返させる方が好い。それに、まさかには、お春がそんな馬鹿ではあるまいといふ信頼もかなりにつよく胸の底にはあつた。で、母親はそれをこつそり娘に訊いて見る機會を求めたが、人出入の多い、忙しい家は、容易にさうした機會がやつて來なかつた。夜遅く、お静は、一緒にお春を風呂に伴れて行つて、入つて、漸くそこでその話を持出した。

『學校へも行つたお前だから、まさか、そんなことはないだらうと思ふけれど、村には味方もあれば敵もある。飽くまで身持は潔白にしなければならぬ。さうしたことがなければ好い。一時いくら噂に立てられたつて、實際ないことなら、いくら難癖つけられたつて、そんなことは構はない……。しかし、もし、さうしたことを言はれる種がこればかりでもあるなら、私に言つてお呉れ、そつと言つてお呉れ。』

『……………』

『お前一人の恥ではない。父さんの顔にも拘はれば、家名にも拘はる。御先祖様に對しても——』

『そんなことはわかつてゐますよ。』

母親のくどくと言ふ言葉が、兎角お談義になるので、お春は後には、荒々しくかう言ひ放つて、體も碌々拭かずに、着物を支へたまゝ戸外へ出て行つた。

『あゝいふ奴だ……』

母親は自分のもので自由に自由にならない娘を齒痒さうに見送らすにはゐられなかつた。



それからはお静は絶えず娘に注意を拂つた。よくはわからないけれども、何うもあやしい……。傳次もあやしい。しかし、これを金藏に打明けたところで爲方がない。只徒らに事を大きくするばかりである。それよりは、何うかして人に知られずに、娘に改めさせ度い。かう思ふと、お静の苦心は並大抵のことではなかつた。庫の方へお春が掛けて行つたと言つては、後から娘の名を呼び、團子など買ひに行つて、歸りが遅いと言つては、店の前に出て、村の入口の方を眺めた。お静はひとりで心を苦しめた。これといふのも、父親が餘り選り好みをして、此の年になるまで、嫁にやらなかつたために、かうした苦勞が湧いて來たのだとすら思つた。

『お前、そんなことがあるならばあるとお言ひよ。』

あたりに人のゐない時に、かうお静が訊くと、

『そんなことはありやしないよ。』

かうぶつ切ら棒にお春は言つた。しかし、何うも、その言ひ方に、またその顔色に、面白くないところがあるのを母親はいつも見逃さなかつた。

『本當にないかえ？』

『ありやしないつて言ふのに、わからない母さんだねえ。』  
お春はかう言つてすぐ起つて行つて了つた。

夜も、お静は注意してお銀と二人の寐る一間にこつそり來て見たりした。お銀に話して、その監督を頼めば、一人で見張つてゐるよりも一層好いのはわかり切つてゐるけれども、しかしさうしたことをお銀に打明ける氣には何うしてもなれなかつた。

ところが、ある朝、いつものやうに、W市で發刊する新聞をひろけてゐた父親は、ふと思ひもかけないある二三行の記事を發見して、びたりとそこに眼が留つた。長い間、かれはそこから眼を離さなかつた。何故と言ふに、そこに、その葉書欄に、木村の酒屋の娘は土藏の中で、白晝小僧と乳練り合つてゐるといふことが書いてあつたからであつた。

（小僧と言へば誰だ？ 傳次より他にない。）かう考へて、『まさか、お春が？』かう口へ出して笑つて見たが、いろいろなシインを思ひ出して見ると、急に笑へなくなつて來るのを感じた。（馬鹿にしてやがる。早速新聞社に正誤を出してやらう。）それを見た刹那にかう思つた小さな忿りも、滅多なことは出來ないやうな氣もして來た。金藏には、お春の様子が何だか急に目につき出して來た。

かれはその日一日、妻にすらその話をする氣になれずに懊惱したが、夕方になつて、ちよつとお静がこれの居間に入つて來たのを呼留めて、小聲で、

『家のお春のことが、新聞に出てるが、本當かな。』

新聞といふ二字に、はつとお静は驚いたやうにして、



『え？ 新聞に？』

『何アに、小さく葉書だよりにちよつと書いてあるだけでも、本當かえ？』

『なんて書いてあるんですか。』

『雇人と關係してゐるつて書いてあるんだが――』

さう聞いても別に驚いたやうな風もないお靜の態度も金藏には意外に感じられた。お靜は言つた。

『この間、光二もそんなことを言つてゐましたがね……』

『ぢや、知つてゐるんだな、お前は？』

『いゝえ、知つてゐるつていふわけでもないですけども、此間も、その事はよくお春に言つて置きました。』

『事實かえ？』

『そんなことはないつて、いくら書いてもあれは言ふんですけども……』

『本當らしいところもあるのか？』

『まだ、私にもよくわかりませんが……さういふことがあつちや大變ですから、それで、私も此間から心配して、貴方にも話さうか、話すまいかと思つてゐたんですけど……かういふことは、荒立てては損ですから、もしも、さういふ間違があつたらあつたで、そつとしければなりませんからね。……』

『……………』

金藏は黙つてゐた。

暫くして、『俊介はゐるか？』

『もう、少しさつき出て行きました。』

『何處に行つたんだ……。この頃は、毎日、夕方になると出かけて行くぢやないか。』

『耳の療治に行くんです。』かうお靜は靜かに言つた。

『耳の療治？ 何處かわるいのか？』

『何だか、耳が空鳴りがして、痛くつてしやうがないつて言つてゐました。』

『病院か？』

『さうでせう、屹度。』

金藏は不愉快さうな顔をして、風呂場の方へ行つた。

七

それから二三日経つたある日の午後、俊介は座敷の自分の机の前に坐つて、何か頻りに計算をしてゐた。算盤を弾いて見れば考へ、考へてはまた弾いて見、更にまたそれを鉛筆で小さな手帳のやうなもの



に細く書き附けた。

誰にもわからなかつたことが、父母にも、親類にも、同胞にも、或は世間の人達にも、誰にもわからずに、旨くしてやつたといふことが、尠なからずかれを満足させた。これで女は何うにでもなる筈である。あの可愛い離れられない女を人知れず身受けして、町に圍つて置くことが出来るのである。それは、いつかはわかるに相違ない。いくらのおんきな親父でも、その大穴に最後まで氣がつかずにあることは望まれない。しかし、兎に角半年や一年はわからずに町に圍つて置くことが出来る。その後になつてわかつたところで、それはまたその時で、臨機應變な所置をすることが出来る。かう思ふと、かねてこつそり計畫してゐた爲事が一段落ついたやうな氣がして、ほつと呼吸がつかれた。今時分は、女は廓を出たに違ひない。そしてあの世話好きな女の伯母が、昨日約束して來た家に、女をつれて移つたに相違ない。かう思ふと、一刻もかうしてはゐられずに、今から飛び出して出かけて行きたいやうな氣がした。しかし、折角これまでにしたので。今になつて知れて、親父に茶々を入れられてはそれこそ大變だ……。かう思つて、俊介は矢張いつもの耳の療治に行く時間の來るのを待つことにした。

それに、何うしてだか、何か譯があるのか、この二三日、いやに、親父も家にばかり引籠つてゐて、出なければならぬ筈のところにも出て行かず、不愉快さうに、沈鬱な顔色をして、まごまごすれば、すぐ嘔吐られさうに見えるのも無氣味だつた。もしや自分のあの太穴が知れかゝつてゐるのではないかと

思ふと、びくびくするといふほどではなくとも、少くとも氣懸りで爲方がなかつた。俊介は親父や同胞や世間があるために、思ふまゝに女と楽しむことの出来ないのを情けないやうに思つた。何うした連想か、田舎の農家から來て二三月ほど一緒にゐた色の白い離縁した妻のことなどが胸に浮んで來た。

其處に、金藏は入つて來た。

『耳がわりいつてな……?』

『え。』

『何處だ? 耳は?』

『表は何でもなんですけど、中が何うかしてゐるんですつて……。このまゝ投うて置くと、聾になるさうです。』

『何時から、そんなになつたんだ?』

『つい、先月の末あたりからです。何うも變だ、變だと思つてゐたんです。いやに、がアんとしたり、少し痛かつたりしたんです。』

何か猶詳しく訊くかと思つたら、きゝもせず、そのまゝ金藏は店の方へ行つた。

しかし、暫く経つた後には、金藏はしなければならぬ用事をふと思ひ出したといふやうにして、急いで、中庭を通つて、酒庫に行つて、九升樽に頻りに酒を詰めはじめた。



ふと氣が附くと、さつきそこにある傳次の姿が急に見えなくなつた。

『傳次！』

かうかれは呼んで見た。

矢張返事がなかつた。何うしやがつたらうと思ひながら、庭から勝手へ来て、店を見廻しても、其處にも矢張その姿は見えなかつた。

丁度午後三時すぎで、お銀は座敷の北方の間で仕事、お静は體が少しわるいと言つて居間で枕をして横になつてゐた。あたりはしんとして、鶏がこつこと言つて地を啄いてゐる音がそれと際立つてきこえるばかりであつた。お春の姿は何處にも見えなかつた。

金藏はふとあることに氣が附いたといふやうにして、庭から、樹と樹の間を小さな祠の方へ抜けて、庫の横手の方へと歩いて行つた。果して、其處に、午後の日の斜めにさしわたつた土藏のかけの五坪ばかりの狭いところに、傳次とお春とが立ちながら何か話して笑つてゐるのがかれの眼に入つた。

『傳次！ 何をしてゐる！ 傳馬があるぞ。』

かう金藏は呶鳴つた。

『へえ。』

傳次はわざと何氣ない風を装うて、ぶうぶうしく此方へと歩いて來た。

しかしお春はギョツとした。その顔は初めは赤く、やがては眞青に變つて、何うして好いかわからないうやうに體がぶる／＼震へた。金藏は何も言はずに、黙つて、鋭い怒りの一瞥をお春の上に投げて踵をめぐらした。お春は暫しの間は地に根が生えでもしたかのやうに立竦んで了つたが、やがて思返して母屋の方へと行つた。

お春は恐れ慄いた。美しく楽しかつた歡樂は足許から崩れて、今は眞逆さまに奈落の底にでも落ちて行くやうな氣がした。恐ろしい父親の顔——それを打消すやうにして、男と楽しんだ其折々のシインがきれぎれに頭を掠めて通つて行くけれども、また何うなるものかといふ氣になつて、頬を赤くし、眼を異様にかゞやかしては見るけれども、しかし父親のその恐ろしい一瞥は拂ひ去り難く強くお春の身を壓した。お春は縁の柱に凭れて、庭の一方を凝視した。

しかし何うすることも出来なかつた。時が経つて胸の鼓動は静まつたが、不安と恐怖の念は少しもその量を減じなかつた、爲方なしに、お春は座敷の次の一間の隅のところに小さくなつて、戸棚をあけて、縫ひかけたメリンスの前掛を出して、紐をつけ始めた。と、父親の怒る聲が居間の方できこえて、次第に、それが近くなつて來たと思ふと、荒々しい足音がして、振返らうとした途端に、その横顔をお春はしたゝかに打たれた。

お春はあつと言つて突伏した。



怒つた父親の拳は、霰のやうに、背や頭や肩に落ちた。束髪の櫛も折れた。父親はこれをするにも何一言も言はなかつたが、唯ならぬ物音に驚いてお銀も、お静も、俊介も皆なその周圍に飛んで來てそして父親の手を遮つた。

『馬鹿、馬鹿、俺の娘だ、殺したつて構はない……』

かう金藏は嗚咽つて、また烈しく亂打した。俊介はそれはお春でなくつて自分のやうな氣がした。

## 錆びた沼

昨夜もかれは遅くまで眠られなかつたことを思ひ出した。月が遅く沼の向うの森の上に昇つて、それがいやに赤く、光芒がなく、ベックリンの繪にでも見るやうに異様に不可思議な形に見えた。夜は寂としてゐた。宵の間にあれほど賑やかに、喧しい位に鳴いた蟲の音も一時途絶えたかのやうに、ジイといふ地蟲の鳴くやうな聲の他は、田からも沼からも村からも何等の物音も聞えて來なかつた。かれは自分の心の静けさとこのあたりの静けさとが一緒になつたやうな氣がして、否、むしろその静けさの奥に何とも言はれない不思議な寂しさがあるやうに思はれて、愈々神経が鋭く尖つて來るのを感じた。かれは蚊帳の中でひとり起きて坐つた。

蚊帳の外の机の上に置いてあるランプの薄暗い影が室の一隅だけを照して、夜風が入つて來る度に、その光が蚊帳の青いのと一緒に微かに搖いた。晝間見馴れた狭い庭の草花、木槿の垣、それから少し低く一面の水田で、青かつた奴が今は既に黄く、それがずつと沼の土手のあるところまで續いてゐて、夕暮



などには、その土手の下にある漁師の家に灯がほつかりと一つはつきり見えるのが常であつたが、今は、深夜の今は、それが丸で別な世界で、月の昇つた黒い森も、森の上に二間ほどかけ離れて浮んでゐる月の形も、何も彼も今まで見たことのない處のやうにかれには思はれた。何だか自分の住んでゐる世界から浮び上つて、別な世界にでも来たやうな氣がした。いくら怖ろしいやうな氣もした。

かれは凝と異様の形をした半ば缺けた月に見入つた。

いろいろなことが次第にかれの魂と心とを脅かして來た。遅くまでかゝつて書かうとしてしかも旨く出来なかつた小説の細かい心のサイン、それが未だにかれの眼と心に絡み着いてゐるが、その複雑した心理のために、かれは既に一週目を費して來た。『そんなことで何うする？』かういふ心持と、『何も急ぐことはない。ゆつくりやれ。』といふ心持とが兩方から出て來て戰つて、絡み合つて、そしていつも終にはぐたりとなつて、机から身を離して、仰向に倒れて、後頭部に手を合せて、長い間天井を見詰めた。

しかし昨夜ほど自分の身の上を、または自分の醜い臍甲斐のない姿を、または運命とは言ひながら、その運命を切り開くことも出来ずに、人生の半をとりの昔に通過しつゝしかも何うすることも出来なかつた自分の境遇を別に離して考へて見たことはなかつた。かれ自身ではなしに、誰か他にさういふ人間がゐて、さうした生活を送つて來てゐるやうにすらかれには考へられた。離魂病と言ふことがあるが、

實際、その病に罹つた人でもあるやうに、自分の魂が自分の肉體から離れて、冷かに自分を見てゐるやうな心持もした。其處にも此處にもかれがゐる。醜い弱いかれがゐる。十のものゝ七つ八つまでやつて來て、そしてぐたりとなつて了ふかれがゐる。そして到るところで悶え苦しんでゐるかれがゐる。現に、かれがかうして垂死の病妻を抱いて、そしてその病妻の田舎の家の離座敷に世間を離れて來てゐるのは、それは自分ではなくて、他にさういふものがあるのではないかといふ風にすらかれには思はれる。

と、今度は自分の爲事のことになしに、病妻のことが頻りに頭に上つて來た。病のためにその力と頼む夫とさへ一緒の路を行くことの出来ないあはれさを深くかれは感じ出した。尠くとも妻は他界へ、不可思議の世界へ、神祕へと一步は一步と近づきつゝあるのであつた。あはれな妻！ かう思ふと、死の不可思議が俄かにかれに絡み附いて來て、そのあやしげな異様な月の形や、黒い森や、深い影で蔽はれた沼がかれの心を強く壓すやうにした。死んだ過去の無数の魂がそこにも此處にも澤山にゐて、白い細い手を出して、そして自分を引張つて行くやうな氣がした。かれは氣味がわるくなつて、そしてその月が見えないやうに、雨戸を一枚引寄せて了つた。……蟲の聲がまた聞え出した。

此處へ、この沼の畔の家へ、かれが始めてやつて來て見たのは、去年の秋の中頃であつた。かれは來



て見てすつかり心を奪はれて了つた。『此處なら、何んなことでも出来る。落付いて出来る。世間のことを考へずに、何んな長いものでも書くことが出来る。』かれはかれの病妻がかうした故郷を持つてゐるとは思はなかつた。かれはその時海岸にゐた病妻の許に手紙を書いた。『お前がさういふ積りなら、それに越したことはない。こゝなら、無論、自分は長くゐることが出来ると思ふ。お前の病の看護も落付いてすることが出来ると思ふ。それに、自分も此處で一つ本當になつて書くものを書いて見たい。』かう言つてやると、病妻は非常によろこんで、

昔のなつかしい記憶と、

幼ない思ひ出と

いかなる時にも笑顔で

私を迎へて呉れる故郷へ――

錆びた沼の水あほひ、

白い藻の花

大きな黄い月の

忘れやうとしても忘れられない故郷へ――

祖父母の墓

祖先の墓

その沼添ひの松蔭の

静かな寺のある故郷へ――

かうした詩とも句ともつかないやうなものを書いてかれに寄せた。かれはこれまでに何故此處にやつて來なかつたかと思つた。病妻は度々かれにその故郷について話した。またかれを一度はそこに伴れて行きたいと言つてゐた。しかも田舎の舊家の持つた空氣がいつもかれの思立ちを遮つたことをかれは思ひ出した。かれ等は餘りに都會の空氣に親しみすぎた。派手な色彩とリファインされた濃やかな複雑した都會の空氣に馴れすぎた。カフェと活動寫真と、夜の街頭の散歩とに心を奪はれすぎた。また妻が病に臥してからは、餘りに海岸の松原と佗しい海と砂濱とに月日を送りすぎた。妻は『海ももうつくづくあきましたね。……海はさびしい……單調だ。』かう言つて、蒼白い蠟のやうな顔に微笑を湛へた。

しかし海も決してかれ等に倦怠ばかりを齎らしはしなかつた筈だ。まだ、さう病氣が重くならない中は、かれ等は松原の中をよく二人して並んで歩いた。松原の中には真紅な撫子が咲いた。ハイネの詩の中



にあるやうに、或は咽び、或は悶え、或はたけり立ち、或は鏡のやうに靜かに滑かに海はかれ等の前に展けられた。その海のさまざまの色彩と氣分と調子とは、かれ等の二つの心の悶えたり悲しんだり苦しんだりまたは柔かに靜かになつて行く心には似てゐなかつたか。またその佗しい海の暗澹とした色の中に、さびしいお互ひの心の争闘を見出しはしなかつたか。

Kの海岸にゐた時には、砂山を越して來た松原の中の小さな二間の家にかれはその病妻を見出した。そこではかの女は思ひもかけない重い容態をかれに見せた。もうかの女は外に出て行くことも出来なかつた。枕もあけずに、『今日は海は暴れてますね。』などと言つた。小さな庭の向うにある井戸端には、鳳仙花が赤く白く咲いて、小さな蜻蛉などが來て停つた。時には松の聲と濤の音とが凄しく家を壓した。『かうしてゐると、何だか海の波の中にも漂はされてゐるやうな氣がしますね。』頭を押へるやうにして病妻は言つた。

その時分、かれはよく獨りで砂山を越して海の方へ行つた。凄じい白い波濤の掀翻、鉛色をした岩石の起伏、舟一つ浮んでゐない海はわびしくひろく横つて、何とも言はれないさびしさをかれの胸に染み込ませた。最早かれはロマンチックに妻の病を考へてゐることは出来なかつた。また自分の色彩のない生活を『詩』のやうに鍍して考へることは出来なかつた。かれはをり／＼松原の中から町の通りの方に出て、その向うにある小さな停車場に出かけて行つた。不思議にも妻の心がその頃になつて一層深くかれの方に偏つて絡み附いて來るのを感じた。停車場で汽車を待つてゐる間、『矢張、東京に出て行かれるのが心配なんだな。』などと考へて、さういふ心持を起すやうになつた病妻をあはれに思つたりした。しかし、體の丈夫なかれは、一方、都會の空氣の中に出て行く快樂を忘れてゐなかつた。

その頃にも、かれは病妻の横はつてゐる室の隣の間で、机に向つて、そして筆を執つてゐた。いくら書いても書いても、思つたやうなものも出て來なかつた。食ふための方の爲事は出来ても、本當に書かうとすることは竟に竟に書けなかつた。かれは何遍となく立つて行つては、病妻のために種々な用事をしてやつた。花なども探つて來て枕元の一輪挿にさした。

『海にももう、つくづく倦きて了つた!』

こんなことを病妻は度々言つた。

海は遠く吼えるやうに鳴つた。そしてその餘響が佗しく鳴る松の音に雜つて、さながら訴へるやうにきこえた。かと思ふと、黄ろいわびしい日影が長く海中に落ちて見渡された。

單調な濤の音が朝にも夕にも近くやつて來てかれ等を壓した。

着いた田舎の停車場には、車が三臺來てゐた。

そこには一臺しかないのです、他の二臺はわざわざ二里ほどあるA町から持つて來たのだといふ。



遠い親類だといふ四十位の農夫が一切此方の方の世話をして呉れた。

病妻はまだ何うやら彼うやら立つて歩くことが出来た。海岸から靜かに汽車の客室へ。それから東京で二日ほどその疲勞を醫すために休んで、そしてまた靜かに辛うじて汽車に乗つて沼の畔の故郷の方へ――。

病妻の顔はいつに似ず晴れやかで、汽車が其の近くにやつて來た時分には、窓からあちこちを眺めていろいろと幼い時のことを思ひ出すやうにした。何も彼も皆な親しくなつかしくかの女には映つて見えらしかつた。

『こんなところに停車場が出来たのね。』

汽車を下りて、車に乗る前に暫し休んだ時、かの女はかすれた聲で言つた。

かの女の聲の立たなくなつたのは、もうかなり前であつた。それほどかの女の病は重かつた。

青白い蠟のやうな顔、見るも氣の毒のやうに瘦せ細つた體、手元も覺束なささうで、ついて來た母親が寄つて來て手を取つた。

『お嬢さんかね、まア！』

かう其處にゐた農夫は驚いたやうにして言つた。

それも理である。かの女の赤いリボンをかけた可愛い姿を見た後には、かれ等はつひぞその人を見た

ことはないのであつたから……。かの女は十三の時に、父親に伴れられて北海道に行つたきり、それきり故郷には歸つて來たことはないのだから……。

『此處はあの安の家のあつたところあたりだね。面白いところに停車場が出来たのね。』

あたりを見廻しながら病妻は母親に言つた。

『少し休んで行くかえ？』

『い、え、すぐ参りませう。』

『大丈夫かえ？ 熱でも出ると困るぜ！ お前。』かうかれが傍から言ふと、

『でもすぐですもの……。もう此處からいくらもありやしませんよ、家まで。……』

『それはさうだがね。』病妻の顔と母親の顔を見較べて、

『大丈夫でせうか……。少し休んで行く方が好くはないかしらん。』

『大丈夫つて言ふから、家に行つてゆつくり落附いて休む方が好いでせう。』

かう母親が言ふので、そのまゝ三臺の車はそこに引き寄せられた。

一番先きに母親、つぎに病妻、最後にかれといふ順で車は靜かに走り出した。

『成るだけ靜かにやつて呉れ……。病人なんだから……。』

少し來たところで、かれはかう車夫達に聲をかけた。



折れ曲つた田舎道、そこには鎮守らしい祠があつたり、綺麗に刈込んだ豪農らしい櫛の高い垣があつたり、自轉車の不斷に通るやうな折れ曲つた平らな好い道があつたりして、やがて蘆荻や水草などの繁つてゐる小川に沿つて車は静かに進んで行つた。紫の花などが咲いてゐた。

かれは病んだ妻のために、いろいろなことを思はずにはゐられなかつた。尠くともかれ自身などよりも、かの女の方がもつと深い深い追懐——思ひ出しても思ひ出し切れないやうな、またはあるとあるものすべてが心に纏つて来るやうに追懐に充されてゐるに相違なかつた。第一、かうして病んで、とても再び全快する希望のない身を抱いて、十七八年振りで故郷に歸つて來るといふことは、墓になりに、祖父母乃至祖先の墓のある松かけの静かな寺に墓になり、歸つて行くやうなものであつた。それを思ふと、さうした考へが、センチメンタルであり、ロマンチックであり、餘りに現代的な思想とかけ離れてゐることを知りながら、しかもさうした悲哀に心も魂も浸つて行くやうな氣がせずにはゐられなかつた。『爲方がない。あいつの生きてゐる中は——あゝした弱いものに氣まづい思ひをさせるのも罪だ。』かう思つて、單に犠牲的に世話をしてやつてゐるといふ氣には何うしてもなれなかつた。妻のためにも泣いてやりたいやうな心が湧くやうにかれの胸に簇つて來た。

かれは車に揺られながら、何うしてかういふやさしい悲しい心が一方にはこれほど豊富にあるのに、また一方には何うしてあゝした冷やかな、打算的な、自己の快樂に向つて趨るやうな心があるものであら

うか。また何うしてかうしたまことの同情を否定し、又は冷笑するやうな心持が人間にはあるのか。今度自分がこゝに來ることになつたのも、本當を言へば、妻が海に倦きて故郷に歸る氣安さを叶へてやつたのではなくつて、自分のために、自分の爲事をするために適當な場所を發見したがために、そのためにやつて來ることになつたのではないか。この故郷が不幸にして自分の興味を惹かなかつたならば、自分は病妻のためばかりには決して此處に來はしなかつたに相違ない……。かう思ふと、いろいろなことがつゞいて押寄せて來て、妻の家の没落、妻の父親の死、それについての母親の冷酷な行爲などが拂つても拂つても簇つて集つて來た。

『このセンチメンタルな心持が何故現代の思想に合はないのか。』

『この二つの相異つた性質のものが自己の胸の中に巴渦を卷いてゐるがために、そのために、自分は自分の持つたものを完成することが出來ないのではないか。』

『しかし、今度こそは、十分に落附いて、そして自分のやることをしなければならぬ。……今度出來なければ、もう自分は駄目である。』

こんな風に、いつか妻の身の上から自分の身の上に移つて來る考へに胸を滿しながら、静かに土手を下りて來たと思ふと、もうその向うには、沼の美しいかゝやきが一ところ日に光つて見えて、かれ等の落附く家の屋根とその周圍を取巻いた疎らな樹とがそれと指さゝれて見え出して來た。



幌の中に微かに動いて行く病妻の束ねた髪と白い襟足ををかれは目にした。沼の上には白い雲が旗のやうに流れた。

『まア、こんなになつちやつたの？』

車から下りて自分の家の地面の中に入ったかの女は、さも驚いたやうに、または悲しむやうにして言つた。

かの女の眼には、昔の城郭のやうに家の周囲を繞つた濠、何百年を經過した大きな櫨の樹、その中に建てられてある棟の高い立派な家屋、さうしたものゝ代りに、屋敷の潰れたあとのがらんとした空地、その空地の隅に、母が住むために建てたといふ小さな二間の家屋、すつかり伐り倒されて日影も十分に遮ることの出来なくなつた周囲の樹木、唯一つそのまゝに残された土藏、それにつゞいた祖父の隠居所に宛てられた離座敷とがさびしく映つた。それはその折々に、祖父の死んだ時、父の死んだ時（父には妾があつて、その東京の妾宅で死んで行つた）に、さうした話のかの女は聞いて知つてゐたけれども、さういふ風に滅茶々々になつてしまつたとは知つてゐたけれども、さてかうしてぢかに來て見ても、今更ながらに、その没落のさまの悲しさを反覆して考へずにはゐられなかつた。かの女は、奥に小さく建てられてある家屋の縁に凭つて、青白い悲しさうな顔をあたりに見せて、暫しは何をも言はなかつた。

た。

其處にやつて來たかれは、

『くたびれたらう。早く上つて休んだら何うだえ。』

『でも、餘り變つたからびつくりして了つた。……』

『それはさうだらうな。』

『こんなになつたとは思はなかつた。』かの女はまたしてもあたりを見まはした。

『この前のところが皆な家だつたんですものねえ。』

『さうらしいねえ。昔は大きな邸があつたつて言ふことはわかるねえ……』間を置いて、『いつだつてねえ、家を壊したのは？』

『祖父さんが死に、父さんが東京で死んでから間もなくでした……』

『何うも滅びる家つて言ふものは、爲方がないもんだ……』

『本當ねえ……』

猶ほ他に何か言ひたさうにしたけれども、そこに一家の没落の發頭人とも言ふべき母親がやつて來たので、二人はびたりと口を噤んで了つた。

『早く上つてお休みな。何うもなかつたね。別に……』



『え、別に……』

痛妻はかう言つたが、流石に疲れたといふやうに、道具らしい道具も何も置いてない、がらんとした、日影の何處からもさし込んで来るやうな一間に身を横へた。

しかしながら、兎に角に、かうして故郷の家屋、——昔、十二三の時に見た面影は少しもないにもしろ、沼も土手も水田も向うに見える丘も、丘の上にもんと深く繁つてゐる松の古樹も、何も彼も昔のまゝである故郷にかうして夫と一緒に歸つて来たことはかの女には嬉しかった。否、嬉しいといふよりは寧ろ心強かつた。此處では長く苦しんだ他郷が、または他人が、海がかの女を脅かすことはなかつた。静かに落附いて死の床に横はることが出来た。

少し休んだ後で、

『離座敷は何うなつてゐる？』

かう言つて、夫の住むところが心配といふやうにとめてかの女は立上つて、下駄を突かけて、土藏つづきになつてゐる六疊の離座敷の方へへ行つた。かれはそのあとについた。

庭には草がかなり深く繁つてゐたけれども、一間の中は掃除をしたと見えて、割合に綺麗になつてゐた。

『あゝ、此處に來ると、昔のやうな氣がする……。祖父さんが莞爾してそこにゐるやうな氣がする。』

かう言つたかの女は、木口などがつしりした、茶席らしく數寄に拵へてある室の中に坐つて、

『好いでせう、此處なら？』

『勉強は出來さうだ……』

『さうでせう……。貴方が此處で勉強してゐらつしやると思ふと、安心して寝てゐられますよ。』

かの女は微笑を湛へながら細い聲で言つた。

『ひとつ、しつかり此處でやつて見なくつちや……』

『さうなさいね。此處なら、落附いてゐられるから。』

いかにも嬉しさうな表情をして、病妻の言つたことをかれは思ひ出した。

かれは度々さうした田舎の舊家の没落して行つた徑路を頭に浮べて考へた。かれには或時にはそれは單にその巴渦の中に出没する人達のある罪惡、またある不明、またはあるわるだくみ、さうしたものでありではなく、自然に衰へたり榮えたりして行く或る不可思議の力があるやうに感じられた。此處にも會ては榮えた時があつた。あらゆる平和と快樂とが巴渦を巻いて、笑聲が家の外に溢れたことがあつた。土藏には財が溢れ、家には金が満ちたことがあつたに相違なかつた。三代前位までは、村では殿様か何ぞのやうに敬まはれて、その持つた田園は、殆どこの村の半ば以上に及んだといふ話だ。



榮枯盛衰の理を考へて來れば、没落したからとて、何も悲しむことはない。また丁度その時に際して運わるくその衝に當つた人達を墓から引き出して責めるでもない。しかし病妻の父母のことに就き、またその祖父母のことについては、かれはをりをり深い解剖メスを當て、見た。

何處にも——どんな零細な一隅にも、皆な一つづゝ立派な作品となるべき事件、人物、運命があるやうに、此處にも矢張さうした原因と結果があつた。病妻は母親のために家は没落したやうにいふ。またそのために母親を憎んでゐるやうなところもある。しかしかれにはそのためばかりだとは思はれなかつたけれども、それでもかなりにはつきりと父親や母親や乃至は祖父母や、それを取巻いた親類を頭の中に入れることが出來た。

事件の中には、悲劇の中には必ず女性がある。そして大抵はその女性が巴渦の中の中心となつてゐる。この家でも矢張その例の一つであることは免がれなかつた。しかし此處で不思議なのは、その女性が父親の妾であつた色の白い悪魔でなくつて、現にその一家の没落の後まで、祖父母も、父親も、またその妾も死んで、恐らくはその一種粒である娘の死の後までも生き残つて行くであらうと思はれるその壯健な意志の強い母親であることであつた。

『母が一番悪いんです。』

かう病妻は度々その話をかれの耳に囁いた。

『恐ろしいもんですね。誰が一番わるかつたか、誰が一番さうした一家の没落を誘ふ動機になつたか、その時はわからないけれど、いつか時が経つと、すつかりわかつて來るもんですね。父親と一緒になつて母が家を潰したといふよりも、母の悪が、わるだくみがかうしたことになつたといふ方がほんたうだと私は思ひます。私は母の一人娘ですから、なにも母をわるく言ふわけはないんです。母にも好いところがあるとは思つてゐます。しかし父が道樂をしたからとて、妾を圍つて置いたからとて、それにあのやうに反抗して、それもたちのわるい反抗をして、一緒になつて家を潰さなくつても好かつたんです。父と母との家庭の悲劇は、だからお互に水と油のやうなとても雜り合ふことの出來ないお互の性質から來てゐるのです。そしてその油と水とを無理に最初に一緒にした田舎の結婚制度から來てゐるのです。』

こんなことをも病妻はかれに言つたことがあつた。

成ほどさうかも知れないといふ氣が此頃では大分かれにもして來た。かれは勿論、この舊家の一粒種の娘の夫ではあるけれども、決して婿ではない。またその後を嗣ぐ身でもない。それに、自分の方から言つても、かうした家の後繼者に自から進んでならうとするほどそれほど魂が落魄れてはゐない。従つて母親の一舉一動が、病妻の眼には餘りに冷淡に見え、また餘りに狡猾に見え、時には、『ひどい母親だ。これだから父親の氣に入らなかつたのだ。これだから一家がかういふ風に没落したのだ……』といふ風に



映つても、かれには餘所の話以上に耳に留つては聞かれなかつた。かれは病妻の籍が自分の方にも入つてゐず、また自分の籍が病妻の方にも入つてゐないのを寧ろ氣安いことに思つてゐた。今でも、宅地と田地三町程はこの家について残つてゐたけれども、かれはそんなものに眼を呉れやうとはしなかつた。瘦せても枯れてもかれは藝術を以て生命としてゐるものである。

しかし病妻の眼から見ると、かれのやうにさう單純には考へられぬらしかつた。かの女はかれの困つてゐるのを知つてゐる。纔かの財産ではあるけれども、これでもかれの藝術家としての隠家とするには足りる。また一方から言つても、かの女が死んでから、矢張此處に、此の故郷に、夫が住んで藝術に親しんでゐるといふことは嬉しいことである。妻としての美しい心の記念のあらはれの一つとするに足りる。かうかの女は一方では思つてゐる。であるのに、母親が嫡女であり一粒種である自分に何の相談もなしに、法律上から言つても當然自分について來る筈の財産を押領したやうなことはかの女に非常に不愉快を感じさせた。

しかし母親は言つた。

『何と言つても、お前の世話是我がしなければならぬんだから……。そしてお前がもしものことがあればあとは私一人ほつちなんだから……』

『何うでも好う御座んす。私なんかどうせ長いことはないんですから……』

かう言つたかの女の眼からは涙が流れた。丁度その最中にかれが入つて行くと、

『母さんは私達のことなんかちつとも思つて呉れないんだから。』

かう言つてかの女は泣いた。かれは一伍一什詳しくその話を病妻からきかされたが、別に心を動かすでもなく、『そんなことは何うでも好いぢやないか。お前の名になつてゐたつて、母さんの名になつてゐたつて同じことぢやないか。何うせ、お前は母さんの世話にならなくつちやならないんだから。』と言ふと、病妻はいよいよ辛さうに悲しさうにして泣いた。『私は貴方の世話になつて死にたい……。母さんなんかの世話にならなくつても好い。』かう歎歎けながら絶々に言つた。

『いくら娘だつて、人の判を勝手に出して押すなんてひどい母さんだ……。さういふことをこの前にもいく度もしたことがあるんですから……』

娘はかう強く母親を非難した。

かれはさうした一家の事情に就いては別に深く心を動かさなかつた。親一人子一人になつても、さうした事情があるといふことや、それも半は自分といふ他から入つて來たものゝあるためだといふことや、母親の身になつたらさう思ふのも道理だといふことや、さうしたことを小説の材料に、または世間の人の心を解剖した形といふ風に思つただけで、却つてさうした境遇にこの身を置いたことを不思議のやうに



もまた面白いやうにも思つた。何も彼も過ぎ去つた。妻と楽しく暮した二三年の間の歡樂、色彩、人にも羨まれるやうな境遇、さうしたことも皆な過ぎ去つた。『奴は戀女房にばかり夢中になつてゐるから藝術が駄目なんだ……』といふ風に言はれたことも今は全く過去になつた。

かれは庭の草を撈り、室を掃除し、持つて來た書物を並べ、机を窓際に据ゑて、あらゆるものから離れたやうにしてのんきに巻烟草を燻らした。

と、一度失はれた藝術の女神が再びかれの身に、魂に、纏つて來るやうな靜かな心樂しさを感じた。昔の書生時分の自由な心持は流るゝやうに溢れて來て、此處で、かうしてゐて、少し落附けば、何んなすぐれたものでも書けさうに思はれて來た。

しかし落附いて筆を執る前に、かれはこのあたりのさまを精しく見て置かうと思つた。で、錆びた大きな沼の方へかれは何ぞと言ふと出掛けた。

かれのゐる離座敷の横から青々とした水田の畔に下りて、蠅斯や蟲の飛ぶ草の露の中を分けて行くと、そこに長く高く連つた土手があつて、その上からは、どんよりしたさびしい大きな沼が一目に廣く見渡された。

かれはいろ／＼な眺めを其處で見た。或は灰色の空のわびしく沼に反映したさま、或は夕日の赤くまともにさしわたつてゐる光景、または空が碧く晴れて、いくらか風のある午前には、蘆荻の一面に茂つ

た緑の中に割草の聲が湧くやうにきこえた。時には舟の一隻も出てゐないやうな時もあるれば、また時には大きな帆が日影を帯びて、大きなスワンのやうに靜かに浮んで行くことなどもあつた。

土手を通る農夫や農夫の上さん達は、何時知つたともなしによくかれを知つてゐて、摩れ違ひながら、丁寧に、

『好いお天氣で。』など、挨拶して行つた。

中には、

『お嬢さんは、何うだな……。ちつとは好い方かな。』

かう馴れ／＼しく聲をかけて行く女などもあつた。此方は知らないもので、好い加減に挨拶して、歸つてからその話をする、

『誰だらうね。』

と病妻は考へて、『いくつ位の女?』

『四十先きだ。』

『丸顔ですか?』

『あ、何方かと言へば丸い方だ。』

『ぢや、貞の家内だ。』



かう傍から母親が言つた。

『貞の家内？』病妻は漸く思ひ出したやうにして、『あゝ作ツていふ女、あの妹と一所に學校に行つたから……』

村ではその舊家の一人娘が病んで歸つて來たといふことが、かなりに噂の種になつてゐるらしかつた。をりをり土手の上や、田の畔で見かける派手なへこ帯をしめた男に就いても、誰もかれも皆な、『嬢さんの旦那』として好奇の眼をかれに注いだ。

都會の空氣にのみ浸つて來たかれの眼には、あたりに見えるものすべてが、景色と言はず、生活と言はず、何も彼も目新しく不思議の世界のやうに見えた。農夫達は皆なせつせと田に島に出て働いた。かれ等は多く跣足で歩いた。

或る日はかれはぢき近くにある榮吉といふ家に行つて舟を借りようとした。

榮吉は幸ひに家にゐた。かれはこの前にも二三度逢つて知つてゐた。

『旦那さん、漕げるけえ？』かう言つてかれの顔を見て、

『あぶねえもんだな……。こゝの沼は川とは違ふで……』

『だつて艦を使ふんだらう？』

『艦にや艦だが、藻が多いでな。櫂の方が漕ぎ好いだ。』

『明いてゐるにや明いてゐるんだらう？ 舟は？』

『明いてゐるにやあいてゐるが……。あぶねえだて、俺も行つてやるべ。』

『なアに、好い。』

『でも、行つてやるべい。何も用もねえだて、今日は……。』

『ぢや、うけでも上げに一緒に行くか。』

『うけなんか、何にも入つてゐない。』

かう言つて小屋から、櫂と艦とを持ち出して、それをかついで、そして跣足で先に立つた。かれは舟の中に布くためのござを一枚持つてその後についた。

土手の上に来て、

『何うも、此頃は湯水だで、あんなところまでしきや舟を持つて來られねえ。』

かう榮吉は言つた。成るほど水は少く、波打際はずつと遠くなつてゐた。蘆荻や蒲葦がざわざわと風に靡いた。

開門のあるところまで土手を傳つて、そこからかれ等は下へ下りた。半ば行つたあたりでは、洲がぐちやぐちやして、ともすると下駄が埋つて了ひさうになるので、かれはそのまゝ、跣足になつた。

舟の繋いであるところに美しく咲いてゐる紫の水あほひを見た時には、かれはふと家に臥してゐる病



妻を思つた。かの女はこれまで何遍その水あほひの美しいことをかれに話したか知れなかつた。かの女はそれを都會の真中で思ひ出してはよく歌に詠んだ。『私が生きてゐる中は、何うか他の女には關係しないので下さい。後生ですから。』かうぢかに口に出してこそ言はないけれども、毎月都會に一二度出て行つて歸つて來た時などには、その眼が、その體が、すべて祈る様にかれに向つてさうした要求をしてゐるのをかれは感じた。かれは悲しいやうな氣がした。ふとその水あほひの花を見てゐると、その感じが漲るやうに溢れて來た。そしてその紫の濃い花の中に、病妻の悲しい戀心が移されてあるやうな氣がした。

舟の中の榮吉は不思議の多い沼の話を開始した。

『何うも餘程不思議なことがある沼でさ。夜なんか漁に出て氣味がわるくなつて、慌て、遁けて歸つて來ることはよくあります。大きな主があるつて言ふが、實際怖かねえやうなことがありますよ。何にも見えないのに、急にざアといふ音がきこえる。瀧でも落ちて來るやうな音ですね。そして眞孤なんか皆な風もないのに、急に一面に靡き出すやうなことがある。俺は見たことはねえが、いやな氣持だ、その時は——。何しろ、古い沼でな、夜なんか随分いゝんことがある。何にもなしに、臭い、臭い、何とも言へない臭ひが通つて行くことがある。さうさな、何と言つて好いかな、死人の臭ひのやうなにはひと言つて好いかな。』考へるやうにして、『それから變な聲をして鳴く鳥がある。それが何だかわからな

い……。漁師なんか、それが鳴くと、もう今日は駄目だと言つてすぐ大急ぎで引かへして來るが、何うもそれが何の鳥だかわからない。ほらの火なんかいつでもよく見えるさ。不思議だよ、あの火は——。その時は藻の中でも何でも底まですきとほつて見えるからね。』

『矢張燐か何かだな。』

『兎に角、夜はあんまり氣味がよくねえ沼だ……。それでも、漁師は夜、うけを置きに行くが、夜は漁があるもんだでなア。』

『古い沼だからな、矢張……。』

丁度その日はいやに曇つて、その灰色の空がびつたりと捺したやうに沼に映つて、水の底にある藻が女の髪でもあるかのやうに氣味わるく漂つた。ベックリンの晝がまたかれには浮んで來た。

かれにはそれが病妻の心とか恨とかに似てゐるやうに度々思はれ出して來た。錆びた水のあるところに、空のひとところ碧く晴れたのがびたりと映つてゐるのも何となく不思議な怖れをかれに抱かしめた。

榮吉の漕ぐ櫂に微かに觸れる藻の音も、何となく女の髪に指でも入れて、そしてそれをしごいてゐるやうな氣がした。

『晝間見ちや、何でもねえが、夜になると、丸で變つて了ふのはこの沼でさ、』と榮吉はつゝけた。『丸で見當がわかんなくなるでな。それは廣いにも何にも……。よく一晚中漕いでも漕いでも歸つて來ること



が出来なかつたなんていふものがあるでさ。ちやんと吉高の森がくろくはつきりと見えてゐながら、いくら漕いでも漕いでもそこに行けねえことが私にもあつた。』

『さうかな……』

『何でも皆な主のする業だつて言ふがな。』

こんな話を榮吉は盡きずにした。後には杉の高い森の靜かに水に落ちてゐるのも無氣味になり出した。吉高の森の下に来て、かれは急いで舟を捨てた。

ふと仰ぐと、大きな黄ろい盆のやうな月が誰かに急に押し上げられたやうに出てゐた。

かれは沼のほとりの複雑した丘陵の中で路を失つて、行つても行つてももとのところに出て來られなかつた。沼が右にあるとばかり思つて歩いてゐると、いつか左にその錆びた色が見えたので、驚いて、それから方向を取つてまた歩き出したが、容易にそれと思はれるところに出て來ない。日はくれかゝる。人には逢はない。人家もあたりに見當らない。と、思ひもかけない坂がある。谷がある。松原がある。鈴蟲が頻りに好い聲で鳴いてゐる。

ふと大きな月を仰いだかれは驚いて立留つた。

こんな大きな月をかれは何時會て見たことがあらうか。またこんな黄い月の光をかれは何處で見たで

あらうか。かれは自分の眼を疑つた。

ぞつとして戦慄した。かれは立ち留つた。

月は無生物ではなくて、現に生きた魂がそこにもあつて、そして自分に向つてかうした不思議を見せてゐるのではないか。愈々かれは怖ろしくなつて來た。あらゆるものが、路が、松林が、畠にころがつてゐる瓜が、すべて自分を脅かして來た。かれは走るやうにして坂を下りた。

幸ひにかれの前を歩いて行く一人の人影が見えた。

急いで追ひついてきくと、

『これを真直ぐに行けば、土手に出る。』

かう教へて呉れたので、命を得たやうにしてそしてまた走つた。

家では歸りが遅いので、母親も病妻も心配して待つてゐた。

『あゝえらい目に逢つた！』

で、その話をする、右に行くべきを左に行き、方向を失つたと思つた沼の光は、別に長く深く入り込んでゐたのであるといふことがわかつた。しかしこの沼の印象と大きな月の印象とは長い間かれを脅かした。つゞいてかれは今まで想像にだも上らなかつた不可思議の世界がかれに迫つて來るやうなのををりを感じた。さながら病妻の心の姿がそれに續いてゐるかのやうに――



水鶏が頻りに鳴いた。

コ、コ、コ、コ、ココ——それは何處で鳴いてゐるんだらうとかれは思つた。そしてまたさうして鳴いてゐる鳥は何んな形をしてゐるのだらうなどと思つた。注意して聞いて見ると、確かにそれは二羽しかゐない。かう思ふと、その鳥が水草の中にかくれて、赤い嘴か何かを明いて、伴侶を終日呼んでゐるさまがそれと想像されるやうな氣がした。

コ、コ、コ、コ、ココ——

日は麗らかに且つキラキラと照つた。青田の稻は風に靡いてゐる。何處かで田草を採つてゐる農夫達の話す聲がきこえる。明るい光線が眩くかゝやきわたつた。

昨夜の夢をかれは繰返した。

病妻は泣いてゐた。そして言つた。

『私が死んだら、誰か他の女が来て貴方のお世話をするんでせうね。』  
と、かれは平氣で、

『それはするだらうさ……』

『だから、私なんか一刻も早く死んだ方が貴方のためにはなるんですね。私が死にさへすれば、貴方

は何處へでも行けるのだから。……貴方は立派な方だから、誰でも喜んで世話をするでせうからね。』

『さうなら、さう思つてゐるさ。』

何故か突放したやうにかれが言ふと、病妻は泣いて、

『後生ですから……何うかさう思はないで下さい。私の持つてゐるものは、魂でも何でも上げますから、私の死んだ後も、他の女には世話にならずにゐて下さい。その代り、いつでも貴方の不自由な時は私が出て来て、墓の中からも出て来て、そして世話をして上げますから……ね、ね、ね……よう御座んすか。私は死んでも決して貴方の傍は離れませんから……何でもはつきりと見てゐますから……』

それについて何か自分が言つたのは覚えてゐないが、困つたな。……さうして執ねく死んだ後までつき纏はれてゐては……と思つて、そして病妻をつき放すやうにした。……病妻はまた泣いた。——と思ふと、夢が覺めた。

コ、コ、コ、コ、ココ、と水鶏が靜かに啼いてゐた。

それからまた一寢入りぐつすり寢て、日の長けるのをかれは知らなかつた。

夢が猶いくらかかれの心に絡みついてゐた。勿論、夢の中で、一生執ねく着き纏はられてゐては困るな！と思つたことは、すっかり消えて、その不安は白日のもとに残なく解けて了つたが、それでもいくらか病妻のことが氣になつて、そのまゝ、雨戸を明けて下駄を突かけて、外に出て、母屋の方を眺めた。



別に變つたことはなかつた。明け放した母屋の一間に蠅を除けるための蚊帳が一杯に吊つてあつて、その中に病妻が枕を高くして落附いて寝てゐるのがそれとはつきり見えた。母親はもう畠に出たと見えて、それに隣つた室には、丸い火鉢に鐵瓶がかゝつてゐるばかりであつた。かれは顔を洗ひに井戸端に行く前に、垣を縁どつて睨いてゐる紅白の木槿などを眺めた。

かれはこれまで三年間病妻を看護したことなどををりをり思ひ起した。思ひ出してもぞつとするやうな光景もあれば、一緒にゐる自分に病氣の傳染するのを恐れて、薄情とは知りながらわざとそれから遠ざかつてゐたことなどもあつた。幾度かその病妻の死がかれに齎らして来る新しい運命について希望の多い眼を明けて見たこともあつた。一昨年も昨年も、『もう今度こそは新しい運命が開ける、』と思つた。しかし、それも遂に開けずに今日までやつて来たことを思つた。此處にやつて来た當座は、その運命が解決しないでも、落附いて自分の藝術を切り開いて行くことが出来るやうな氣がしたが、矢張それは駄目であることが段々知れて来た。相變らず種々なものがかれの頭に絡み附いた。錆びた沼の持つた神祕、田舎のさびしい生活、まぎらさうとしてもまぎらすことの出来ない退屈、一月も行かずにゐると手招きして自分を呼ぶやうに見える都會の賑やかな雑音と色彩、さういふものが絶えずかれを悩ました。かれはそれをまぎらすためにいろいろなことをした。初めは錆びた沼の神祕を一層深く探るつもりで、よく沼

へと遊びに行つた。沼を繞つた丘陵の中をも縦横に歩いて見た。もう今では榮吉からきいたやうな沼の怖しさも思はなければ、丘陵の中に路を失つて歸りをまごつくやうなこともなかつた。次第にかれは田園の懶惰な生活などにも眼を開いて来た。

もた、かれは馬を引出して乗つて見た。今までさうした経験がないので、初めの中は、それが非常に興味を惹いた。毎日、土手の上を飛ばしたり何かしたが、一月二月経つ中には、それにも倦きた。今でもかれは原稿を急いで郵便に託する必要がある時は、馬に乗つてA町の停車場まで出かけては行くが、平常は乗つて見ようとする氣も起らなかつた。

病妻の許にも、をりをり見舞の客があつたり、小包で物品を送つて来るものがあつたりすると同じやうに、かれの許にも、若い筆を持つ女から手紙が来た。その女はかれの周圍にある多くの色彩の中では、一番遠いやうでそしてまた一番近いやうな惑星であつた。その手紙にはいつも、『奥さんはいかゞですか』と書いてよこすが、その質問は普通の見舞の言葉のみではないことはかれには餘程以前から知れてゐた。新しく開かれて来る筈の運命、それは何んな運命だか、かれにはそれは想像は出来なかつたけれども、しかしその中に何等かの形でその若い女が入つて来るには相違ないと思ふと、その手紙もむざと捨て、了ふのは惜しいやうな氣がした。

それと相對して、妻は垂死の床に臥してから、よく昔の戀した男、また戀された男、つまりかれ以前



の人達から、手紙やら小包やらで種々と慰藉を受けた。健全なかれの妻である中は、決して受けることの出来なかつたやうなやさしい悲しい手紙をもかの女は貰つた。何うかするとかの女はその手紙を顔に當て、長い間歎かしてゐた。

妻の日記の中には、それがよく書いてあつた。『Sより手紙——悲しさに胸塞がる心地せらる。』こんなことが書いてあると思ふと、『この君の若き時は美しき君なりし。角帽に金釦、路ゆく少女の振り返らざるはなかりき。』などと書いてあつた。かれはしかしそれについても別に何の心をも起さなかつた。かれは唯あはれさを覺えた。

『昔の戀人からのお見舞だね。羨しいもんだな。』  
半ば戯談にかれは言つたりした。

しかもかうした中にも、病妻が夫と母親のことに就いて、唯そのために心配してゐるさまはかれにもよくわかつた。かの女は歌に託してその心をかれに示した。

『退屈したでせうね、もう……』  
ある時かうかの女は言つた。  
退屈し切つてゐるけれども、田園のさびしさに、慰むものゝないのに、すつかり退屈して了つてゐるけれども、しかもそれを面にあらはさずに、

「いや——」

『この頃は馬もお倦きになつて？』

『倦きたといふわけではないけれど……』

『沼には？』

『さう、沼にばかりも行つてもゐられないからね。』

『矢張、都會が好いのね。田舎は駄目ですね。』

『さうばかりでもないよ。』

『落附いて、此處にゐて下さるやうにして下さると何んなに安心だか知れないんですけれど……』

『落附いてゐるよ。』

『何かお書きになつて？』

『何か書くよ。』

『いつまでも、いつまでも此處にゐるやうにして下さると好いけれど……』

かの女は軽く溜息をついた。

『お前の心持はよくわかつてゐるよ。さうまで僕のことを心配して呉れるのは嬉しいけれど、どうせ、何うにもならないことだから、餘り心配して熱でも出さない方が好いよ。』



『母さんだつて、今はあゝして強情でゐるけれども、里の方にも、さう頼りになる人はいないんだから、一人になつたら、可哀相だと思つて……』

『でも、母さんは、母さん一人の方が好いんだよ。』

かう言つたが、『しかし、もうそんな話はやめだ。』

秋は深くなりつゝあつた。鶏頭の赤いのが垣を彩つて、影の濃い午後の日光線が人の心に染み透つた。夜は天の川が白くさやかに仰がれて、來た時の蛙の聲の賑やかであつたのに引きかへて、今は蟲の聲が到る處に満ちた。馬追が病妻の蚊帳の外の灯を目當てに飛んで來たりした。

沼には碧い空が靜かに映つた。あたりの空氣が晴れてゐるので、二月ほど前に見た眺めとは非常に變つて、鑄沼は矢張鑄沼ではあれけれども、何處となく爽やかに、鮮やかに、そこに影を涵すものがすべてインプレッシイブにくつきりと際立つた。眞菰と蘆の繁つたなかを舟が一隻二隻漕いで行くのも見えた。

『秋だ！』

かうしんから思つて立つてゐるかれの顔を夕日は明るく照した。

平生は懶情に暮してゐる人達も此頃では皆な働いた。いつもかれの相手になる秀といふ土手の上の半ば痴呆に近い男すら、大勢の人達に難つて野で働いた。村のところどころにある、夏中は農夫達の酒を

飲んでゐる姿をよく見かける小さな汚い料理屋も、すっかり閉ぢられて、白粉をぬつた女の姿も何處に行つたか見えなくなつた。しかしそれもほんの纒かで、『なアに、またすぐあいつ等はやつて來ますよ。村の忙しい間だけ町の方へ行つてゐるんですよ。』など、人々は話しに。

半年の間に何も彼も、初めはめづらしかつたかれ等の生活も、鑄沼の中にかくれてゐるミスチックな氣分も、沼の周圍をめぐる複雑した丘陵も、その丘陵の底深く埋れたやうにして文化に後れてゐる村々の状態も、今ではかれにはすっかり飲み込めて來た。かれは依然としてまだ筆に親しめない人であつた。三四枚書きかけたのをそのまま放つたかして置いて、病妻の看護をしたり、母親と沈黙の争鬭を續けたり、舟を漕ぎ出したり、皆なの忙しい中をのんきさうに釣竿の綸を垂れたり、そこからそこへとはてしない冥想を抱いて逍遙つたりする人であつた。かれは沼を渡つてS市に行く街道の渡場の休茶屋の亭主や上さんにも懇意になれば、此方の臺地から泥川のやうに見わたされる沼の畔の古い寺の老いた僧とも知己になつた。吉高の城址の大きな松の聳えてゐる下では、かれはよく夕日の沼を明るく染めるのを見た。

かれは此處等に生息した昔の武士達のことなどを頭で浮べた。S市の附近にある千葉氏の根據となつた大きな城郭の址、それを取巻いて、四十八もこの附近にそれに屬した城壁があつたといふことは、かれにいろいろなことを想像させた。矢張その時分にも種々なことがあつたのであつた。忠義の侍婢が



不幸な若い主人の危難に赴いて、捕へられて殺された跡には、小さな祠が残つてゐて、子供の百日咳に靈驗があると言つて、遠くから人々が參詣した。その祠はお信さまと呼ばれた。それは侍婢の名で、かの女は若い主人を遠く遁れさせて、そして蘆荻の深く茂つた中に身を躲した。追手は迫つた。恐らくちつとして靜かにしてゐたならば、かの女はその繩目の辱めを免れたであらう。然るに、不幸にもその時小さな咳が出た。そしてかの女は発見され捕へられて殺された。かれはさうしたことが百日咳の靈驗のある小さな社として今日に残つてゐるのを面白いと思つた。その祠の前には小さな旗が無數に上げられてあつた。かれはよく其處等を歩いた。

丘から丘へ續いてゐるところに、こんもりと深く茂つてゐる松の林があつて、それは沼の畔からよく指さされて見えてゐるが、殊に夕暮近い空には、松の幹の黒く浮き出すやうになつてゐるのがかれの離座敷の縁側から繪のやうになつて見えてゐるが、そこにもかれはよく出懸けた。その祠の傳説もかれにはなつかしかつた。帝の寵愛を一身に集めた妃が、一朝癩を病んで世をはかなんで、此の田舎に身を躲してゐるが、その精進に、効があらはれて、數年ならずして、すつかり病が癒えて都に歸つたといふことであつた。またもう一つの傳説は、其處に祀られてゐる姫は、戀のために、高貴の身を捨て、一生こゝに農夫の妻として終つたその跡を後の人の祀つたものであるといふことであつた。かれはコルシカの島に一生を終つた『幸福』の老夫妻のことなどを頭に浮べた。かれは蟬の鳴き頻るその涼しい祠の木蔭

に、時には外國の小説などを持つて來て半日を暮した。

ある日は其處で、小學校の女教員とかれは懇意になつた。『まあ、さやうでゐらつしやいますか。おなつかしい。』と言つて、女教員はぢつとかれの顔を見た。女教員は文壇に於けるかれの微かな名をも記してゐた。かの女はノオトに書いた歌などをかれに見せた。

かれはその女教員の通勤してゐる谷の底にあるやうな小學校を想像した。それは緑の影の濃やかな松林の中か何かにあつて、そこからかの女は坂を登つて、豆島の傍を通つて、沼の見えるところへ出て、そして此方へとやつて來た。かれはフランスのすぐれた短篇作家の作品の中のシーンを思つた。つゞいて誰にも知られずに忽ち出來て行く二人の仲を想像した。これがもしあらゆる道徳をも、またあらゆる反省をも忽ち破つて了つても悔いなくやうな美しい女であつたならば……なども思つて見た。しかし、いつもさうした場合に大きな障碍物であるやうに、矢張その場合にも、沼の畔の家の蚊帳の中に仰向けに枕を高くして寝てゐる病妻がかれの眼の前に大きく映つて見えた。

かれは佗しかつた。生きてゐる中ばかりではなしに、死んでの後も、かうしてかれの眼の前に病妻はあらはれて來はしないか。はつきりと大きくあらはれて來はしないか。そしてかれの新しい運命の開けて來るのを礙けはしないか。いつまでも、いつまでも、死にまでかれはその病妻の枕を高くした蒼白い蠟のやうな姿につきまちはられて行かなければならないのではないか。……かう思つたかれはあらゆる



色彩も、あらゆる歡樂も、あらゆる生命も、とうの昔に失はれ且つ奪はれてゐる自分を發見したやうな氣がした。

淋しい淋しい氣がした。

『貴女のお家は？』

『この下のYで御座います。きたない家ですけども、御散歩の時には、お寄り下さいませな。』

『貴女のお勤めになる學校は？』

『Tの學校です。』

『ぢや、まだ遠いんですね。』

『いゝえ、こゝから十五六町しきや御座いせんが……ちと、學校の方へもお遊びにお出で下さいませ。』

丁寧にお辭儀をして、そして祠の境内を劃る松林の草路の中にその姿をかくして了つた。かれは女の姿の見えなくなつたあとの草や木に午後の日の濃い淡い影がチラチラと搖いてゐるのを見詰めた。かれは持つて來たエルハアレンの詩集にやがて眼を移した。

かれが病妻のよく歌に詠む故郷の沼に添つた松蔭の寺を訪問したのも、矢張かうした散歩の次手であつた。これまでもかれは度々その近くを散歩したことはあつたけれど、つひぞ一度もそこに行かうと

思つたことはなかつた。其日は不思議にもかれは其處に行つて見る氣になつた。そして松蟲や鈴蟲の鳴いてゐる草路を松山の方へと折れて、そして向うにそれと見えてゐるこんもりとした寺に向つて歩いた。一番先きに大きな山門が眼に映つた。長い草路の向うにある山門、屋根を蘆で葺いた古い古い山門である。蟬の喧しく鳴く聲があたりに響き渡つてきこえた。

かれは靜かに山門を入つて、鋪石道の兩側に綺麗に草花の咲いてゐるところを通つて、そして奥にある本堂の前へと行つた。流石に千葉氏時代からある古い寺だけあつて、構へも大きく、庫裡も廣く、掃除も行き届いて、樹の影が涼しく蔭をつくつてゐた。沼から來る風が涼しく兩方の袖に満ちた。

あたりはしんとしてゐる。

寺僧の姿が庫裡にちよつと見えたけれども、話をするのが面倒臭いので、そのまゝ普通の參詣者のやうな顔をして、ぐるりと本堂を廻つて、矢張涼しい樹の蔭の多い墓地の方へと向つた。

突然沼がキラキラと日にかゞやいてゐるのが眼に映つた。

かれは墓をさがすのも忘れて、その眺めに引き寄せられるやうにして、暫し立留つた。

成ほど病妻が口癖のやうに、沼の畔の寺と言つたのは無理はないと思はれた。丁度ここからは吉高城址の松は右になつて、廣い錆びた沼が、いろいろな不可思議のある沼が、此處が一番廣いかと思はれるやうに打開いて眺められた。墓となるならば、實際、都會のせゝこましい、借家住ひのやうな青山の墓



地に埋められるよりは、何れほどひろびろとして、清々して好いか知れないとかれは思つた。

かれはやがて何の面倒もなしに、病妻の家の歴代の墓地の前に立つことが出来た。村で舊家と言はれ、一時は殿様のやうな尊敬を受け、現にこの寺にもいろいろなものやうなものを寄進した家の墓だけあつて、規模も大きく、石碑なども高い大きな臺石の上に建てられたやうなものが多かつた。病妻の父親の墓——それは遺言では東京に埋めて貰ひたいといふことであつたが、親類の意見で、矢張その骨を此處に持つて来たといふ話がかねてきて知つてゐるが、それがやゝ新しいだけで、祖父のも祖母のももうかなり古く、青い苔が一面に封ぜられてあつた。かれは舊い家といふことを思はずにはゐられなかつた。またその舊い家が病妻だけで全く絶えて了ふことを思はずにはゐられなかつた。かれにはその一粒種の、またはその大きな家の最後の一人である病妻の死んで此處に葬られて行くさまが、既に事實としてあらはれてゐるかのやうに見えた。そして一時の人々の涙、花やかな葬式、七七日の讀經、その後は寂として全く藪苔に封じて了はれるのも眼に見えるやうな氣がした。

かれは無論、そこには一緒に葬られない。……かれの墓はまた別にある。否、墓にかれがなるまでにはまだいろいろな色彩がかれを取巻き、いろいろな生活がかれを豊富にし、病妻一人がかれを占領するこの出来ないやうな巴渦が、歡樂が、悲哀が、つきつきにかれにやつて来るに相違なかつた。かれはそこでは松林の小さな祠の中で此間思つたやうなかなしいかれの將來の生活を考へることが出来なかつた。か

れは病妻と最初に暮した三四年の樂しかつた歡樂を不思議なやうな心持で振返つて見た。

かれは黙つて立盡した。

歸つてから、『今日は初めて家の寺に行つて見た。』かう軽い調子でかれが言ふと、

『さう！』

と病妻は言つて、ぢつとかれの顔を見て、何か言はうとした。しかしその言ふことが、口に出しては厭味になり皮肉になり、または突詰めた暗い壁になるのを恐るゝやうにそのまゝ黙つて低頭れて了つた。かれも悲しさの身に迫つて来るのを覺えた。

かれと病妻の前には、靜かな冴えた秋の夜の空がひろく展げられてあつた。垣根には蟲の聲がすだき、涼しい風は沼から來て、星屑のキラキラするのがさながら金屬性の破片の散らばつたやうに見えた。蚊はもう數へるほどしかるなかつた。垣を越して灯が二つ三つチラチラした。

天の川が白く、さながら手に取るやうにはつきりと仰がれた。

仰向けに寝てゐる病妻も、今宵はいくらか機嫌も好く、熱も低いといふ風でいろいろと昔の幼い頃の話などをした。

『随分、私はこれでいたづらな見でしたんですつて、これで……』



こんなことを言ひながら、學校から歸つて来て、よく水あほひや、みそ萩などを水邊に採りに行つたことを病妻は話した。

『祖父さんつて言ふ人がやさしい人で、それに、孫つて言つては、私一人しきやなかつたもんですから、それは可愛がつて呉れたんですつて……』

『覚えてゐるかえ？』

『覚えてゐますとも……』すぐ言葉をついで、『莞爾した、それは好い人でしたよ。祖母さんつて言ふ人は、何方かと言へば、怖いやうな人でしたけれど……』

『祖父さんつて言ふ人はそれでも豪かつた人なんだね。』

『豪いつて言ふこともなかつたでせうけれど、曾祖父さん時分が一番盛んで、下男が十五六人も始終ゐたつて言ふんですから、祖父さんの時代も人に立てられた時代だつたんですね……母さんが嫁に來た時はそれは大したもんだつて言ひますからね。』

向うに坐つてゐた母親は、

『里も今のやうぢやなかつたからね。』

『さうですつてね、母さんの里も、その時分は大したもんで、舊家と舊家とで、それで縁組をするこゝとなつたんですつて……そしてその母さんの來た翌年には、もう私が出来たんですから。』

黙つてゐる三人の間を時の榮枯盛衰が悲しく緩をなして織り雜るのを誰も感じた。しかも誰もその問題には今更觸つて見ようとはしなかつた。

『お前はその時分から弱い、むづかしい子だつたよ。』

『氣むづかしやだつたんでせうね、屹度……誰がだまして言ふことをきかないで、長い間泣いてゐたことを覚えてゐますよ。』

『さうさ、一番困つたのは、あの時分ゐた幾さ。お嬢さんのむづかしやには困る困るつて言つてゐたからね。』

『さうでしたね。幾といふ肥つた女中がゐましたね。あれは何うしたでせう。』

『何うしたかね。N町へ嫁に行つたまでは知つてゐるけれども。』

また沈黙がその間を縫つた。金ぶんぶんが一つ灯を目がけて飛んで來て、それがぐるぐると座敷の中を飛び廻つた。かれは立つて行つて團扇でそれを落した。

ふと、病妻は母親に訊いた。

『何うして父さんは北海道に行くやうになつたんでせうね。』

『何うしてつて、別に……』

それを説明するには、餘りにいろ／＼な事情が纏綿してゐるといふ風に、またはそれをはつきりと娘に



わかるやうに言ふには容易なことではないといふやうに母親はそのまま言葉を切つて了つた。

『北海道に行つた時分のことはよく覚えてゐますよ。私は喜んで行きましたね。』

『……………』

かれはかうして一家團欒して話せば、母親と自分の間にも何の障碍もなく、真心と真心で相對して話すことが出来、自分と病妻の間にも水臭いやうなところは微塵もなしにゐられるのに、さて一步深くお互の心中に入れば、てんでに解け難いこだはりを持つてゐて、何うすることも出来ない別の身であることをつくづく思つた。

病妻は起き返つて見たりした。

『あゝ天の川がよく見える。かうして天の川を昔はよく見たものだねえ。貴方、矢張かうした平野の方が天の川はよく見えますね。海よりも……』

『海でも見えるんだがね。』

『さうですかしら？ でも、矢張、子供の時に見た印象がはつきりしてゐるから、何だか一層なつかしいやうな氣がしますね。』

母親は甜瓜の遅く出来たのを持つて来てそして皮を剥いた。

『かうして、よく瓜を剥いて食つたもんだ。』いかにもなつかしさうに病妻は言つた。垣根の蟲は頻りに鳴いた。

暫くして、瓜を食つてから、

『貴方、此頃、少しは出来て？』

『何が——？』

『書くものが……』

『書いても、何うも旨く行かん。この間の奴もまた破つて了つた。』

『何うしてでせうねえ？』

『書くよ、書くよ。』

かう早口にかれは言つた。

かれは此處に来て既に久しくなることを思つた。かれはいろいろなことをした。此處等で出来る食物——沼から獲れる鰻、それに、んにくの磨つたのをつけて食ふことも知れば、川蝦の天ぶらの旨いのも知つた。西瓜、甜瓜、さうしたのも都會ではとても味ふことの出来ないものであつた。かれは今度こそは自分の運だめしをやる作物に取りかゝらなければならぬと思つた。昨日来た都會の友達からの手紙——それには、新しい氣運の熟して來てゐることや、誰れも彼も熱心に自分の藝術を築き上げることに ついて真劍になつてゐることや、新しい表現に苦心してゐることや、その他いろいろなことが書い



てあつた。そしてそれ等はすべてかれの勞れた心を鞭打ち、遊惰勝ちの生活を改めさせるやうな新しい刺戟性のあるものをそのかけに持つてゐた。昨夜一夜、田舎に埋れてはならないことを考へて眠られなかつたことをかれは思ひ出した。

空は昨日あたりからいくらか荒模様になつてゐた。日は麗かに照つてゐたけれども、颱風は近く迫つて來てゐると覺しく、かなり強い風が吹いて、ちぎれたやうな白い雲が早く早く碧い空を掠めて通つて行つた。

丘陵の方の空から、集團をなして押し寄せて來る雲のために日影はをりをり翳つては晴れ、晴れてはまた翳つた。それに、昨夜、急に、發熱した病妻の檢温器は、近頃をめづらしいほどの高度を示したので、母親はじめかれも大騒ぎをして、人をA町まで走らせて、氷を買つて來て、氷嚢に入れてそれで頭を冷やしたりなどした。風のために高く捲きあげられる蚊帳の爲めに雨戸を二枚ほど引いて、細目にそれを明けてゐるのが此方から見えた。

『あれなければ好いが……』

『何うも一荒れやつて來さうだ。』

かうした聲が其處此處に聞えた。

昨夜は風の方が強く、白箭のやうな雨がをりをりやつて來るには來ても、それも時の間に晴れて、月が白銀のやうな光を濡れた草木の上に漲らせたりした。その間をかれは遅くまで病妻の傍についてゐて、少し落附いたのを見さだめてから、離座敷に來ていつものやうに臥床に就いたが、ぐつすり寢込んで了つて、今朝目を覺した時は、最早時計は十時を過ぎてゐた。見ると、空の様子は益々險惡で、風は強く、雲脚は早く、雨戸を明けると雨は土砂降りに烈しくばらばらと障子を打つた。田も、稻も、土手もすっかり濡れて、凄じい雲は湧くやうに鼠色をした沼の方から簇つて來た。

樹の鳴るやうな、または灌津瀬の漲り落ちるやうな、一種凄じい物音は、何處からとなく襲つて來て、ある恐ろしい暗示がかれの弱い心を脅かすやうにした。かれは一度明けた雨戸をびつしやりしめて了つた。

それでもかれは病妻のことが心配になるので、到底傘はさゝれない土砂降の中を、土藏に添ひ、または小屋に添ふやうにして辛うじて母屋の方へ行くと、そこにも風雨の襲來は夥しく、雨の洩れるところどころを金盥やバケツで受けて、雨戸をしめ切りにして、母親と病妻とが小さくなつてゐるのを見た。

矢張終夜眠れなかつた様子で、病妻は熱のかなりにあるらしい眼を明いてそしてかれの入つて來るのを見た。かれは黙つて傍に行つて、そこに置いてある檢温器を手を取つた。

熱は三十九度と少しあつた。



此方に來ると、母親は、

『氷がもうなくなつたがな。作に行つて貰はにやならんが——』

『さうですね。』

かう言つたが、この荒れでは、とてもA町まで行つて貰ふことなどは出來ないのはわかり切つてゐた。この烈風強雨を衝いて、あの長い土手をA町まで誰れが歩いて行くことが出來ようかとかれは思つた。風雨はまた一頻り荒れに荒れた。ゴオと風の吹き寄せて來る時には、家屋も揺ぐばかりに思はれた。

『土手が切れんけや好いがな。』

餘りに荒れが強くなつて來たのを見て、心配さうに母親は言つた。

『切れ、ば、何方が切れるんです。沼の方からですか。それとも川の方からですか。』

『何方が切れても大事だ。』

折角丹誠に丹誠をして、漸くこれまでにした稻を、この一荒れのために滅茶々にされて了ふのを心から心配するやうにして母親は言つた。

雨戸を細目にあけて、をりをり戸外を覗いたかれの眼には、稻が倒れ、樹の枝が飛び、水が既に街道にまで上つて來てゐるのがそれと明かに映つた。沼の方を望むと、凄じい黒い雲が集團をなして迅く迅く渦巻いて來る中に、一種怖しい物音がきこえて、今にもそこから危難が押し寄せて來るやうに思はれ

た。かれは此方に來て、

『もう水が來たやうですよ。』

『さうかえ。』

驚いたやうにして母親は立つて其方に行つたが、それと殆ど同時に、サツと一吹き吹き捲つて來る風と共に、病妻の寢てる向うの雨戸は一枚外れて、蚊帳に凭れるやうになつたと思ふと、白い珠のやうな雨は凄じく病妻の枕元に降込んで來た。

『あ……』

とかれは叫んで、そのまゝ立つて、もう一枚外れようとしてゐる雨戸を押へた。暫しの間に、病妻の枕元も、蚊帳も、蒲團も、またそこに立つてゐるかれもぐしよ濡れになつた。

病妻はよろめく脚を辛うじて立つて、その風雨の襲つて來るのを室の一隅の方へ避けた。

突然土手の切れたのを報ずる半鐘の音が凄じく聞え出した。



## 再生

半は丘に凭つた小さな寺の庭から眺めると、野はひろく、と一目に見わたされて、その中を流れる川水に夕日がキラキラとかゝやき、更にその向うには、雪を載せた山巒が時には白く、時にはほの赤く、時には紫に、また時には全く暗褐色に包まれて見えた。夏の午後などには、そこから雲が湧き出すやうに無限に渦まき上つて、忽ちにして空を蔽ひ、野を蔽ひ、凄じい雷聲と共に銀箭のやうな驟雨が横さまに林や丘や草藪を掠めて通つた。

その寺は今田舎寺になつて了つて、誰も顧みるものはなかつたけれども、それでもその本堂の構造には、長い年代を経たあとが残つてゐると言つて、好古癖のある好奇な旅客は、何うかすると、をりをり其處に訪ねて来て、新たに其處に入つて来た無學の住職を困らせた。

ある時、面倒臭がつてゐるのを無理に頼んで、いくらか金などを紙に包んでやつたりして、漸く本堂

の奥の佛龕の中に入れられてある不動明王の小さな像を拜させて貰つた二人づれの旅客は、此方に出て來ながら、

『立派なものだ。』

『國寶の價值がある。』

など、言つて、頻りに住職の無學を罵つてゐたが、かれ等の言ふ所に由ると、その像はたしかにF將軍の守り本尊にして置いたものに相違ないといふことであつた。歴史や古文書に書いてあるところを綜合して考へると、F將軍没落の後、その家來の一人がこつそりその持佛をその城から持ち出して、山を越して、この地方に来て、小さな寺に安置したと書いてあるが、それは地理から推し、當時の状態から考へて、何うしてもこの寺でなければならなかつた。かれ等はその遠い時代の光景を頭に繰り返しながら、靜かに寺から平野の方へ下りて來た。

かれ等の眼には、山を越して凄じく災上してゐる城のさまや、鎧や兜を着けた武士が互ひに斬り合つてゐるさまや、鎗の穂のキラ／＼と夕日にかゝやくさまや、被衣を着た姫達が裏口から丘づたひに難を避けて此方に来てゐるさまなどがはつきりと一つの繪卷か何ぞのやうになつて見えた。かれ等は全く數百年前の空氣の中に呼吸してゐるやうな氣持で、或はその時分にもかれ等は何等かの状態で生きてゐて、そのF將軍没落の一齣の中に働いてゐたやうに思はれた。或はその主人の持佛を此處まで持つて來た家



臣の中の一人であるやうな気がした。

『でなくつちや、こんな山の中の寺の不動明王が僕等の體に蘇つて來るわけはない。誰も知つてゐない、また誰も知らうともしないその不動明王の記事が僕等の眼につくといふことが、既に第一に不思議だ。何等かの縁故がなければ、細かい、人の智慧ではわからないあるものゝ要求がなければ、さうした考へが君なり僕なりに起つて來るわけがないぢやないか。』

『さういふ氣はするにはするがね。』

かう一緒に歩いてゐた一人の旅客は言つた。

『何うも不思議だ。』

『兎に角、かうやつて訪ねて來るといふことに意味があるにはあるね。此方の心にさうした感じが先づしたのか、それとも亦あの數百年を塵埃の中に埋れた不動明王の方にさうした意志が起つたのか、それは何方だかわからないが、兎に角、僕と君とがこゝに訪ねて來て、何うしても見せないといふ頑なな和尚をも説破して、あれを見たといふことは不思議だね。』

『本當だとも……』暫し考へて、『そればかりではないよ。さういふことは世間にはいくらもあるぢやないか。吾々の生きてゐる實際にもあるぢやないか。』

『さう言へば、さうだ。』

こんなことを言ひながら二人の旅客は野の方へ出て行つた。

何百年となく其處の暗い佛龕の中に埋められるやうにして残つてゐた不動明王の小さな像、その像の方にさうした意志が起つて、そしてその二人の旅客を引き寄せたといふ考へは、單に、徒らなロマンチックな空想か。否、その不動明王ばかりではない、そこに無數に残つてゐる墓、その石の墓にもさうした意志があるといふことを想像するのは、つまらない荒誕な空想であるか、否か。

## 二

新しく住職になつた無學の僧は、さうしたことについても何も知らない。また知らないのも無理はない。しかし、長い間にはその寺にもいろ／＼なことがあつたに相違ない。悲劇もあれば喜劇もあり、また無數の人達の煩悶懊惱もあつたに相違ない。埋れた未死の心もあつたに相違ない。その僧の入つて來た時は、寺は大破して、屋根には雨が漏り、壁は落ち崩れ、残つた寺の寶と言ふやうな物もなかつたけれども、それでも古い文書などは大きな古い葛籠に一杯に残つてゐた。僧は一度はそれをひつくり返して見たけれども、そんな紙屑は何うにもならないといふやうにして――さうかと言つてこの寺についたものを無闇に賣つたり何かするでもない。それも金目にでもなるものならだが、爲方がないといふやうにして、そのまゝ、本堂の奥へ押しやつて了つた。



しかもその古い葛籠の中の、ほろ／＼になつた古い文書の中には何があつたか。

仔細に見たならば、また然るべき歴史家乃至考古學者が見たならば、驚くべき新しい発見がそこにあるはしなかつたか。新しい発見以上に、驚くべき人生の悲喜劇が其處にありはしなかつたか。

『人は生きてゐる時代しか知らないものである。時代から時代へと移つて行く境目などは、人は念頭に置かないものである。』かう誰か言つた事があるが、何うしてかう人間は昔を念頭に置かないのであらうか。過去や將來を無視して、現在のみで生きて行つてゐるのであらうか。何故、人間は、『今さへ好ければ好い』のであらうか。過去や將來などに心を勞してゐては、現在を十分に生きて行くことが出来ないやうに人間がつくられてある爲めか。無學の僧が一目見て、その古い文書をまた元の塵埃の中に押しやつたのも決して無理ではない。

しかしその古い文書にも、果してさうした重要な記録があつたか何うかそれはわからない。或はその古文書の更に更に數代前のものゝ中にでなければ、その事蹟は書いてなかつたかも知れない。平凡な寺の田地や財産のことであつたかも知れない。——しかも驚かるゝことは、この寺などは、僅かに昔のほんのほんの一部が残つたもので、この下に横はつた広い一帯の地は、曾ては一度大きな繁華な城市の跡であつたのであつた。あらゆる人間が、或は榮華をつくし、或は悲涙に咽び、或は戀ひ、或は死し、或は泣き、或ひは笑つたことのあるところであつたのであつた。地獄と極樂とが曾ては一度完全にその繪巻を

其處に展開したのであつた。

あとには草が生え、林がしげり、全く原始時代の野が榮えた。

## 三

今から百年ほど前であつた。その昔の城市の址は、ある人に由つてかなり詳しく研究されたことがあつた。それはF將軍遺蹟志といふ六七百枚の冊子であつた。

その冊子に由ると、こゝには御所といふ名のついた大きな建物が七つまであつたといふことである。少くとも東は向うの山裾まで、西は折れ曲つた川の流域まで、南はずつと平野に、北はその寺のある丘の下まで、市街やら、城壘やら、人家やらが、陸續として連つてゐたといふことである。その繁華は實に驚かるゝものがあつたに相違ないとのことである。

平泉のやうに、または奈良のやうに、あれほど規模は大きくないにしても、少くともそのF將軍の勢力は、その附近十數里の地を壓して、誰もそれに對抗するものはなかつたに相違なく、『帶甲十萬、山河の固め嚴かにして、容易に他人の窺ふことの出來ざる』すぐれた城邑であつたに相違なかつた。唯、その年代が或は平泉などよりもつと古いがため、またはF將軍一代の榮華だけで、忽ち烟のやうにあと方がなくなつて了つたために、後まで細かいことが傳はらなかつたに過ぎないのであつた。



その冊子をつくつた人の生きてゐた時代にも、もうその址は、別に何も残つてゐなかつたらしく、またそこに住んでゐた人達の口碑にも、唯僅かに断片零語が傳はつてゐたゞけであつたらしかつた。

しかもその冊子の作者はいかに熱した心を抱いてその址をさがして歩いたであらうか。また埋れたまざまの心をそこからさがし出さうとして骨を折つたであらうか。少くともその作者に取つては、一條の小さな流れも、土に埋れた石も、細く通じてゐる道路も、すべてみな徒爾に見過して了ふことが出来なかつたに相違ない。或はロオマのルウインを彷徨ふ歴史家以上に心を一木一草に留めたかも知れなかつた。また、或はその埋れた心の蘇つて來るのに逢つて、涙を流したり、深い悲哀に鎖されたり、人生の短く、事業の徒らなるを慨いたかも知れなかつた。

時にはかれは丘の上のほつて行つた。そして寺の墓石をさがした。また時には全くその廢址に捉へられた人のやうに、または廢址の中に夢を見てゐる人のやうに、田塍から田塍の間を歩き、林から林を傳ひ、草藪のさゝやきにも耳を敏て、鳥のなく音にも心をとゞめ、風の音にも月の光にも限りない心を寄せた。かれのさびしい心と、初夏の新しい緑葉から落ちて來る光線と相映對した。

村の人々も段々かれを相手にしなくなつた。『何の夢を見てゐるだが。』初めはいくらか信じかけた人達も、終にはこんなことを言ふやうになつた。ちよつとはめづらしいが、忙しい世の中には、そんなことは何うでも好いのであつた。それよりもつと忙がしく働いたり、考へたり、また楽しんでゐるものが

澤山にあつた。昔の人達のやつた悲しいドラマよりも、またはさうしたロマンチックな芝居で見るやうな武士や姫達の運命よりも、それよりも自分達の運命の方がてんでに痛切に考へられた。『宅の爺さんにも困つたもんだ。』かれの息子もこんなことを言つた。

それに留らなかつた。中にはそれ以上にかれの考古癖、研究癖を馬鹿にして、『そんなことがあつて堪るかや。皆なあの人に見てゐる夢だアな。平泉以上だなんて、そんなことがあるかや。矢張、わが佛尊しでな、あゝいふ人達は、ドシンドン平氣で名所古蹟をつくり出すでな。』こんなことを言ふものさへ出て來た。

従つてそのF將軍遺蹟志は、世に傳はらなかつた。勿論、その頃は、今のやうに便利な活字もなく、それを版に起すにしても、容易なことでは出来なかつたためでもあつたらうけれど、せめて寫本の一部や二部は書き傳へ寫し傳へて持つてゐるものがあつても好いのであるのに、また、さうしたかれを親に持ち、祖父に持つた子孫達は、せめてその原本だけでも、家寶として珍襲愛藏して置いて然るべきであるのに、書目だけ残つて、またはその原本を見た當時の人々の口碑だけ残つて、一部も世に留つてゐないのを見ると、ある時、ある日に、その大切な一生の心血をそゝいだ冊子は、他に邪魔な反古と一緒に平氣で紙屑買の手に渡されたと思はれなかつた。



## 四

工川の一戦で破れたF將軍は、もう何うすることも出来なかつた。敵は東からも西からも押し寄せて来た。城まで引く前に、もう一度快く戦はうと思つた軍略も、味方の一部の裏切のために、すっかり齟齬して、城さへもう十分に守ることが出来ないやうな運命に墜ちて了つた。

恐るべき混乱と狼狽と疲労とがあたりには張り渡つた。

いかなる英雄も、ナポレオンも、カイゼルも、信長も、誰も彼も征服被征服の心の立場に立つてゐるものゝすべて味はなければならぬ時がF將軍にもやつて来たのであつた。人を押したものは必ず押される。戦を好むものは必ず剣に斃れる。勝利もつひに絶對の勝利ではない。今はその時だ。もう何うすることも出来ない。萬能を信じた身にも今はその身の處分さへ出来なくなつて了つた。あらゆる歡樂も幸福も榮華も夢となつて了つた。F將軍は凝と城櫓の上に立つて、雲霞と簇つて押し寄せて来る敵の軍勢を眺めた。

其處にも此處にも火が起つた。十年の年月を費して構へ起した城壁も邸宅も皆すべて焔に包まれた。最愛の妻子とも別れなければならぬ時、さまざまの欲望をも何も彼も捨て、了はなければならぬ時、自分で自分の處決をしなければならぬ時が来た。恐らくその時は悲慘な光景であつたであらう。歴史上にあるあらゆる没落の光景と少しも異つたことはなかつたであらう。或は淀君もそこにゐたかも知れない。秀頼もそこにゐたかも知れない。且元もまたそこにゐたかも知れない。また平生の瞋恚を捨て、互ひに抱き合つて泣いた美しい姫達もあつたかも知れない。しかし何うにも爲方がない。その境は最早神も佛も何もない世界であるのであるから……。

火は盛んに燃えたであらう。唯、燃えるのが木や竹の本質であるといふやうに燃えたであらう。また、人間の手で作らへられたものは、人間の手に亡びるのは當り前だといふやうにして忽ち灰燼に歸して了つたであらう。凄じい一日は全くその火の紅蓮と渦巻く煙と悲慘な叫喚とに暮れたであらう。或は一番大きな城壁の焼け落ちた時は、丁度日没か何かで、周圍の山巒は美しくその光焰にかゝやいて、未曾有の壯觀を呈したであらう。そしてその佳麗な城市は忽ち荒涼とした焼野原に化したであらう。

かう想像して來ると、かの不動明王の小さな像が、その火の中を免れて、山を越して、その寺に据ゑられたことなども思ひやられずにはゐられなかつた。現に、今、その址には何物も残つてゐなくても、その不動明王の像がその時さうして運び出されたといふことを考へただけでも、深い冥想に耽らずにはゐられないではないか。



## 五

その小さな寺のある丘から左にだらだらと下りて、林や草藪の繁つた中を十二三町も来ると、そこに小さな沼——沼とも言ふことの出来ないほどの水溜があつて、それに、杉の黒い幹がさびしく映つてゐるのが覗かれた。

錆色をした水の周囲には、蘆荻が少しばかり生えてゐて、藻が女の髪か何ぞのやうに黒く漂つてゐた。林を切つた低い丘の上に、小さな祠が一つほつねんと立つてゐた。そしてそこには小さな赤い白い小旗が無数に上げられてあるのを見た。

何うかすると、子供を負つた田舎の上さんが、遠くそこまでやつて来て、その小旗を祠頭に捧けて、一心に祈念を凝してゐるのが見られた。

都會から一月の休暇に遊びに来てゐる學生達は、何うかすると、こんなところまで散歩に出かけて来たが、

『何の神様だらう。』

こんなことを言つて、そしてその小さな祠の前に立つた。

『さア、何の神様だかな。小さな旗が澤山あがつてゐるぢやないか。』

『何かきつとおまじなひか何か見たいな迷信だよ。日本人は迷信にかけちや随分馬鹿々々しい國民だからな。』

『何か子供の病氣平癒か何かを祈る祠だね。』

『さうらしいな。』

『それ見たまへ、お禮に上げた繪馬には、屹度子供が一緒に書いてあるから……それに違ひないよ。』  
學生の一人は、丁度そこに來て禮拜してゐた田舎の子を負つた上さんを捉へて、

『何にきくんです？ この神様は——。』

かう訊いた。

上さんは怪訝な顔をして急には答へはかつた。

『何にきくは、面白いき、方だね。』

もう一人の學生はかう言つて傍から笑つた。

やがて上さんの話したところによると、それは子供の百日咳の不思議に治る流行のお萬さまだといふことであつた。

『お萬さま？ それぢや。この祠の神體は女だね。』

などと言つて學生達は笑つた。



學生も上さんも別に何も知らなかつた。上さんは上さんで子供のために唯一心に祈念し、學生は學生で、『神様にもいろいろな神様があるんだな。子供の百日咳を治す神様とは面白いな。』などと言つてそこを通りすぎた。

村の人も、こゝに祀られてあるお萬さまといふ女は、忠義な女であるといふことだけは知つてゐるが、それが何うして百日咳にきくかといふことなどは知つてゐるものはなかつたのである。勿論、何うして子供の百日咳にばかり有効にきくかといふことは、科學的にはちよつとわかりやう筈はないのであつた。ところが、それをF將軍遺蹟志の作者は、自分でその理由を發見したかのやうにして、熱心にそれを書いて置いたといふことであつた。

その作者の言ふところに由ると、そこはF將軍の二人の遺兒がお萬といふ老女に伴れられて、城の焼け落ちた時、遁れて蘆荻の中にかくれてゐたところであるといふことであつた。そのお萬といふ忠義な女は、何うかして、一時そこにかくれてゐて、すきを見て、その遺兒だけでも遠く落ち延びさせたいと思つてゐた。ところが、不幸にして、お萬は風邪か何か引いてゐて、ゆくりなく咳のために、その蘆荻の潜伏所が敵の巡邏兵に發見せられ、厭應なしに、一緒に捕へられて、そのため、二人の遺兒は幼ないあはれな身を並べて、その沼の畔で斬られたといふことであつた。その時、お萬はそれを残念がつて、死んだ後も、その靈が此處に留つて、すべての子供のために咳を守護すると言つたとその遺蹟志の作者は書いてゐるといふ話であつた。

それは或は空想に陥り易いさうした作者の夢の中から生れ出た傳説であるかも知れないけれど、しかしそれは穿鑿する必要を須ひないではないか。さうしたことはあり得べきことではないか。ルウインの中に漂つて残つてゐる氣分ではないか。面白いことではないか。

否、さういふ觀察さへも實は何うでも好いのであつた。沼の畔の小さな祠の紅い白い旗は、疎らな林の中にいつもインプレッティブに翻つて見えてゐるであらう。それには麗かに春の日がさすであらう。また秋のさびしい夕暮の落日が、沼を染めた返照をそこにさらに反照させるであらう。そしてその日影は、その城市の火焰に包まれた時の日影と更に變りがないであらう。そして旅客は靜かな日と變らない大空とを不思議な印象を以つて眺めるであらう。

## 六

その丘の寺の今の住職から少くとも五代や六代も前の住職の時のことであつた。ある日、その僧はふと墓地の隅にころがつてゐる小さな墓を思ひ出して、靜かに其方へと歩いて行つた。

それも何うしたきつかけで思ひ出されて來たといふことは、それはその僧自身にもわからなかつた。僧はその少し前まで、庫裡の爐の前に坐つて、裏からさし込んで來てゐる日影の白壁に明るく當つてゐる



るのをじつと見てゐた。何も考へてはゐなかつた。恐らくその時誰かかれの相手をする弟子達でもあつたなら、かれはそれを思ひ出さなかつたであらう。ところが、その時は、かれがいつも相手にする大きな三毛猫さへ其處にゐなかつた。ふとかれはかれが若い時いろ／＼と思ひ寄せたり何かした女のことを思ひ出した。匆卒にすぎ去つて來て了つたものだ。あの時は生命を捨て、もなどと深く思つたけれども、さうした女色の嚴禁されてあつた時代には、しやうにも何うすることも出來ず、またさうした位置に身を置いたがために、普通ならば、すぐその眞髓に入つて行くことの出來ることも、虚偽やら、欺騙やらに打壞されて、何うにも彼うにもならない中に、いつとなく年月は經つた。そしてあれもあれきりになつて了つた。年に似合はず、僧はこんなことを考へた。と、そのなつかしい美しい眉目もはつきりと目の前に浮んで來るやうな氣がして、暫しうつとりとなつた。

『何も彼もすぎ去つた。』

かう思ふと、かれはさびしい氣がした。秋の午後のもので、あたりはしんとしてゐる。空氣も靜まり返つてゐる。誰もお詣りに來るものもない。相變らず日は白晝に明るくさしてゐるけれども、僧は今ではもうそれを見てゐるのではなかつた。過ぎ去つた年月の早かつたのが悔まれるやうな氣がして、いろいろな記憶の雰圍氣の中に、その時分の若い女の面影を浮べて、そしてぢつとそれを見詰めてゐた。不思議な聯想ではないか。その時、その墓地の奥にある一つの小さな墓がほつかり浮んで來た。

勿論、それは今かれがその胸に浮べた女に何の緣故があるのではなかつた。また別にさうした墓を思ひ出さなければならぬ動機があるのではなかつた。但しその墓はある女の墓ではあつたが――。

それはかれが初めてこの寺の住職となつた時に、先代の老僧から、『それがAと言ふ女の墓だ。』と教へられたばかりであつた。かれはそれまでにもう二十年近くもそこに住職をしてゐたが、つひぞかうしてその墓を思ひ出したことはなかつた。それは別な用で墓地に行つてその墓を見た時には、Aといふ女のことを思ふには思ふことがあつても……

しかし僧自身にしても、そのAといふ女のことを深く知つてゐるわけでもなかつた。お上のお仕置が逢つて死刑に處せらるべき罪科を持つてゐながら、この寺にかけ込んだために、またはその時の住職が專念にその命乞をした、ゆゑに、死罪だけは許されて、半ば僧形になつて、殘年を此處に送つて死んだといふこと、その女が非常に美しく、その時まだ二十二か三かであつたといふ事と、その罪科と言ふのは、他に男があつたがために、夫を嫌うてそれを竊かに毒殺したといふことと、その位の知識しかAについて知つてゐるところはないのであつた。しかしその祕密が思ひ出されると共に、その美しい二十二三の女、その若さでさうした大罪を犯した女、それから發心して尼にはならないまでも半ば僧のやうになつて殘年を過したといふ女、その女の後半生は、果して清淨であつたか、それとも禁慾の中にかくれて飽まで慾を逞うしたのではないか。さうしたことがいろ／＼に思ひ出されて、不思議なほど思ひ出され



て、かれは静かに立つて、下駄を穿いてそして墓場の方へと行つた。

秋はまださう閑けてゐないので、蟬の聲などがいくらか梢に残つてゐて、木犀の香りが、澄んだ空氣の中に咽ぶやうに強く強く匂つて來てゐた。

蝶などがヒラ／＼飛んで行つた。

僧は初め墓地の西の隅の方へと行つて見た。そこにその墓があつた筈だとかれは思つたからである。ところがそのあると思つたところにそれがない。いくら捜してもない。ない譯がないと思つて見たり、またそれとも自分は忘れてゐても、いつか長い間にそれを何處かに移したのではなかつたかと思つて考へて見たりしたが、何うもわからない。『なアに、別に、今、そのAの墓を捜さなければならぬ譯があるのではない。わからなければしやうがない。』かう思つて、その考へから離れようとしたけれども、不思議にもそれが氣になつて、何うしても捜したいやうな氣がして、猶ほそれからそれへと一つ一つ古い墓の表面を見い捜した。

澤山そこにはさうした古い墓があつた。輪塔形のやゝ丸いのや、それからまた佛像を刻んだのや、見る人が見れば、その墓の形だけでもその時代がわかるのであらうけれども、僧は唯それを見て廻つたばかりであつた。僧はこれ等の多くの墓に一つ一つ絡みついて残つてゐるある物などをさがし出さうとする男ではなかつた。唯、澤山あるな。一度は無縁は何うか處分しなければならぬな。』など、思つたばかりであつた。

ふと白い紅い木槿の咲いてゐる垣の下に、一つの小さな古い墓石が多くの墓石に推されるやうになつて曲つて立つてゐるのが眼についた。僧は體を曲けて、それを仔細に檢した。

『これだ！ これだ！』

かう僧は思はず言つた。

考へて見ると、矢張、元から此處にあつたのであつて、初めあると思つてさがした位置は、自分の考へ違ひであつたといふことが段々わかつて來た。墓石の表面には佛像が刻んであつて、その傍に、その戒名が記されてあつた。

これが、この墓の主が、さうした美しい女であつたといふこと、髪が黒くつて漆のやうに、坐ると長く疊につくやうな女であつたといふこと、他の男のために他の男を毒殺しなければならぬやうな色濃い色戀に一度は身も魂も溺らせた女であるといふこと、さういふことを思ふと、僧は不思議な世界が、自分等の知らずに經過して來て了つた世界が、歴々と眼の前に映つて見えるやうな氣がした。單なる石とは思はずに、その女が自分に向つて笑つたり泣いたりするやうにさへ思はれて來た。

僧は急いで本堂の方に歸つて來た。かれは魂の遊離と言つたやうなことを深く感ぜずにはゐられなかつたのである。死んで土に歸したものから、生のこの世界に要求して來るある不可思議なるものをかれ



ははつきりその身に感じたのである。かれは本尊の前に来て、長い間その遠い昔の美しい女のために讀經した。

不思議はこれにとゞまらなかつた。そのAはそれから常は親しくその姿をかれの前にあらはして來た。或は冥想の中に、或は夢の中に、またある時は思ひもかけない自分の坐つてゐる傍に……………。

Aはいろくとその辛かつた一生の悲劇を話した。寺に入つてから、戀しい男に一度も逢ふことが出來なかつた悲しさを語れば、半は僧形になつて居りながら死ぬまで戀心に燃えてゐた淺間しさや辛さをも語つた。數へるほどしかその男に逢つてゐないにも拘らず、その歡樂はインモウタルであつたことなどを話した。時にはそのAの姿が難有い觀世音菩薩になつて見えたり、また時には、かれが昔思ひを寄せた女の笑顔になつて見えたりした。

僧は段々その墓を氣にし出して、その周圍の墓を他に移したり、新しく墓石の臺石を拵へたり、四目垣を結つたりした。をりをり出かけて行つては、線香を手向け花を手向けた。

『何うしたんだらう。不思議なことがあるものだ。無縁の墓を新しくしたり、花や線香を手向けたり……………。』

かう周圍の人々は不思議にしたが、ある日、弟子の一人はそれとなく師の僧にそれをたづねた。

『何でもない……………。』

かう唯、僧は言つた。

しかし、僧の肉體は次第に衰へて行つた。後には、僧の夜床の中に現にまざくくと美しい女を見たなどいふ評判が高くなつて行つた。何でもその頃には僧の傍には、坐臥進退、常にAが侍してゐるやうに見えた。

ある時は、こんなことがあつた。弟子の一人がそこに行くと、僧はそれには眼も呉れずに、

『本當か？』

『……………』

『それでは、その男が即ち私ぢやと言ふんだな。私とその男の生れ變りだと言ふんだな。…………その爲め、お前はお前の永久の住宅から出て來たと言ふんだな。』

『……………』

『それぢや、その私の若い時に思を寄せた女も矢張お前であつたか、私が道心堅固なために十分思ひを遂げることが出來なかつたと言ふのぢやな。』

『……………』

『あゝ、さうぢやつたか——。』

かう言つて、僧は身をもがくやうに、または自分の魂をすたくくにちぎつて捨てるやうにしてそして



ぐつたりと後に倒れた。

七

つい、此間のことであつた。

新しい住職が、この寺に入つてから、村の世話人に勧められて止むなく貰ふことになつた二十五六の妻と、島からつけ菜を取つてそれを井戸端で洗つてゐると、そこに學生らしい二人の青年がやつて来て、

『Aつていふ女の墓は？』

と訊いた。

『さア——』

新しい住職には、ちよつとそれがわからなかつた。

『Aといふ、夫を毒殺した、また一時、戀の流行佛になつた……』

かう一人の方が説明すると、

『あ、それか。それなら、墓地に行つて、僧侶の代々の墓の中をさがして見なさい。その隅の方に、小さくころがつてゐる筈だ。』

さも面倒臭いといふやうにして、新しい住職はそれを教へるとそのまゝ、また島に菜を取りに行つた。

暫くすると、その二人の青年はまた其處にやつて来た。

『いゝのぐつと前の僧がその墓の女のために狂氣になつて死んだつていふ話は、本當でせうか？』

『さアな。』

『そんなことが何かに書いて残されてありますか？』

『ないな。』

『戀の流行佛になつて、一時お参りが澤山にあつたといふ話だが。』

『それはさうだつていふ話だ。一時、此寺は非常に金持になつたといふ話は今でも傳はつてゐる。ところが、そのため、女狂ひをする和尚が出来たり何かしたので、御維新前に、わるい佛だと言つて、堂も何も打毀して了つたのださうだ。』

『何處にあつたんです？ その堂は？』

『このぢき門前にあつたつて言ふこつちやがな。それはかなり一時は榮えて、遠くから若い男や女が澤山やつて来たさうぢや。ぢやが、お前さん方は、そんな話を聞いて何うするんだな。』

『いや、難有う。』

かう言つて、學生は向うに行つて、その堂のあつたといふあたりを頻りに歩いたり何かしてゐるのが此方から見えた。



やがて暫くして學生は山門から向うに出て行つた。  
二人は話した。

『しかし、面白い話には話だね。その僧がその美女の死靈に悩まされたといふやうに解釋せずに、もつと新しく科學的に解釋しても出来るね。つまり、僧で、禁慾の生活をしてゐる身だから、さうしたことは、實際あり得ないとは限らないからね。女のことばかりを思つて、しかも女氣といふものはなしに暮してゐると、さうしたイリュウジョンが起つて來ないとは限らないね。』

『それはさうだ。』

『すぐれた筆を持つてゐるなら、ネオ、ロマンチズムの好い題材の一つになるぢやないか。それを因果とか、何とかいふ風に見ずに、元の戀しい男の生れ變りで僧があつたなどといふ風にはせずに、もう少しリアリスチックに見ると、面白い事實だからな。』

『それはさうだね。』

『僕はさういふ坊主を知つてゐるから、殊にさう思ふよ。一室に籠つて、終日、起きても寝ても、女のことを思つてゐる坊主を見たことがあるがね。蒼い顔をして、始終手を合はしてゐるが、それは佛への一致でなくつて、女への一致——つまり女人佛となつたわけだが、さういふ坊主を見たことがあるがね。禁慾生活をする、人間はそんな風にもなると見えるよ。つまり、その傳説の坊主だつて、それだ』

と思へば面白いさ。』

『さうだね。さういふ見方も面白いね。しかし、その女が墓から蘇つて出て來たといふ形も面白いぢやないか。昔の戀人の生れかはりだなどと言つて了ふと、ちと話が荒誕になるけれども、墓から現世への再生は、ロマンチックで面白い。誰かの詩にあつたね、そら、

庭とこの花はいと靜かに

息つくごとくに……

と言ふのがあつたね。たしかウウランドぢやなかつたか。あゝいふ風に、この世と他界との交渉は考へられないことはないからね。』

『さういふ氣はするにはするね。』

暫く黙つて歩いたが、

『それから、そのAの墓が流行佛になつて、寺が金持になつたために、代々好色の僧侶が出たといふことも面白いぢやないか。何かそこにも深い意味がありさうぢやないか。墓場からの歡樂の漲りといふやうな氣がするぢやないか。』

『さうだね。』一人の方は考へて、『たしかにまたさうなつて行くやうに、心理も出來てゐるね。決して不自然でなく出來てるね。面白いな。』



こんなことを話しながら、二人は平野の方へ出て行つた。

寺でもその夜その話が新しい住職とその妻の間に出た。

それはおしきせの二合の酒にも酔ひ、夕飯もすんで、これからは寢に就かうといふやうなときであつた。

さつきそれとなく小耳に挟んだ妻は、ふとそれを思ひ出したやうにして、

『さつきのは何の話？』

と訊き出した。

『何アに、何でもないよ。』

『でも、何だか面白さうな話でしたがねえ。』

頻りに問ふので、住職は酔つたまぎれに、ザツとその話をしきかせた。

と、妻は、

『まア。』

かう無氣味さうに目を睜つて、

『ぢや、その墓から女が出て來たんですね。まア、氣味がわるい。』

『まアに、話だよ。』

『でも、話でも、さういふことはあつたんでせう。そしてその女は、その和尚さんの死ぬまで傍にいてゐたんですか？』

『さういふんだがね。まア、始終、和尚はその女と話をしてゐたつて言ふんだがね。』笑つて、『俺なら、結構なことだな、さうした別品がやつて來れば——』

『馬鹿を仰有い……』いよいよ怖いやうな顔をして、四邊を見廻して、『でも、他の人には見えなかつたんですね。』

『それはさうさ。』

『そして、それが、その和尚さんが、殺した方でない戀しい男の生れ變りだつたつて言ふんですね。』

『そんなことを言ふんだよ。』

『お、怖い——』

かう言つて若い妻は顔を掩つた。

『何うしたんだ——』

『だつて、そんな墓があると思ふと、ゾツとして來る。』

『寺の鼻にも似合はないな。そんなことが怖くちや、一刻だつて、此處にゐられやしないぜ！』

『ぢや、もつと怖いことがあるんですか。』



『それはあるよ。寺には、不思議なことが多いよ。死んだ人の魂はきつとやつて来るのだからな。』  
『本當ですかしら？』

『まア、好いぢやないか。そんなこと。』(それより早く寝よう、そんなことよりもつと……。)かういふ氣分の雜つた表情を住職はして、そこに坐つてゐる妻を促すやうにした。

『でも、怖い。』

『何にも、怖くはありやしないよ。』

『でも、その女がまた墓から出て來たら、何うでせう。』

『その時は可愛がつてやるさ。』

『まア。』

笑ふにも笑へないやうな笑ひ方をその妻はした。

やがて二人はその長火鉢の置いてある室を出て、隣の床の敷いてある室へと入つて行つた。『怖くはないつて言ふのに、わからない女だな。』などといふ住職の聲は猶ほきこえた。あとはひつそりした。

## 八

丘からは餘程離れた野の中の島、一方は楢の禰樹の林、一方は半は桑畑に開墾されたやうなところで、

春の麗らかな日影を帯びながら、一人の農夫は、頻りにやゝ小高くなつてゐる土を崩してゐた。今までそのまゝ放つてあつたのであるが、それでは無駄だからと言つて、少しでも島にして桑を栽ゑやうと思つて、そして五六日前から開墾に取りかゝつてゐるのであつた。

土を崩す度に、鋤や鎌の刃がキラ／＼と日に光つてかゝやいた。

『あついな。』

こんなことを言つて、その一人は働く手をやめて、腰から手拭を取つて、滴り落ちる汗を拭いた。

糸遊はキラ／＼と空氣の中に雜つて、風もない麗かさは、此頃にもめづらしいやうな好い日和であつた。樹といふ樹は皆な新しい芽を着け、笹の葉は緑を加へ、草は青く繪具のやうに處々に點々として、あらゆる生命の大きい意志があたりに漲りわたつてゐるやうに見えた。鶯がをり／＼好い聲を立て、鳴いた。

『一服やらねえか！』

かう言はれて、開墾をしてゐる傍の蓆の上に皆な集つて來た。

今年の麥の出來の好い話や、これで強い霜さへ來なければ、桑も養蠶も上出來だといふ話や、つゞいて、村の誰彼の話、米を遅くまで持ちこらへてゐて大儲をした百姓の話などが頻りに繰返されてゐるが、ふと、その中の一人が、



『さう言へば、寺の不動さま、大變好い由緒のある不動さまだつてな。』  
『さうだつてよ。』

『今度、F村のSの隠居旦那が、大變あれに惚れ込んで、何でも、あれを世に出して、立派な不動さまにするつて、金も大分つき込むつていふ話ぢやねえか。』

『さういふ話だが、寺の坊主は、慾なし坊主で、ねつから、それに取り合はないつて言ふ話だぜ。』

『なアに、Sの隠居旦那はな、學者だし、金だつてうんとあるんだから、さういふ好い不動さまなら、世に出して貰ふ方が好いんだんべいけれど、旦那と一緒にいつてやつてゐる奴等が信用がねえからな。あの寺ぢや、あの流行つた佛のことでも、懲りてゐるだでな。』

『それで、何うしやうつて言ふんだね？』

『なアに、Sの隠居旦那は、別にそんな氣もねえんだが、それを聞いて、さうした立派な不動さまだといふことをきいて、乘氣になつたんだ。成田の不動の本尊よりも此方の本が本當だつて言ふだで、それで、あそこのやうに流行らせやうつて言ふんだ。』

『それで一儲けしやうつて言ふんだな。』

『で、金はいくらでも、Sの旦那から出るつて言ふんか？』

『不動さまの堂位はこしらへてやるつて言ふんださうだ。』

『豪氣だな。金のある人は、金のつかひ道がねえだで、そんな真似でもして使はなけれや使へねえだな。』

『本當だな。』

『それでも、女つちよに金をやるよりや好かんべ。』

『只、隠居がまたわるい奴に騙されなけれや好いつて、中にやそれを心配してゐるものもあるぜ。』

こんな話が一しきり續いたが、暫くして、皆なまた元のところに行つて、せつせと開墾に取りかゝつた。それは丁度十二時にもう少しでならうとする頃であつた。一番林に近いところで働いてゐる作といふ日雇取の蹠に、突然カチリと物の當る音がした。

此處等に澤山ある石塊だと思つて、それを取除けようとして、猶ほ仔細に手をやつて見ると、それは石ではなくつて、何だか長い棒のやうなものらしかつた。

『なんだんべいな！』

かう思ひながら、作はその尖の出たところをつかんで、それをぐつと引き上げた。別にむづかしいことでもなかつた。さう大した力も入れないのに、その長いものはすぐ抜けて來た。

『變なものが出たな、何だんべい。』

かう思ひながら、一杯ついた土を落して見ると、鏝があつたり何かして、やがてそれは一口の太万で



あるといふことがわかつた。

『おーい！』

とかれは呼びかけて、

『こんなものが出た！』

と言つて、高く持ち上げて見せた。

『何だ！ 何だ！』

近いところゐるた日雇取は皆な此方に集まつて来た。

作は周圍に集つて来た人達の中で、それを抜いて見ようとしたが、深く錆びついてゐて、容易に抜けなかつた。

『洗つて見ろ、洗つて見ろ……好い刀かも知んねえぞ。』

傍で見てゐるた政といふ男に言はれて、作はそのまゝそれを持つて、臥蓆の敷いてあるところに来て、そこにおいてあるバケツの水の中に入れて、ごしごしとたわしで洗つて見た。

土は落ちてゐる、黒く錆びてゐる、容易にその質はわからなかつたけれども、兎に角普通の木の鞘の刀でないことだけはかれ等にもわかつた。『金ぢやねえかな……金拵への太刀つて言ふが、金なら、豪勢なもんだぜ！』などゝその群の一人は言つた。他の一人は、それをグン／＼こすつて見てゐるたが、『金かも

知れねえぞ。見ろ見ろ、こんなに光つて来るア。』かう言つてそれをあたりの人達に見せた。

兎に角、金か何かわからないけれども、普通の唯の武士の持つたものではない。いづれ大將分の佩いたものには相違ないといふことに皆な一致した。

『何しろ、此處は、昔、城があつたり、戦争があつたりしたところだつて言ふからな。』

中には、こんなことを言つて、遠い昔を思ふやうな顔の表情をしたものなどもあつた。昔は此處等あたりからは、随分いろ／＼なものが掘り出されて、現に、農夫でそれを珍襲してゐるものもないではないが、此頃では、もうさうしたことも滅多になかつた。『旨いことをやつたな、作！』などゝその親方らしい男はやつて来て言つた。

掘り出された太刀は、そのまゝ、日の麗かに當つた臥蓆の一隅にと置かれた。長い間を土中に埋れて了つてゐても、通して持つてゐるたある意志は、決して亡びずに、再び世に逢つたといふやうに、または死んで埋められたものは、再びある時が来て蘇つて来たかのやうに――。

午後になつてから、かれ等の雇はれてゐる農家の主人がやつて来た。

その話を聞いて、そこに行つて立つて、暫くそれを見詰めたり、布で拭いて見たりしてゐるたが、

『作公、これを俺に賣れ――』

『……………』



『好いだらう。……何うせ、貴様なんか持つてゐたつてわかりやしねえ。もし、これが、金なら、金のやうにして買ふから。……貴様、持つてゐたつて、何うせ、潰しにしきやしねえんだ。好いか。金はあとできめるが、他の者に賣つちやいけねえぞ。よしか——』

『……………』  
作は黙つてゐたけれども、別に賣らない意志もないのであつた。

『旨いことをしやがつたな。』

また一人そこに來て言つた。

その主人にしろ、またそれを掘り出した作にしろ、その周圍に集つて來た日雇取達にしろ、決してさうした昔の繪をその眼には描かなかつたけれども、しかしその太刀は、實はその埋められない以前の人間の生活のさまをそのまゝそこに展けて見せてゐるのではなかつたか。凄じい兵燹にかゝつた城郭、遁け惑ふ男女の叫聲、またはその佩びられた大將株の武士の戦死、さうしたさまをまざらんとそこに展けて見せてゐるのではなかつたか。沼の畔の百日咳を治すお萬の小祠、または昔の戀の復活を絶えず今の世に試みやうとしてゐるAの墓、または暗い暗い佛龕の中からその光明を放たうとする不動明王の像、それと同じやうに矢張他界から蘇らうとする意志のあらはれではなかつたか。

その太刀の評判は、日ならずして村から村へ傳はり、Sの隠居の耳にも入つて、望まらるゝまゝそれを

持つて行つて見せると、頗る珍品で、或はF將軍が自身佩いたものかも知れないといふことであつた。後には村役場から、郡役所、縣廳といふ風に傳はつて行つて、最高の學府の歴史家などもわざわざ出張して來てそれを見て行つた。

九

一度埋没したF將軍遺蹟志の作者の意志も、この頃ではこの一帯の平地に名残なく復活して來るやうに思はれた。

何も彼も再び人々の心を惹き初めたやうに見えた。

靜かにのどかに霞みわたつた三面の山巒、その奥には、まだ残雪の白く包まれてゐるのが見えながら、その一帯の野には、闌なる春が既に遍ねく、其處には桃の花、彼處には白木蓮の花といふやうに、紅い白い青い色彩が到る處に漲りわたつて、街道を通る車の音がのどかにあたりに響きわたつてきこえた。

時は非常に長い轍の跡をそこにとめてやうにも見えれば、また新しい生々とした今生れたばかりの舞臺か何ぞのやうにも見えた。深く考へて深く悲しむのは、却つて人間のために取らないことであつて、逝くものは追はず、過ぎ去つたものは思はず悲しまずして、こののどかな春の幸福と歡樂とに十分に酔つてゐる方が本當のやうにも思はれた。鳶が靜かに輪をつくつて、何も知らないやうにして高く樂しげ



に霞の流るゝ空に舞つてゐた。

しかし、埋れたり、生れたり、亡びたり、または芽を出したりする意志は、こののどかな静かな、何事もないうやうな、唯、明けて暮れて行くとしか思はれないやうな空虚な中にも、微妙に、人知れずかくされて働いてゐて、無意味に働いたり呼吸したりしてゐる生物の上に絶えず動いて行くのであつた。

城郭の見事に聳えてゐた時にも、またその城郭などのまだ此處等につくられない以前にあつても、更に下つて、F 將軍遺蹟志の作者の生きてゐた時代にも、矢張かうしたのどかな麗らかな日があつたに相違ない。空は霞に包まれ、野は春の色彩に美しく彩られたに相違ない。遺蹟志の作者は、かういふ春の日には殊にうかれ立つて、その遺蹟をあちこちさがして歩いたに相違ない。その時には、山の上の小さな石も、川に添つて突き出した絶壁も、日影の斜めにさし込んだ林の中も、すべてかれの懐古の料として有効に役立つたに相違ない。そしてその懐古の情の中にかれの一生の生活の悲喜が複雑に織り込まれてあつたに相違ない。しかしかれもまた倏忽にして過ぎ去つた。F 將軍の榮華が倏忽にして過ぎ去つたと同じやうに、A といふ女の悲しい生涯が過ぎ去つたと同じやうに、また、今、此處に生きて泣いたり笑つたりしてゐる人達の過ぎ去るのも倏忽であるのと同じやうに――。

『その遺蹟志といふ本が残つてゐるさへすると好いんだがな。さうすれば、今日以上に、いろいろなことがわかつてゐるに相違ないんだがな。』

『本當だね。……それにしても、その本は本當に一冊もないのかね。何處かに一冊位残つてゐるさうなものなんだがな。』

『何處をさがしてもないさうだ。今日傳つてゐるところでは、その本をその當時に見た人が、それを書き抜いて置いたとか、またはそれを人に語り傳へたので更に語り傳へられたかしてゐるのによつてゐるんだ。何でも、その本には随分いろいろなことが研究して書いてあつたといふことだ。城郭の地圖までくつついてゐるさうだ。』

『惜しいもんだな。』

『本當に惜しいもんだ……。しかし、その本はなくなつても、その意志は矢張滅びずにかうして代々にまで傳つて来て、絶えず生き返らう生き返らうとしてゐるのは面白いぢやないか。いや、その作者ばかりぢやない。F 將軍にしても、A といふ女にしても、またその沼の畔のお萬さまにしても、皆な埋めた土の中から、その再生の意志をあらはして來るのは面白いぢやないか。』

『本當に、さうだね、さう考へて來ると、不思議な氣がするね。此處のルウインなどは、一時は全く埋れ盡して、そんなことを考へて見るものさへなくなつて了つたことがあるんだからね。生き返りたいにも生き返ることが出來なくなるまで完全に埋れて了つてゐるんだからね。普通の野と少しも變らず、原始時代からこのまゝの野であつたと思はれてゐるんだからね。それでゐながら、いつとはなしに、さ



うした生き返らうとする意志が人知れず芽を出して來てゐたんだからな。人間の心にも、これと同じこととはよくあるぢやないか。』

『あるとも、あるとも、大いにあるよ。だから考へれば考へるほど不思議になつて來るんだ。人間の中を流れてゐるリズムと宇宙の中を流れてゐるリズムとちやんと共通してゐるある物があるんだよ。』

『さうだね。』

『このルウインを心のルウインに譬へて見れば一番よくわかる。』かう言つて一人の方は考へて、『さうだ、心のルウイン、心のルウインとは好い言葉だ。誰でも屹度一度はこの心のルウインを味つたことはあるに相違ないが、その心のルウインは、このF將軍のルウインと少しも異つてゐはしないのだ。しかし、このF將軍のルウインが、全くのルウインとなつて亡びて埋れて了はないと同じやうに、何んな心のルウインでも、屹度芽を出して來る。生き返つて來ようと萌して來る。その力は何だらう。人間が生れたり死んだりする力と同じ力ではないか。そしてこの力は亡びない力ではないか。何んなことがあつても、この宇宙の生命のある間は亡びない力ではないか。かう思ふと、一種の新しいスピリチュアリズムを感じずにはゐられなくなるね。死は決して死でないといふ氣がするね。再生もあり得るやうになつて來るね。』

若い懐古の旅客の胸にも、かうなると、深い人生觀や宇宙觀が漲つて來たといふやうに、もう一人の

方も深く考へるやうにして、『さうだね。死と一緒にその力までも減びて了ふとは、ちよつと想像が出來ないね。再生が何ういふ形で生物の上に行はれて來るか、佛教などで説いたやうに行はれて來るか、それはちよつとわからないけれど、再生があるといふことは考へられる。When Dead Awaken; 實際といふ氣がするよ。』

『兎に角、かうして、ルウインの中から、いろいろなものが出て、その蘇生の權利を主張してゐるのには意味があるぢやないか。この間、何處からか知らないが、何でも此處等あたりから、金拵への太刀が掘り出されたさうだが、それなども、矢張、再生の權利を主張してゐると見れば見られるからね。』

『本當だ。』

こんな話をしながら、二人は林に添つた麗らかな路を歩いた。

『外國の小説や戯曲をよむと、よく Dawn といふことが主材になつてゐるね。あれなども皆なさうした氣分を覗つてゐるのではないかね。心の黎明、魂の黎明、さうでなくつても、夜から黎明になつて行くあのリズムには、我々が考へなければならぬ宇宙の神祕の鍵があるやうな氣がするね。一日の中にも宇宙があるんだね。』

『さうかと思ふと、一方には沈んだ鐘が鳴るといふことがある。あれは舊道徳と新道徳とを象徴したもののだけだ、それでなしに、沈んだ鐘が鳴つたり、埋れた劍が再び掘出されたりするといふことは、



不思議な心の現象だからな。」

二人はこんなことを言ひ言ひ、林を過ぎ、川を渡り、街道に出て、次第に人家のある方へと歩いて来た。

『何でも、此の大手のあつたところは此處等あたりだつて言ふぢやないか。』

『さうかね。』

『何でも此處等あたりだと言ふことだ。こゝからずつと奥に城が聳えてゐて、何でもあの丘の少し此方に、一番大きな立派な本丸があつたつて言ふことだ。』

『焼け落ちた時は壯觀だつたらうな。』

『何しろ、二日二夜焼けてゐたといふ記事は歴史にあるんだから、大きな城市であつたといふことだけはわかるね。それに、F將軍の遺蹟は、いろいろな説があつて、Mだとか、或はBがさうだなどと言ふものもあるけれども、單に、地形から見ただけでも、此方の方が本當らしいね。』

『今ぢや、大抵、此處と言ふことにきまつたらう？』

『大學の歴史家の先生達は、もう此處にきめてゐるやうだね。』

二人の姿はやがて小さな古驛らしい人家の中に入つて行つた。日は依然として麗かに、ほんやりと霞んだ空には、同じく鶯が好い聲を立て、鳴いて舞つてゐた。

十

F將軍の遺址の記事は、新聞に出たり、雑誌に書かれたりして、次第に世間の注意を惹くやうになつた。都會からそのあとを探りに来る人も段々多くなり、此頃では、今まであたりに見懸けもしなかつたやうな紳士や學生や、時には派手な美しい蝙蝠傘などもあたりの人達は見た。

今になつては、あらゆるものが、山が、川が、丘が、土手が、橋が、絶壁がすべてそこに浮び出て、てんでにその昔を語ると共に、長い間埋れてゐた不平を、または權利を其處に要求してゐるやうに見えた。

あるものはその日の兵燹の美しかつたことを語つた。またあるものは、その日そこに展開された地獄のすさまじさを語つた。叫喚、大叫喚の光景を語つた。或はその時の榮華のさまを、或は荒草田野に化して誰も顧るものゝなかつたさまを、或は遺蹟志の作者の熱心にあたりを研究するために歩いてゐるさまを。

『あゝ、たうとう、芽が出た。』

かう何も彼も囁いて喜んでゐるやうに見えた。

矢張、天氣の好い晴れた日であつた。五六臺の車は、そこから一里半ほどある郡役所所在地の町から出て、田畔の間からその古驛を通つて、次第に此方へ此方へと近寄つて来た。先に乗つたのはそのルウ



インの村長であつた。それにつゞいたのは郡長であつた。その次には、白い髻を常に右の手で扱くやうにしたSの隠居旦那が乗つてゐた。あとには山高帽子をかぶつた鬚の生えた紳士と、學者らしい肥つた半ば老いた紳士とが續いた。そして郡役所の書記らしいセルの袴をつけた鬚の男がその殿をなした。それを目にした農民達は、何かと思ふやうにして、畑を耕してゐた鍬の手を留めて、

『なんだべ、郡長さんと村長さんと一緒に……？ 何か事でも起つたんべいか。』

などと言つて、その一行を目送した。

あるところでは、

『なアに、不動さまを見に、東京から役人が来たんだとよ。あの不動さま、大したものなんだとよ。』  
かう言つてその噂をした。

一行の車は、川を渡り、林に入つて、次第にルウインの中へと入つて行つたが、ふと、あるところに来ると、そのまゝ林の路から、更に細い路を傳つて、樺樹の緑の日影にきらめく中を段々奥へ奥へと進んだ。

やがてあるところに行つて、村長は車を留めて下りた。

誰も彼も皆下りた。

學者らしい肥つた紳士は、

『はゝア、此處ですか、この間、太刀を掘り出したといふのは？』

かう言つて、先に立つて、その半は開墾された島の中に入つて行つた。

一緒について行つた村長は、

『丁度、此處のところださうです。』

かう説明した。

『他には、何か出ませんか？』

『人の骨のやうなものは出るには出るさうですが、あとには、別に何も變つたものは出ないさうです。』

『ふむ。』

かう言つて、肥つた紳士は考へるやうにしたり、またあたりの地形を見廻すやうにしたりした。

『まだ、掘ると、何か出るかも知れんな。』こんなことを言つた。

『こゝが本丸の跡だらうつて言ふんですがな。』

かう言ふ郡長のあとについて、白鬚のS翁は、遺蹟志に書いてあつた位置も矢張此の近所であつたやうに記憶してゐるといふやうな話をした。

『さうでせう。屹度。』

肥つた學者は言つた。



近所で働いてゐる日雇取達は、いづれも手を留めて、或は鍬を立てたまゝ、或は草に腰をかけたまゝ、めづらしさうにして、ちつとこの光景に見入つた。作はのこく／＼出て行つて、その發掘當時のさまなどを説明した。

林には麗らかな日影が美しくさし透つて、少しある風にそれがチラ／＼揺いだ。小鳥の聲は鈴を鳴らすやうにきこえた。

やがてまた一人々々車に乗つたが、一行は再び元の順で林の路を向うの本道へと出て行つた。

一行の車は彼方此方に見られた。沼の畔のお萬さまの祠のほとりに行つた時には、參詣するものがかかりに多く集つて來てゐたので、都會から來た人達はめづらしさうにしてその光景を見た。

『いつ頃からです。かうしてお詣りに來るやうになつたのは？』

かう山高帽の紳士が訊くと、

『年代はわかりませんが、餘程古くからだといふことは口碑に残つてゐます。沼なんかもつとぐつとひろかつたさうです。』S翁はあたりを見廻すやうにして、『こゝは小高いから此まゝでしたらうが、この向うのすつと先きまで沼だつたさうです。遺蹟志の作者の時代にも、もつとひろかつたやうに書いてあつたと覺えます。』

『ふむ。』かう紳士は點頭いて見せたが、更に肥つた方の紳士に向つて、『沼のあつたことは、歴史には

見えてゐるんですな。』

『え、それは見えてゐます。』

『ふむ。』

と山高帽はまた考へるやうにした。

一行の車はそれから村の一番古いといふ家に立寄つて、そこで、いくら残つてゐる古記録や、その節々に掘り出された古武器などを見て、晝飯の御馳走になつたりしたが、午後は再び車をつらねて、今度はその丘の上の小さな寺へと行つた。

そこでは、その古い佛龕の中にかくされた不動明王の小さな像が、學者達の目を驚かした。『これは立派なものだ……。成ほどこれがF將軍の持佛だつたらう。かうした像はたんとない。』かう肥つた方も山高帽も言はずにはゐられなかつた。そこから出て、かれ等はAの墓石をも見て、その不思議な傳説などに耳を傾けた。

此方に来て、立つてあたりを見たその二人は、

『好いところだな。』

『何うして、これが今まではつきり世に傳はらなかつたものかな。たしかに此處だ。此處に相違ない。』かう言つてその眼下に展けられた濶い野のルウインを眺めた。



かれ等の胸にも、埋れたもの、絶えざる要求と言ふやうなものがそれとなく上つて来た。

『ルウィンにも不幸があるね。』

『さうさ、本當だ……。しかし、こゝのやうな大きな規模で、それでゐて湮滅して今日まで傳はらなかつたのは不思議だ。』

こんなことを言ひながら、かれ等は猶ほそこに立盡した。山は靜かに聳え、雲は白く流れた。

暫くして、一行の車がまたその林の中を通つて行くのが見えた。

## 十一

池に捨てられて長い年月をその底に埋められた佛像が、光を放つて再び世に出るやうになつた話、或は漁夫の網にすくはれて最初は臼の上に安置されてゐたものが、次第に諸人の渴仰の元となつて、香烟萬世に遍く薫じた觀世音菩薩の話、さうした傳説は到るところにあるが、今やその古い佛龕の中に暗黒の長い生を経て来た不動明王の像の上にも、さうした傳説が當てはめられるやうな時機は到來した。機縁と言つて好いか、宿命と言つて好いか、それとも金剛不壞なあるもの、持つた自然のあらはれと言つて好いか、兎に角その不動明王の像は、その暗い佛龕の中から躍り出して、その光明を世間に漲らせる時は来た。

その像はあらゆる世間の運命、またはあらゆる世間の悲劇、凄じさに目もそむけずに見られないやうな地獄の叫喚、修羅の巷に流るゝ血、人間が互ひに相殺すことを何とも思はないやうな残忍な光景、或は一生の豪奢を極めた歡樂から忽ち墮ちて行つた悲惨な運命の淵、或はナポレオン、或はカイゼルのやつたやうな人間の罪惡、さういふものをすべて見盡して、そして寂として數百年または千餘年の長い時をその暗い佛龕の中に經て来たので、人間の時代の幾起伏は完全にその中に疊み込まれたまゝになつて今日まで残つて来たのであつた。幾度か蘇らうとして、しかし蘇ることが出來ずに、何遍も何遍も、その埋れたもの、要求の地に歸したさまを、その像は見て來てゐるのであつた。お萬さまの悲劇も、Aといふ女の物語も、または今の僧の平凡な生活も何も彼も……。

S翁の寄進に成つた小さな堂の完成してから間もなく、その像は國寶に指定されて、今までそんなことを夢にも思はなかつた住職を驚かしたが、次第にその光明はあたりに遍ねく、賽客は陸續としてその周圍に集つて來た。新しい再生はルウィンのあらゆるものゝ上に起つた。草にも木にも石にも起つた。



一 夜

一

夜になつてから、かられば旅舎に戻つて来た。

『何うでした？ 御病人は？』

病人の消息をたづねるにしては、いやに、にやにやと意味ありさうな、何事をか笑ひ懸けるやうな調子をして、かれの顔を見い見い女中は訊いた。

『手術は旨く済んだが、見てゐられなかつたよ。』

かうは答へながらも、かれにも矢張、それは重大な問題ではないやうに、別に、女中の笑ひ懸けた、ある意味の方に心を惹かれるやうに、

『でもね、別に、危険もなしにすみさうだ……。何うもね、あんな病室なんか長くるたくはないんだけども、さうかと言つて、放つたらかして置くわけには行かすね。半日あそこゐたよ。』

『今は？』

『ちよつとあそこで飲むには飲んで、逢つては来た。』

かう言つたが、かれは笑つて、『でも、あいつ、しやうがねえ——。』

『誰れ？ カアちゃん？ それとも、トン？』

一種不思議な表情をして、笑ひかけるやうに、または機嫌を取るやうに、『何方さ？ 貴方？』

『何方もかけて置いて呉れ給へ。しかしカアはゐない筈だ。よし屋へ行つてる筈だ。』

『ちや、トンに。』

かう言つて早呑込みをして女中が出て行かうとすると、かれは、

『マア、きいて行けよ、よく。トンにかけて、ゐればよし、ゐなければ、かゝるを貰ふやうにして呉れ。』

『はい、はい、かしこまり——。』

かう蓮葉に言つて、女中はトントン階段を下りて行つた。

かれはふと氣が附いたやうに、隣の室との間を割つた襖の唐紙を細目にあけて見た。かれは軽い失望を感じた。隣の室には旅客が泊つて、床を敷いて寝てゐるらしかつた。『何アに、構ふもんか、そんなことに氣兼ねをしなかつたつて好い。』かう思ひながら再び此方に來て坐つたが、『それにしても馬鹿に早く寝

一

夜



やがつたな、何時だ？ 一體？」かう思つて、へこ帯に巻きつけた時計を出して見た。

まだ八時四十分だつた。

病院の白いベッドの上に、繃帯をして横はつてゐる弟の姿が、ふとまた浮んで来た。夢中で、身をもがいて、「あ、あ、痛い——痛い——痛い。」と暴れ廻つたさまなどはつきり見えた。かれはその弟の手術をするために、一三日前、田舎から出て来たことを頭に浮べた。弟は何も知らずに、すやすやと寢臺の上に横はつて寝てゐるのである。

「まア、好いさ……何うして、かう俺は氣がねばかりするだらう。一體、俺は氣が小さすぎる。いろんなことを氣にかけすぎる。」こんなことを思ひながら、女中の持つて来て置いて行つた急須に、鐵瓶の湯を持ち上げてさして、それを茶碗に絞つて飲んだ。

女中の階段を上つて来る音がして、再びそこにその笑顔があらはれた。

「とん子さん、今、すぐ上りますつて。」

かう言つて笑つて、

「お風呂は何う？」

「さうさな、入るかな、一つ……あいてゐるかえ？」

「え、空いてゐますよ。」

「ちや、入らう……。」かう言つて、元氣よく手拭を取つて立つて、「出るまでに、飯を持つて来て置いてお呉れな。晝飯も碌々食はないから、腹が減つちやつた——」

「お酒は——」

「酒も一本位好いや。」

かう言つて、かれは階段の下のところにある風呂場へと行つた。

薄暗い五燭の電燈が、その壁に懸けられてある大きな鏡にかれの半ば裸體になつた姿を映した。

二

かれは何うかしてあの女の心をすつかり自分のものにならなければならないと思つた。何うかしてあの男の手から離して、そして完全に自分のものに——。

「場合に由つたら、此際、十分なことをしてやる方が好いかも知れない。さうすれば、何うしても此方に信用を置いて来る。何うしても女は金だ。」

こんなことを考へながら、かれは、じつと小さな角風呂の中に身を浸してゐた。今度来てから、もう三日になるが、何の彼のと行違つて——その行違つたために、同じ家の抱へのかをるに出したくない手を出したり何かして、一層わるいお互ひの心の状態になつてゐるが、しかし、それは、話せばぢきわか



ることだ。そんなことで切れたり何かするやうな危い間柄ではお互ひの間はない筈である……。もつと深い仲である筈である。かう思ふと、女の情が染々身に染みわたつて思ひ出されて来て、その體が自分の體に纏り附いて来るやうに感じられた。

『だつて、かをるに手を出したのは、俺がわるいばかりではない。』かう思ふと、田舎から着いた日の夜、女が富春亭に行つてゐて、かけてもかけても貰ふことは出来ず、自暴と嫉妬とについ激せられて、『あんな女なんか、どうにでもなれ。』と思つてそれでかをるに關係したことが思ひ出されて来た。

『だつて、とん子姐さんにすまないもの。』

『なアに。あんな奴、構ひやしないよ。もう今日からあいつはやめだ……。』

『だつて……私……。』

『本當だよ。浮氣でやつてゐるんぢやないから、大丈夫だよ。もう、今日からは、お前にして了ふよ。』こんなことを言つたことを思ひ出した。またその夜かをるの口から、とん子の貰つて來られなかつた理由を聞いた。その時には、かれは體中が熱くなつて、『道理で……そこにあいつが來てゐたんだ。』と思つて切齒した。

かをるも、可愛い女になつたにはなつたけれど………。それでも、まさかにとん子をそのまま平氣で捨てて了ふ氣にもなれなかつた。とん子はとん子で、また

違つた面白さがあつた。美しさがあつた。年の若いかをるに比べて、何うしても好く熟した果實のやうなところがあつた。矢張、金を出すなら、とん子だといふ風にかれは今でも思つてゐた。

今夜は一つ大に油を取つてやらなくつちやならない。かう思ひながら、かれは湯の中から出て、冷めた水をザブザブ頭にかけた。

『お湯の加減は何う——？』

さつきの女中が、その前の縁側を通りながら聲を掛けた。

『丁度好いよ。』

『さう——』

かう言つて、覗いても見ずに、女中は向うの方に行つた。

三

もう一度さつと湯に入つて、そのまゝ上つて着物を着たかれは、五燭の電燈の薄暗くさしてゐる大きな鏡にその半身を映して、少し延び加減になつた頭の髪を丁寧に右からわけた。

氣が附くと、夥だしく腹が減つてゐる。これではとても酒は入れられさうに思はれない。これで酒を入れては、すぐ酔つて了つて、體が役に立たなくなるに相違ない。それではつまらない。『今夜は酒を飲



まないやうにしなければ——』かう思ひながら、かれはトントン階梯を上つて行つた。その室には、丸い瀬戸の火鉢に鐵瓶が煮え立つて、湯氣を白くあたりに漲らしてゐた。傍にはさつき命じた夕飯の膳が既にちやんと運ばれてあつた。

女中は上つて來た。

坐つて、かれの顔を見て笑つた。

『何が可笑しいんだえ？』

『だつて……』

意味もなしに、顔を見ると唯可笑いといふやうにして女中は笑つた。

『何うもしやうがない。姐さん方には世話になるんだから、いくら笑はれたつて、しやうがない。思ひ出して可笑しくなるんだね。矢張やけるつていふ譯だね。』

『さうかも知れないのね。』

かう言つて、また女中は愈々堪らないといふやうに笑ひ出した。

一度下りて行つた女中は、暫くして酒一本と飯櫃とを持つて上つて來たが、

『すぐ御飯？』

『腹が減つてるんだもの。』

『さうね、腹が減つてゐては駄目だから、十分底入れをして置かなくつちやね。』かう言つて女中はまた後向きになつて笑つた。

『オイ、オイ、困るよ、さう笑つちや——それお茶碗が出てるぢやないか。』

『これは失禮！』

わざとシャッキリ言つて、そして女中は茶碗を盆に受けた。

飯を意地わるく山盛に盛つて、『今日はトン？』

『……………』

『え？』

『わからないよ、まだ——』

『でも、都合をきいて置かないと、二人來て困ることがあるもの。』

『二人來たつて好いぢやないか。』

『いゝの？ 本當に？』

かう女中は眞面目に訊いた。

『色男は二人でも三人でも多い方が好いね。』

『それなら好いけど……。』わざとすまして、かれの頻りに飯をかき込むのを女中は見てゐた。



暫くして階段を女の上つて来る氣勢がした。と思ふと、その足音は段々此方に近寄つて来て、ぱつたりとその室の前で留つて、やがて靜かにその障子が明いた。  
とん子は来たのであつた。

かれの眼は逸早くとん子の眼を逐つた。しかし、とん子はそんないやらしい、見るも腹立しい眼などには眼も呉れないといふやうにして、すつとすまして、別の方を見て、わざと女中の坐つてゐる傍のところに來て、

『姐さん、難有う。』

と言つて坐つた。

『怒つてるな。』とかれはすぐ思つた。『怒るせきはちつともねえぢやねえか。自分がわるいんぢやないか。自分が來なければならぬところに來なかつたために、かゝるが出來たんぢやないか。怒るせきなんぢつともねえ。』かう思ふと、いくらか得意のやうな、此間の夜の復讐をしてやつたやうな氣がして、かれもわざと黙つて飯の箸をとゞめなかつた。

平常ならば、『何うしたの？ 御飯なんか食べて？』かうすぐ女の口から出るところであつたが、それすら今日は出て來なかつた。とん子は帶の間から黙つて煙草入を出した。

いかにもお中が空いたといふやうに、かれは二つおかはりしたあとを茶漬にしてすゝつて、『あゝ食つ

た！ 食つた！』と言つてお膳を押した。

それを餘所に、とん子と女中とは頻りに話した。

『さう？ 行つたの？ とんちゃん……何う？ 面白かつて？』

『さうね。此の前のよりはつまらないわねえ。』

『入りは？』

『入りはかなりだけでも……』

『何だ？ 活動か？』

傍からかれが大きく口を挿んだ。

『活動ぢやありませんよ。今度のは連鎖劇ですよ。』

かうとん子が意地わるく訂正した。やがて女中は酒だけを残して、膳を持つて下へとおりて行つた。暫し二人は黙つた。

『一體、お前は何ういふ了簡なんだね？』

思つたのとは丸で違つて、堅く堅くなつてかれが出て來た。

『……………』

『本當のことを話しておきかせな。……昨日や一昨日のことは、そんなことは、何うでも好いよ。そん



なことは小さなことだよ。お前を本當に思つてゐればこそ、世話もしてやらうつて此前にもちやんと言つて置いたんだ。……それなのに、一昨日も、昨日も、恥を男にかゝせるつて言ふのは、何ういふ了簡なんだね。』

『別に、恥をかゝせたつもりではないんです。』

『ぢや、何故、一昨日も、昨日も來なかつたんだね?』

『……………』

『矢張、捨てられないんだね。忘れられないんだね。あれほど此前、僕に堅い約束をして置きながら、何うせ、あれは駄目だからなどと言つておきながら、矢張、思ひ切れないんだね。』

『……………』

『思ひ切れないなら切れないと言つてお呉れな。さうすれや、僕にも考へがないでもないんだから。』  
『そんなことはないですよ。あの時はあの人ぢやなかつたんですからね。』

『うそ言つてらア! ちゃんとわかつてゐるよ。いくらそんなに隠したつて駄目だよ。ちゃんと種はあがつてゐるんだから。』

『……………』

女に取つてかれは爲めになる客であるだけに、強ひてそれに反抗するやうな態度をとん子は示さなか

つた。怒つて、『だつて、貴方だつて、わるいぢやありませんか。かゝるさんなんか手を出して……』  
かう言つて來ればまだ好いのだが、それさへ言つて來ないのが、かれには物足らなかつた。長い間二人は黙つて坐つた。

やがて混亂したいろいろな思ひやら考へやらの中から、辛うじてある統一を求め得たやうにして、かれは言つた。

『で、結局、何ういふ了簡なんだえ?』

『……………』

『え?』

『別に、了簡といふこともないんですけどもね。』

かう言つて、とん子は頭を垂れた。

さつき湯に入つてゐた時には、とん子が來て、その美しい顔を見せて、二語三語軽い言葉を交はしさへすれば、二三日來の心の蟠りはそれですつかり除れて了つて、體と體の間に隔てはなくなつて了ふであらうと思つてゐたのに、此方からの出ようが堅かつたためか、それともまた腹の中をかゝるとの一條を深くふくんでゐるのか、更にまたかれに對して本當に離れるつもりでゐるのか、兎に角、容易に打解けて來ようとする女を半ば憎く、半ばもどかしく思つた。



しかしさうして打解けずに坐つてゐる女をかれは何うすることも出来なつた。機嫌を取つて、此方に引寄せて来るか、それとも突放して知らん顔をしてゐるか、この二つしかかれには執るべき道はなかつた。

四

段々とん子は口をきくやうになつたが、それを引寄せるやうに、その機嫌の直つて来たのを機會に、再びそれを離さないやうに、熱心にかれは抱妓を置いてやる話などをした。

かれの言ふことをきいて、一方の男を思ひ切れば、『抱妓の五六人は明日にでも置いてやる。』とかれは言ふのである。『一體、いくらから。四五人置くの？』などといふ方にまでかれは話を持つて行つた。とん子もいつかそれに引寄せられて、『さうね、五人なんてなくつても、二人か三人で好いわ。それも若いのをねえ。年増は何うしても藝でなくちや售れませんか、駄目ですわ。それに、私がまだ若いんですから。』などと言つた。

『それぢや、明日にも、行つて母さんに話して来ようぢやないか。』

『でもね、大變ですもの。』

『大變なこととはちつともないよ。……その位の金なら、いくらでも、すぐにでも出来るんだから……』

『でもね。あとで、後悔すると、わるいやうな氣がするもの。』

『ぢや、矢張、あの人が思ひ切れないつて言ふ譯だねえ？』

かう言つた言葉には、かなりに強い調子が籠つてゐた。

『すぐあゝだもの、さうぢやありませんよ。』

とん子も思はず強く出た。

『だつて、僕だつて、さうした金を出して一戸構へさせるには、その位のことをして貰はなければ……その位のことを誓つて貰はなくつちや——。』

『……………』

『さうしてお呉れよ。な、おい、男の心はわかりさうなもんぢやないか。これでも本當は、眞劍に思つてゐるんだぜ。これでも、都會で幅をきかせてゐる男が、名譽も地位も何も捨て、惚れてかゝつてゐるんだぜ。ちつとは考へて呉れても好いぢやないかな。おい、好いだらう。さういふことにしたら好いぢやないか。さうすれや、何もいざこざはちつともない。』

『……………』

『うむ？ 何うだ。いやだ。いやぢやない。イヤに、今日は黙つてかんむりをまけてゐるね。好いんだらう？』



『かゝるさんは何うするの?』

大きな鐵槌でも下したやうに、とん子は平氣に落附いた調子で言つた。

流石にその鐵槌に打たれたやうにして、かれも黙つて了つた。

暫し經つてから、

『まア、かゝるのことなんか、何うでも好いことにして、さういふことにしやうぢやないか。僕が、

抱妓を置くと、……そしてあの方は斷然やめると……。』

『……………』

『斷然やめることは出來ないつて言ふのかね?』

『……………』

『黙つてゐちやわからんね。』

『だつて、今すぐそれを言へつて言ふのは無理だわよ。私だつて、母さんにだつて相談して見なくつ

ちやならないんだもの。』

『母さんに相談するのは、いくらでもして好いがね……。それよりもその方をきつぱりして置かなけれ

ば——』

『無理だわよ、そんなに急なことを言つたつて……。』

すぐ應諾しない女の心の底には『あいつ』があるのであつた。さう思ふと、腹立しい氣がつと胸に突きあけて來た。しかしかれは何うすることも出來なかつた。それでは勝手にしろと言つて、打壞して了ふわけにも行かなかつた。二人はまた黙つた。とん子は手巾をいぢくり廻してゐた。

かれは考へた。『兎に角、そんな大きな問題は何うでも好い。そんなことはあと廻しにして、兎に角、今夜はものにしなければならぬ。ぐづぐづしてゐる中に時間は經つ。』いくらか急き心になつて來たかれは、急に女の機嫌を取り始めた。『なアに一時でも何でも好い。……………、何うにかまた女の心が自由になつて行くものだから。』かうかれは思つた。

女も段々その手に乗つた。いつまで不機嫌でもゐられないやうに、『本當にあなた位むづかしい人はないわね。そんなに考へずに面白く遊ぶ方が好いのよ。』などと言つた。

ふと、とん子は立つて障子をあけて、下に下りて行つた。廁へ行つたのであつた。

と、かれは急に思ひついたやうに、今の中に、それをして置くに越したことはないと言ふやうにして、……………

歸つて來たとん子には、それがグツと來たらしかつた。怒りがまさしく起つて來たらしかつた。しかもわざと知らん顔をして、……………、瀬戸の火鉢を押しつけられた室の隅のところに行つて坐つた。



『オイ、オイ。』かれが何か手真似をするのを、わざと知らないやうに、悟らないやうにして、とん子は別の方を向いてゐた。

『オイ、オイ。』

『何ですよ。』わざと聲を大きく、『煩さいわねえ』といふ語調を見せてとん子は言つたが、矢張そこに坐つたまゝ、身搖きもしなかつた。

『オイ、オイ。』

『……………』

『オイ、オイ。』

『……………』

『勝手にしやがれ！』

『するわよ、勝手に——』

とん子も睨めるやうな顔をして、凝とかれを見た。かれも睨め返した。

五

『かゝるさんあいたつて言ふんですがね、何うしませう？ もう、來なくつても好いつて言つてやりませうか。』

『……………』

『そんなことを言つてやらなくつても好いよ。來るつて言ふなら、來たつて好いよ。』

『ぢや、來るんですね。』

『あゝ。』

女中のトントン下りて行く氣勢があたりに際立つてきこえた。

かれもとん子も黙つてゐた。かれは床の中に半ば身を容れて、腹這ひになつて、一本取つて火を點けた朝日をすばすば吸つた。

かゝるの來ることを二人とも考へてゐながら、しかもそれについては何一語も互ひに言葉を交はさなかつた。

男は朝日を火に近いあたりまで吸つて、それを火鉢の中に棄てたが、もう一度、とん子の坐つてゐる方へ半身を長く延した。

『……………？』

『……………』

『馬鹿！』

『馬鹿だつてしやうがないわ。』



『あゝ、あゝ。』

と、かう溜息をついて、かれはごろりと仰向けに寝て了つた。何うも爲方がないといふやうな調子で。

とん子は黙つて傍にあつた硯箱を引き寄せたが、丁度そこに巻紙があつたのを幸ひといふ風に、筆を取つて、頻りに字を書き始めた。

沈黙の中にまた時は経つて行く。経つて行く。経つて行く。かをるの來る時が——かをるが來れば、何うすることも出來なくなつて了ふ時が——？

かれはもう一度半身を起した。

『そんなに、意地をわるくしなくつても好いちやないか。』

『私？』

とん子は一生懸命に字を書いている筆を留めて、美しい顔をあげて、『私？ 私、意地をわるくしたことなんかないわ。』

『……………？』

『だつて、それは無理だよ。』(かをるさんが今來るから、お待ちなさいよ。)といふ表情をして見せて、再び巻紙の上に字を書きつゞけてゐるが、『藝者なんか、もうつくづくいやだから、私、學校の先生にならうかしら？……………かうして、字を習へばなれるわねえ。』

見ると、女は、とん子だの、橘はるといふ名だの、かをるだの、お客様だのといふ字を一面にその巻紙の上に書き列べてゐるのであつた。

『おい、何うしたッてば？』

『何うもしないわよ。』

『……………？』

『……………？』

『馬鹿！』

また大きな聲でかれは罵つた。

そこに丁度入つて來た女中は、

『何うしたの？ とんちゃん？』

『怒つてゐるのよ。だつて、姐さん、爲方がないわね。私だつて、女だものね。馬鹿にされて、踏みつけられて、それで、黙つて、男のおもちやになつてはゐないわよ。』

『いつ、馬鹿にした？』

『今したぢやないの。馬鹿ッて言つたぢやないの。』

『馬鹿！』



『そら、また出たわ。何うして、こちらはかうなんだらうね、姐さん。折角、藝者をあけて、これで面白いのかしら？ 理窟ばかり言つて、人のわる口ばかり言つて。それよりも面白く酒でも飲んだり、三味線でか弾いたりして騒いで遊ぶ方が好きさうなものね。』

『大きなお世話だよ。』

かれははき出すやうにして言つた。

とん子はそれには頓着せずに、『姐さん、藝者なんかやめて、学校の先生になるのよ、私。』かう言つてまた筆で字を書き始めた。

女中のあがつて来たのは、實はかをるが下に來てるるので、それをあけても好いか、わるいかを見に來たのであつた。

『來たのかえ、好いとも、上げて好いとも……。』

かうかれは自暴のやうに言つた。

女中は下りて行つても、かをるは容易に上つて來なかつた。かなりにひどい不見轉で、そんなことは平生何とも思つてゐない方の質であつたけれども、それでもとん子がゐるでは、流石に心持よくあがつて行く氣にはなれないらしかつた。』とん子姐さん、何うしてゐて？ 怒つてゐて？』などと二度も三度も訊いたあとで、びくびくするやうな形で漸く二階に上つて行つた。

.....

とん子は此方を見ようともしなかつた。手持無沙汰に、とん子の後のところ來て、かをるは坐つた。

『何處に行つてたえ？』

かれは突然かをるに訊いた。

『もう少しさつきまで、よし屋にゐたのよ。』

『馬鹿に、長いお座敷だつたぢやないか。』

『え、もう、倦き倦きしたわ。』

突然、とん子は訊いた。

『はアさん歸つた、もう？』

『歸つたわ、さつきの汽車で——』

長谷川といふ客は、巴といふ妓の旦那であつたが、それに由つて、とん子は自分の惚れてゐる男の消息を知ることが出來た。その男も矢張、長谷川と一緒に下りの最終で歸つて行つたに相違なかつた。

『はアさん、よろしくつて言つてたわ、姐さんに——。』

『やう——。』

とん子はかう言つたきりで、またぶつたり黙り込んで了つた。



時計の蓋をそれとなく明けて見たかれは、

『もう、十一時だ！』

さもさも驚いたやうに、何うしてさう早く時間が経つて行つたかを疑ふやうに、またそれと共に、まごまごしてゐると、何うやら今夜もフイになつて了ふやうな形勢に思はれて來たので、いくらかせき心になつて、

『何うするんだね、一體？』

『何をさ？』

フイと顔を上げたとん子は笑ふやうにして言つた。

『何をつて、わかつてゐるぢやないか。』

『私にはわからないわ。』

『分らない奴は、わからないで好いや——お前、歸るなら歸つても好いよ。』

『私？』

いやににやにや笑つて、『かをるさん、私歸つて好い？』

『とん子姐さん、もう少しゐて頂戴よ、一緒に歸りませうよ、もう、ぢき時間が來るわよ。』

『馬鹿な奴等だなあ。』

『……………』

『……………』

『ぢや、歸れ！』

『私に、歸れつて言ふの？ 歸つて好ければ歸りますとも……』

さうは言ふものゝ、とん子にしても、かをるが來てからは、かをるを一人そこに置いて自分だけ歸つて行くといふ氣にはなれなくなつてゐた。

『早く歸れ！ 役に立たないものが、いつまでゐたつてしやうがない。』

『え、歸るわよ。』

とん子が立つより先きに、かをるが障子を明けて、廊下へと出て行つた。

『かをるさん。駄目よ、出て行つて了つては——私、歸るから、かをるさんゐるて下さいよ。』

かう言つて、とん子も障子を明けて、あとを追つて出て行つたが、階段の上のところ、今しも下りかけたかをるを捉へてとん子は何か頼りにゴト／＼言ひ始めた。

『だつて、姐さん、私、厭よ。』

『厭つて言ふ筈はないわ。何も、私に氣がねなんかしなくつたつて好いぢやないか。そんなことを平生氣がねしない癖に、何うしたの、今日は——』



『でも、私、厭よ。』

『だつて、お前さん、厭つて言はれた義理ぢやないわ。お前さん、いろんなことを言つたつてね。いろんなことを素破抜いたつてね。えらい腕だわよ、私なんかに氣がねしなくつたつて好いんだから、お前さん、ぐんぐん取つてお了ひよ、ね。』

『あら、とん子姐さん、さうぢやないのよ。私だつて、いろんなわけがあつたのよ。それで、しやうがなかつたのよ。姐さんそんなに怒つてゐちやいやだわ。』

『怒りやしないよ。そんなことを怒つたり何かする私ぢやないよ。お前さんだつて、そんなことを氣がねしてゐる人ぢやないぢやないか……。』

『でも、私、今日は歸るわ。』

かう言つて、かゝるは無理に、折れ曲つた階段を下りようとしたので、あとの三段ばかり踏み外して、ばたばたとけたゝましい音をあたりに立てた。

『あ、痛……。』

といつたまゝ、かゝるは尻餅をついた。暫しはそこから立上られなかつた。

つゞいて下りて來たとん子は、

『何うしたのさ。』

と言つて、急には起き上れないのを袂け起した。『あ、いた——いた。』顔を蹙めながらかゝるは漸く立ち上つた。

## 六

まさかあれきり歸りはしまい——かう思つて、ある期間、床の中で眠つたやうにしてゐたかれは、いつまで経つても、さうした氣勢もなく、あたりがしんとしてゐるのに業を煮やして、再び起き上つて、障子を明けて、廊下へと出て見た。

折れ曲つた階段の上から、下を覗くやうにしてかれは耳を傾けた。

しかし、何の物音もきこえて來なかつた。あたりはしんとしてゐた。柱にかけた時計の針のチクタクと動く音が、それとあたりに際立つてきこえるばかりであつた。急いでかれは階段を下におりた。

誰もゐない。……電燈ばかりが明るくついでゐて、店にも何處にも誰も起きてゐるものは一人もゐない。それもその筈である。時計を覗くと、もう五分で十二時が打たうとしてゐる。

業が煮えて、業が煮えて爲方がない。折角骨折つて、土壇場まで相手を引張つて來て置きながら、巧みに、それに遁けられたのが、癩で癩で爲方がなかつた……。『馬鹿！』と自分で自分の口に出して言つて見たが、それは女共に向けられた罵倒の言葉ではなく、却つて自分に向つて放たれたものゝやうな氣が



した。

ほんやりして、電氣ばかり明るい廊下にごつとして立つてゐた。

その向うの風呂場に、ふと女中達の湯を使ふやうな氣勢がした。『女中達が仕舞湯に入つてゐるんだな…』

『かう氣がついたかれは、廁に行く振りをして、そこからちよつと中を覗いて見た。』

『歸つたんだね、あいつ等は……？』

『え、歸りました。』

『怪しからん奴等だな。黙つて歸るなんて……玉も祝儀も拂はんから好い。』

『だつて、それは無理だわ。』

『お前達が歸したんだね。』

『でも、もう時間ですもの。それに、貴方が歸つても好いつて仰有つたんぢやなくつて……？』

『それは言つたけども、戯談に言つたんだ……。』

『でも、二人とも本當にしてゐるらしいわ……。』

『けしからん奴だ……。』

『だつて、時間ですものねえ。もう、あれからゐたつて、三十分とはゐられなかつたんだもの。』

上つて着物を着てゐた方の女中が、かう言ひながら此方に出て來た。

『もう、お休みなさいよ。』

『うん、寝るにや寝るが、あいつ等けしからん奴だ……』

『まア、そんなこと言はずにさ……。』肥つた女中は、後から押すやうにして、『だつて、ああ二人並べで了つては駄目ですよ、貴方。貴方、あれまで何うもしなかつたの？ さう。』と言つて笑つて、『私は、また貴方のことだから、ちやんとトンと要領を得て、それからかゝるを呼んだのだと思つたのよ。さうぢやなかつたの？』

さうだとも言へずに、かれはすすごと二階に戻つて來た。『しやうがねえ、しやうがねえ。』かう言つて、かれはぐつたりと床の上に身を倒した。

ちよつと眠つたが、ふと何の物音が耳に入つたと思ふと、かれはすつかり眼が覺めて了つた。『はてな——』とかれは思つた。

かれは耳を欝てた。

『はてな、』とまた續いて思つた。今まで少しも氣にも留めなかつた隣の室に——さつき歸つて來て細目にしきりの襖を明けて見た隣の室に、女のゐる氣聲がした。

細々と艶かしく囁く女の聲——『お玉ぢやないかな。お玉だ、お玉が湯から出て行つたんだ。あんなにべつたり白粉をつけて變だと思つた。さうだ、お玉だ。』今まで散々此方が隣の室の客に業を沸かさせた



ことは考へずに、『これは堪らない。』とかれは思つた。これでは、明方までは、とても眠られさうにもないと思つた。かれはうんざりした。

## 強い心

ある夏の朝、貞助は急いで裏の鳥小屋の方へと出懸けた。それは今朝はもう遅くも、鳩がかへつてゐるに相違ないと思つたからである。かれは半ば白くなつた髪といくらか皺の寄つた顔と岩乗な體をした姿とをあたりの晴れた氣持の好い空氣の中に見せながら、野菜の青々と繁つた細い路を向うの方へと歩いて行つた。

朝日は晴れやかに照り渡つた。

鳥小屋——鳥小屋と言つても、小さな物置のやうな處であるが、その前に行くと、かれはいきなり戸をあけた。中はまだ暗かつた。しかもその暗い中にも何處か誕生の氣分と言つたやうなものがそれとなく感じられて、さゝやかな鳴聲と何處となく騒々しい氣分とがあたりに漲りわたつてゐた。親鳩は光線が入つて來たのを見て、急に羽搏きをして、けたたましく屋根裏の垂木に飛び上つた。



入つた時には、暗くつて何もわからなかつたにも拘らず、暫くすると、かれはそこに思つただけの雛の数が、或は白く、或は灰色、或は黒色に、ピイピイ固まつて小さな聲を立てゝゐるのを眼にした。かれはそゝられるやうな興味を總身に覺えた。かれはそこにしやがんで、一つ一つそれを掌に載せて、そして明るい方へと持つて來た。

毛色の好し悪しや、質のすぐれたのや、生立の行末のありさうなのや、さういふものを仔細に、注意深く檢べるともなく檢べてゐたかれは、ふと、その中に一羽、首のところの毛の逆立つてゐるのを發見して、はつと思つた。

かれは全身の魂がそれに引き寄せられるやうな氣がした。

かれは目も放たずじつとそれを見且つ檢べた。小さな灰色をした毛の逆立つた雛！ つゞいてかれは持を折つて數へはじめた。

一年に四度孵るとして、あれはもう三年前である。かれはその三年前に、別の種類の雄鳩を一つ持つて來て自分の鳩に合せた。そしてその種族の、血の、または系統の雜り合ひ方に注意したことを思ひ出した。またその好奇心が、研究が一度も酬いられずに今日まで來たこと思ひ出した。一度合せて、その別の鳩は他に持つて行くのに任せて了つたが、三度目位にまでは、何とかして、その種が一羽位は雜つて生れて來さうなものだと思つてゐた。しかし、遂にその別の種は今日まで姿も形も、またはその氣勢すらも見せなかつた。それが、今になつて、ゆくりなくかうしてあらはれて來ようとは！ かれはまたしても、ぢつとその小さな雛を見詰めた。

不思議な宇宙と人生との交錯がそこに秘密にかくされてあるやうな氣がした。かれはまた指を折つて數へた。

『人間ならば、十二代後に、その種があらはれたのだ……。』  
かう口に出して言つて見た。かれの平生考へてゐる神祕、佛教などで言ふ三世の因縁、生死といふことのある力に支配されてゐる形、さうしたものが歴々とかれの身に迫つて來るやうな氣がした。『人間なら、十二代の間、その種は何處かに潜んでゐる形になるのだ。その間、この種は何處にゐるであらう。何處にさまよつてゐるであらう。不思議だ……。實に不思議だ。』かう思つて、かれはピイピイ鳴くその雛を掌の上に載せた。

『自分の考へてゐたことは、何も彼も本當なのだ。死んだからとて、この魂だけ何うにもならないのだ。不滅不動なのだ……。』かう思ふと、何とも言はれない難有さが、また力強さが、かれの胸にこみ上げて來た。

其處に、今年十五になる娘がやつて來た。

『父さん、御飯！』



『よし、よし。』

かれは元のやうに籬を巢の中に入れて、深い思ひに満されながら、靜かに母屋の方へやつて來た。妻に話しても無駄だと思つたけれども、飯の箸を取りながら、その話をする、果して妻はのんきなもので、『へえ、そんなことがありますかねえ。』と言つたきりですぐ別の話をした。子供達はそれでもめづらしがつて、『さう、いくつかへつて？ 五つ？ 行つて見ようや。』かう言つて、箸を置くや否、裏の鳥小屋の方へと驅けて行つた。

二

貞助は村の人達から推されて今猶ほ村長を勤めてゐた。かれは青年の頃、都會に遊學し、歸つてからは政治の方に力を注いだので、地方では政友會派の政治家として一國に知れわたつてゐた。郡會議員にもなつたことがある。それに、家柄も郷士上りで、財産も相應にあり、物もよくわかつてゐる方なので、他からも人一倍立てられてゐた。しかし、貞助の身に取つては、一時熱中した地方の政治といふものが、いかにつまらぬものであり、またいかに淺薄なものであり、利己でかためられたものであるかといふことを長い間痛感させられて來てゐた。そこには眞實らしい何物もなかつた。人は唯權力の勝敗に没頭して他を顧みなかつた。力のあるところのみにのみ人は唯雷同した。その

熱中のために、父祖傳來の家産を蕩盡した慘めな人達の生活をもかれは澤山に見て來てゐた。また、一時、朝日の昇る勢ひのやうに代議士にまでなつて、そしてまた忽ち亡びて行つて了つたやうな人をも見た。それに、年から言つても、かれはもう若いとは言はれなかつた。それに、かれが政治熱からさめて、靜かに自分の村に落附いた時には、自分の家の財産も尠なからず蕩盡されてゐるのを發見した。

かれは今でも法華經などを手にし始めた頃のことを思ひ出すことが出來た。忘れもしない、それは、かれの三女の死んだ時であつた。それは毬子と呼ばれて、可愛い子であつた。また伶俐な子であつた。かれは何方かと言へば、子煩悩の方ではなかつたが、現に、總領の娘の生れた時にも、次の男の兒が生れた時にも、さうした愛はつひに一度も感じなかつたのであるが、その三女のみには不思議にもかかれは心を惹かれた。まだ母親の懷にゐて、無意味に笑つて見せる頃から、その笑顔がかれに取つて忘れることの出來ないものであつた。何等かの不可思議があつて、また何等かのかくれた理由があつて、それでさうした愛着をかれに起させたと思はれないやうにかれには思はれた。今日でもかれは思つた。『さうだ。あの子が自分に本當の道を教へて呉れたのだ。心の盲目的な親に本當のことを知らせて呉れるためにあの子は短かい生を持つてこの世に生れて來たのだ。』かう思つてかれはいつも獨りで熱い涙を流した。呼吸を引取らうとする時、

『毬、父さんだよ。』



かう言つてかれが傍に行くと、その幼い兒はほつかり眼を開いて、につこり笑つて父親の顔を見た。父親が口をその傍に持つて行くと、もう臨終であるのに抱らず、幼い兒は強く父親の唇を吸つた。その吸つた唇がかれに人間の深い魂をひらいて見せたのであつた。

『さうだ。たしかにさうだ。……愚な父親のために生れて來たのだ。』

かうかれは今でも思つた。

その頃からである。かれが法華經を手にし始めたのは——。また、人間の魂の不滅であるといふことを感じ始めたのは——。また地獄といふものの死んだ後にも必ずあるものだといふことを信じ始めたのは——。かれは人間の現在の生活の些しも本當の道に觸れてゐないことをつくづく思はずにはゐられなかつた。世間には唯勝敗ばかりがあつた。虚偽ばかりがあつた。欺騙ばかりがあつた。折角持つて生れた魂をわざと盲目にさせて置くやうな生活が多かつた。殊に、地方の政治に熱中したかれには、さうした世間が一層色濃く塗られて映つて見えた。貴重な生命も、魂を蔑ろにしてゐるがために、軽く淺く取り扱はれてゐるのをかれは到る處で見た。

かれは今でも村長をしてゐるが、しかし絶えずやめたいと思つてゐる。三女の死んだ頃から、さうしたことはすべてやめて了ひたい。もつと自分のことを本當に考へたいと思つてゐるのであつた。しかし村の人達がそれを許さないほどそれほどかれは村に人望を持つてゐた。何ぞと言ふと、かれは引張り出されて、むづかしい問題の衝に當らせられた。

## 三

かれの母親はとうの昔に死んで了つてゐるけれども、それでもその母親のことをかれは常に思ひ出した。

かれが幼い頃、母親は常に口ぐせのやうにかれに言つた。

『おぬしはな、Sの觀音さまにお参りして、そしてな、さづかつた子ぢやでな、佛さまの御恩は忘れではならんぞな。それにな、おぬしには兄があつてな、御維新の時に、戦争に行つて、越後の小千谷といふところで討死したぢや。その討死した日が二月の十五日、その三月にお前が身ごもつたんぢやで、二重にお前は、佛さまのめぐみを受けて生れて來たんだぞ。』

かう言つては母親はいつもかれをそのSの觀音堂に伴れて行つた。長い長い田舎道を母親と並んで歩いて行つたのをかれは今でもはつきりと思ひ出すことが出來た。その途中からは、をりをり海が美しく光つて見えた。そしてその海の見えるところには、小ぢんまりした休茶屋があつて、そこでよく宅から持つて行つた辨當を食つた。白い帆が一つ斜に翹つてゐたりした。

Sの觀音堂は、大きくなつてからも、かれは度々行つて参詣した。母親が死んで了つてからも、かれ



は度々そこにお詣りに行つた。半は崖のやうなところに祀られてあるその観音堂、長い長い石の階段、お堂の奥に今も昔も變らずに跣坐してゐるせられる觀世音菩薩、かれはその前に長い間合掌して、熱い熱い涙を流したことも尠くなかつた。

遠い遠い越後の地に墓となつた兄、佛に念ずることを一刻も忘れなかつた母、愚かなる父の魂を甦らせるために生れて來た幼ない兒、さういふものがそこに端坐してゐる觀世音菩薩と一緒にやつてかれの眼に映つて見えた。本當の道知らない以前には、さうした心の連續をもかれは唯々うはの空に見たり思つたりして通つて來た。何うしてそんなことを人間は考へるのだらうとすらも思はずにやつて來た。さうしてかうした悲しい心の周圍を、政治に熱中した後悔や、何も知らずにやつて來た無知や、人間の生活の虚偽や、家産の蕩盡や、妻や子供の何も知らない無意味やが常に繞つた。

かれは先祖からつゞいて來てゐる古い暗い家屋の中に一人ほつねんとしてさびしく住んでゐるのであつた。

毛の逆立つた鳩は、次第に大きくなつた。かれはその鳩に無限の親しみを感じた。否むしろそれ以上の深い感銘を感じて、その哺育に一方ならぬ注意を拂つた。

『また、裏かえ？ 父さんは……。』  
などと妻は言つた。

『本當に父さん、何うかしてゐるんだよ。もう少し、本氣になつて、家のことをかまつて呉れないではしやうがありやしない。……村長なんか、いつまでもしてゐては、家がつぶれて了ふばかりだ……。何處か町へでも出て、月給でも取るやうにして貰はなければ——』こんなことを言ふ妻の言葉も、段々家道の衰へて行くにつれて貞助の耳に入つた。

貞助はある日、不意に、その自分の飼つた鳩をすつかりの觀音堂に寄附して了ふことを思ひ立つた。それを聞いた妻は、

『あほらしい……。折角世話をして寄附する位なら賣つた方が好いちやありませんかね。』

『いや寄附する。』

『寄附しなければならぬわけがあるなら仕方がないけれど……本當に、父さんは、人に物をやることを何とも思はないんだから。』

『まア好いから……。やかましいことを女は言ふもんじゃない。』

これより他には、かれは別に争はずに、男の兒と一緒に、十羽ほどの鳩を籠に入れて、二里ほどあるその觀音堂へと荷車に載せて曳いて行つた。

村の人達は幾人となくすれちがつた。

『何處へお出でですか？』



村長が子供と一緒に鳩を載せた車を曳いて行つてゐるので、いくらかあやしんで誰もかれも皆なかう言つて尋ねた。

『Sの観音さまへ……』

『何しにな？』

『鳩を寄附するぢや。』

『はア。』

かう言つて村の人達はそのあとを呆氣に取られたやうにして見送つた。

二里の路ではあるけれども、車を曳いて行くのでかなり手間を取つた。その海の見えるところには、依然として、昔の体茶屋があつたが、そこでは、昔かれが母親に伴れられたやうにして、車をどめて休んで、子供と一緒に辨當を使つた。

此處でもかれは老いた主婦から訊かれた。

『それは御奇特ぢやなし……。』

流石に主婦は、昔からかれを知り、かれと母親と一緒によくお詣りに行つたことを知つてゐるので、かう言つて感心して、

『もう昔になつたな、あの時分のことは——。』

『でも、いつも丈夫で結構だ。……いくつだな、媪さまは。』

『お前さまのお袋さまよりは、これでも五つ六つ若いだな……お袋さまはもう少し生かして置きたかつたのに。』

『鳩を上げるのもお袋の功德にもなると思つてな。』

『本當だともな。』

かう言つて、老いた主婦は腰をまけて外に行つて、店の前に置いてある車に載せられた大きな籠の中の鳩の群を見た。種々の毛色をした鳩は彼方此方と飛び違つてゐた。午後の日が斜にさして、向うに海の碧がピカ／＼と光つて見えた。

貞助は辨當を使ひながら、その中にゐる毛の逆立つた鳩の話をお婆にはなしてきかせた。老婆は頗る動かされた。

『さうかな。さういふもんぢやな。人間も同じぢやな。死んだつて、だから、魂は生きてゐるぢや、南無阿彌陀佛……』

かう言つて老婦は手を合せた。

暫くして老婦は再び立つて行つて、

『その鳩は何れぢやな。』



かう訊かれて、貞助も立つてその籠の邊へと行つた。

『それ、そこにゐるだらう。』

『はア、なるほどな。人間なら十二代、十二代と言へば、四百年ぢやな、まア、その間、魂が何處かに行つてゐたかな。あゝ勿體ない、観音さまのお生れがはりかも知れねえ……。好い功德ぢやな、お前  
なま……。』

かう言つて老婦は再び手を合せた。

この主婦の態度が貞助には非常にうれしく感じられた。まだ世は末ではないと思つた。で、かれはそこでしばらく休んで、再び車を曳いて出かけた。自轉車がすうとその傍を掠めて通つて行つたりした。Sの観音堂では、かれはしかしその毛の逆立つた鳩の話は、つひに住職にはしなかつた。今の寺の僧達には、さうした話も唯通り一遍にしかきかれないといふことを、あの茶屋の老主婦ほどの感銘すら起さないといふことを、かれはよく知つてゐた。さうしたことを説明するよりも、しない方が好いと思つた。かれは寄附の手つゞきをすまして、世間並の住職の感謝の言葉で満足して、籠を境内に持つて行つて、これまで自分の唯一の伴侶であり孤獨の慰藉者であつた鳩の群をそこに放つた。鳩は皆喜ばしげに飛んで行つた。かれはこれを見送つてから、長くこの寺の境内に住み馴れることを心から祈つて、そして長い間合掌した。昔も今も變らない堂宇には午後の日が明るくさしわたつた。

四

その時分、村から村へとわたつて行つて、ゆすりに近いやうな行爲をして歩いてゐる若い旅の男があつた。何處の村でも、さういふものに取り合つてゐては、何んなわらいことをされるかも知れないといふので、何處でも言ふなりにいくらかづつ金をやつて、そしてその村から一刻も早く別の村に行つて貰ふやうにした。

田舎のことであるから、今度に限らず、さういふことはこれまでも随分度々あつた。壯士のおちぶれ、不良青年、無錢旅行者、浪花節語、さういふものがよく入り込んで来ては平和な村を荒らした。さういふ人達は、多くは、普通のおとなしい乞食とは違つて、いくらか綺麗な扮装をして、かうして旅で困つてゐる者は當然村で助けるのが當り前だといふやうな態度で、押強くやつて來るのが例であつた。一二里も隔てたところにある分署の巡査などをかれ等は殆ど眼中に置いてゐなかつた。

ある日の午後、貞助は役場で事務を取つてゐた。丁度忙しい村の事業の計畫のある時で、重立つた人達が寄り集つて、頻りにいろいろ協議をしてゐたが、ちよつとと言つてさつき席を外して行つた書記が再び入つて來て、

『厄介な奴だな。』



『何ッて言ふんです？』

かう他の一人が訊いた。

『中々、ちつとや、そつとぢや、動きさうもないや。』

『何ッて言ふんです？』

『補助するのが當り前だッて言ふやうなことを言ふんだ。』

『困つた奴だな。』

ふとさうした會話に耳を挟んだ貞助は、

『何だな。』

『なアに、壯士見たいな奴がやつて来て村長なり書記になり逢ひたいといふんですが、私が行つて見たんですが、中々しぶとい奴でしてな、金でも貰はなければ、動きさうもないんです。』

『何んな奴だえ？』

『若い男です。』

『年は？』

『二十五六でせう。扮装だつて、そんなにわるくはないんですよ。小綺麗な背廣か何か着てるんですよ。何でも、あちこち荒らして来たらしいですよ。昨日あたりS村の方にも入つて行つたらしいです。』

『よ。』

『で、何て言ふんだ？』

『村長さんに是非逢ひたいッて言ふんですがね……。村長さんは、今、村のことで協議中ですからッて斷つて来たんですがね。』

『よし、よし、私が逢つてやる。』

かう貞助は落附いた態度で言つて、『少し待たして置いて呉れ給へ。』

貞助は此方に戻つて来て、猶廿分ほどいろくくと村のことについて協議をしたが、ひまを見て、

『ちよつと待つて下さい。壯士見たいな奴が來てるさうだから。』

かう言つて、靜かに、その事務室を出て、廊下を通つて、そこに待たせてあるといふ一間へと入つた。かれの眼には、まだ年の若い、神経質らしい、背廣を着た瘦せた二十五六の男がいやに堅くなつて坐つてゐるのが映つた。

かれは靜かに入つて行つた。

その男は入つたかれを觀察するやうにして、鋭い眼附で、敵にでも對したやうにして、じろじろとかれを見詰めた。

『や、私が村長だが……。』



打解けた、しかし何處かに重みを持った態度で貞助は言つた。

男はちよつと尖つた機先をそがれたやうな顔の表情をした。

男が何か言はうとするのを、それはもう言はないでもわかつたといふ風に貞助は手で遮つてとめて、

『わかつてゐる。わかつてゐる。よろしい。君の欲しいものは、私がやる。村でなしに私がやる。しかしその前に、ちよつと話したいことがある。』

ちつと男の顔を見て、

『困つた旅客ぢやか、それともさうでないかは、私が見ればちやんとわかる。一番先にきくがな、君も私も同じ人間ぢやが、君のやうにして世の中を渡つて行くといふことは辛くはないかな。』

『……………』

『私は辛いぢやらうと思ふがな。決して樂ぢやないだらうと思ふがな。私達の方は、貫はれる方は、やつて了へばそれで好いんだが、君の方はそれからそれへとさぞ辛いことだらうと思ふ。何故なら、君などは言つて見れば、劍の刃の上を渡つて世を送つてゐるやうなもんぢやないかな。』

『……………』

『辛いにきまつてゐると思ふな、私は——。何故、さういふ辛い世間の道を渡つて行くのだ。かうして見たところ、君だつて、決して悪人ぢやない。何うしても、私の眼には悪人とは見えない。人をゆす

つて歩いて、それを得意にしてゐる人間ぢやない。私などと矢張同じ人間だ。働きさへすれば、そんな辛い路をわたらなくても、いくらも生きて行くことも出来る人だと思ふがな。人のいやがるものを無理に取るといふことは大抵な骨折ぢやあるまいと思ふがな。決して樂にや出来まいと思ふがな。そしてその得たものは、僅かに一日の食に費して了ふ位のものしか取れないぢやないかな。私も、君も同じ人間だ。だから、困つた時にはお互に助け合ふのが當り前だ。出来ることはしてやる。しかし、さういふ辛い劍の刃の上か、でなければ焔の上をわたつて行くやうな君は可哀相だと私は思ふな。金で助けるのはわけないが、それ以上に、もつと、君をその辛い生活から救つてやりたいと私は思ふのぢや。』

見てゐると、初めは昂然としてゐたその男の頭は次第に垂れて、かう貞助が言つた時には、男は上を仰ぐことも出来ないやうになつてゐた。涙も催して來たらしかつた。

『何うも、申譯がありません……………』

『さうか。君は私の言つたことをきいて呉れたか。それはうれしい。人間として、同じ人間として、さう早く私の言つたことを聞いて呉れるのも、これも何かの縁だ……………。人間は何處に行つたつて辛いことばかりだ。正直に、本當に働いて行つてゐるとして、辛いことばかりだ。私なんかだと、その苦しきは、君といくらも異つてゐるやしない。人間には劫と言ふものがあつて、それが滅して了はなければ辛いにきまつてゐるものだ。それを、君のやうに、小さく求めて辛い道に行くこともあるまい、それが可哀



相だ……』

『わかりました。わかりました。……申譯がありません。』

涙がほろ／＼と聲の上に落ちた。

『人間は皆な同じだ。無理なことをして辛いもの一人もない。わかつて呉れてうれしい。』

『いゝえ、始めて……始めて……。目が覺めました。貴方のやうに、人の肺臓を貫くやうに仰しやつて下すつた方は、これまで一人も御座いませんでした。』いくらか頭をあけて、『よくわかりました。實際です。實際、あなたの仰しやる通りです。辛い道を通つて來たのです。かうしてあちこちに參つて、ゆすりがましいことをするのは、快して樂では御座いませんでした。しかし、これまでさうした方は、一人もありませんでした。皆な敵として私に對してきました。冷笑、罵詈、時には追ひかけられて棒でなぐられたりしたこともありました。そのため、くやしいが昂じて、人間のすべてを敵と見るやうになりました。……實際、貴方の仰有る通りです。辛い辛い生活でした。』

『それもすべて心だ。心の持ち方如何に由つて、敵にもなり、味方にもなる。善人にもなり悪人にもなるんだ。君はそれでもよくわかつて呉れた……。何處だ、君は？』

『K縣です。』

『K縣は何處だ』

『K町です。』

『東京にも行つたことがあるのかな。』

『え、昨年まで東京に行つてゐました。いろ／＼な苦勞をしました。人間は、親でも兄弟でも、友人でも、何でも彼でも、皆な敵だと一時は思ひました。皆な自分を滅さう滅さうとしてゐる奴ばかりがこの天地に充滿してゐると思ひました。』

『自分一つの心で、さういふ氣にもなるのだ。そして益々辛くなつて行くのだ。』

『わかりました。よくわかりました。貴方が一番先きに、劔の刃の上を渡つてゐるやうな生活ぢやないかと仰有つたが、あれがグツと胸に應へました。もう今日からこんな眞似は致しません。』

『それは、嬉しい。私のやうなものの言葉も君の役に立てば、それこそ何んなに本意だかわからな』

かう言つて、かれは財布から金を少しばかり包んで男に渡した。男は始めは手をも出さぬやうに恐縮してゐたが、度々勧められて、漸くそれを自分の懐に収めた。そして厚く禮を述べて役場の門から出て行つた。

貞助はづつとそのさびしい後姿を見送つた。と、艱難の多い人間の生活といふことが深く脈々としてかれの眼に簇つて來た。何も知らずに、さうした辛い心の生活を行つてゐるものは世間に澤山に澤山にあ



るのである——。しかも、その心を一轉換しさへすれば、皆な善に歸するのである。悪人としてはゐないのである。かれは今日は好い功德をしたと思つた。鳩の群を寄附した時にも増して好いことをしたやうな気がした。かれはその一日愉快に煩雜な仕事に従事した。

## 五

三女の死の床の唇から目覺めさせられて、それからずつと糸を引いたやうに續いて來てゐる他界に對するかれの心のあこがれの萌芽は、實世間に於けるかれの家産の蕩盡、物質の缺乏、ぢり／＼と押し寄せて來る生活の重荷と反比例をなして、益々かれの心に濃やかになつて行つた。かれは古びた暗い家の空氣の中に、多い子供達の喧しく騒ぐ聲の中に、または、半ば老いた妻の日増に愚痴つほくなつて行く言葉の中にひとり寂然と坐つて、法華經を讀んだり、また阿彌陀經を誦したりした。鳩を放つたり、旅の男に金をやつたりした時からもう一二年を過ぎてゐた。かれはもう村長をもやめて了つた。あらゆる政治上の運動には振り向いても見なかつた。常に往來した人達とも疎く疎く暮した。

勿論、家産を蕩盡したと言つても、昔からの家柄であり、田地などもまだいくら残つて居て、一家が衣食するに困るといふやうなことはなかつたのであるけれども、またその總領の娘は望むものがあつて親類に養女にやつたり、長男はK市の中學校に通はせてあつたりするのであるけれども、貞助の心には、新しい生を望む心が常に漲るやうに湧き返つて來てゐるのを感じた。

は、新しい生を望む心が常に漲るやうに湧き返つて來てゐるのを感じた。

妻のため、子のため、または一家のためにも、心を盡さなければならぬのは無論であるけれども、それ以上、かれにはかれの爲なければならぬ使命があるやうな気がした。かれはこれまでやつて來た事業、また努力したと思つてやつて來た事業、世間のためまた村の人のために盡した事業、乃至は家庭や子女のために盡した事業、及ばずながら時には國家のためにも盡したと思つた事業、さうしたものはすべて泡幻のやうなもので、皆な一つ／＼消えて亡くなつて行つて了つたことを考へた。深く考へると、かれはこれまで何一つ、本當のことをやつてゐないのであつた。母親の切なる願望により、または觀世音菩薩のめぐみに由り、兄の死に代つて世に生れて來たといふやうな深い因縁を持つてゐる身でありながら、何一つそれに酬いるやうなことはしてゐないのであつた。かれは決してその目覺めの遅く、既に人生の半以上を過ぎた身であることを慨きはしなかつた。かれはこれからでも決して遅くはないと思つた。何んなに些かでも好いから、本當のことをしたいと思つた。

従つて、世間のことにはすべて顔を出さなくなつたかれも、附近のK市やまたそれよりやゝ遠く離れてゐるM市あたりに、名僧、名士などのやつて來る時には、何を措いても必ずその話を聴きに出かけた。しかしかれはいつもそこから失望して歸つて來た。いかなる名僧もかれのためには何等の光明をも與へて呉れなかつた。かれ等の説くところは多く世間のことにすぎなかつた。



周囲をめぐる山、青い美しい田、豊饒な畑、少し行くと見える海。さうしたのもかれには何の意味も愛着をも與へなくなつて來てゐるのをかれは日々感じた。時にはかれはひとり、あとに残つた財産を調べて、その財産が妻子及び一家を支へて行くことの出来ることを考へて、直ちにそれを實行しようかと思つた。かれは昔のやうにもう益をも手にしなかつた。好きな煙草の道具も、人にやつたり何かして了つた。

さうした思ひ立をいつも力強く遮るものは、妻でもなければ、一家でもなく、世間でもなく、唯、あとに残る幼い二人の女の兒であつた。その幼い罪のないものが片親に離れて生長しなければならぬといふことは、かれにはいつも涙を誘つた。しかし、さうした愛着に捉へられてゐては、いつまで経つても自分の志を遂げることが出来ない。自分を本當に生かすことが出来ない……。かう思つてかれは強ひてそれを押へた。

この出離の決心を固めるまでには、かれはかなりに長い月日を要した。思ひ立つて思ひ止り、思ひ止つてはまた思ひ立つた。しかし五市の中學校に行つてゐる男の兒が漸くそれを卒業する頃になつて、かれは漸くその決心をはずきりときめた。

かれは男の兒と一緒に東京に出ることを計畫した。

男の兒を然るべき學校に入れて、そしてそれから自分の本當の道を行かうとした。かれは何處でも好

いから、寺の本山のあるところに行かうと決心した。

殊に、かれに取つて幸ひなことには、かれが青年時代に交を結んだ友が東京にゐて、それとの年始狀の交換が今だにいついてゐるといふことであつた。その他にも、かれの知つてゐる僧侶が二三あつた。

暖かい南の國では、春の來ることが早く、男の兒がK市から學校の業を終へて歸つて來た時には、桃も櫻も既に散つて畑には菜の花が黄ろく、蛙の聲がそゝるやうに夜もすがら啼いた。かれは黙つて行李を修めた。妻にも友人にもその思ひ立については何一言をも語らなかつた。かれは半年ほどを送るに足る金を身につけたのみで、幼い女の兒のまつはるのを振り切つてそして停車場へと急いだ。かれはもう一生見ることはないであらうと思はれる故郷の山々を見返りながらSの觀音堂に向つて心中に合掌した。

## 六

數日後には、かれとその男の兒とは、都會の真中にある大きな停車場からさう遠く離れてゐない細い巷路の中にある下宿屋の二階の一間にその身を發見した。

貞助の眼にふれるものは、大小の區別があり、また一國の首府と一村落との區別はあるけれど、そこに生息してゐる人達のすべての營みは皆なかれのこれまで經て來た世間の混雜した巴渦にすぎなかつた。そこには權力の争鬭、名譽の争鬭、戀の争ひ、慾の争ひ、さうしたもののばかりがあつた。自動車は飛び



飛行機は飛揚するけれども、心の方面については人間は何等の不安をも持たず、また何等の進展をも示してゐなかつた。それに比べて、男の兒の眼は、その賑かさに、またそのめづらしさに驚き且つかゝやくのをかれは見た。

男の兒をも憫むやうな氣分に満たされてかれは賑やかな街頭を歩いた。

かれは二三日は男の兒のために、都會のあちこちを歩いて見せた。花をも見せてやつた。飛鳥山にもつれて行つてやつた。博覽會へも行つた。旨い牛肉をも食はせた。そしてかれは歩きながら、昔、青年時代に通つたり住んだりした時分のことを思ひ浮べつゝ、それを今の心の境遇に比べて見た。かれは泣きたいやうな氣がした。

『漂浪者——落伍者。』

かういふ氣がをり／＼強くかれの胸をついて來た。しかし、さうした弱い心を彼はいつも強く押へた。

『漂浪者でも好い。落伍者でも好い。しかし、本當の漂浪者、本當の落伍者といふ心持は、人間のためにならないであらうか。自分がかうして都會の塵埃の中を歩いてゐるといふことは人間のためになつてゐないであらうか。落伍者でも本當の落伍者であれば好い。漂浪者でも本當の漂浪者であるば好い。さうすれば、却つて落伍者は落伍者でなくなり、漂浪者は漂浪者でなくなるのではないか。世間には、無數

の漂浪者、落伍者がある。さうして見れば、本當の落伍者はさうした人達のために役に立たないであらうか。』

かれは街頭の賑やかな群集の中で、または凄しい虚榮の巴渦の中で、毛の逆立つた鳩のことを考へたり、旅の男をめぐんでやつたことを考へたり、また故郷に置いて來た妻子のことを思ひ浮べたりして歩いた。

幸ひにも、男の兒は、初めの學校の入学には失敗したけれども、二度目の學校には、首尾よく入学することが出來た。

かれは安心した。

郷黨の子弟のために、監督をしてゐる人の家に男の兒を頼みに行つた時には、久し振でほつと呼吸をついたやうな氣で、此頃滅多に口にしなかつた盃を手にしたりした。それに、その監督をしてゐる人は、親しいといふ間柄ではなかつたけれども、昔から一緒に遊んだ友達の一人であつた。

『で、君は何うする？』

かうその人は訊いた。

『私には志すことがあつて……』

『何、う？』



『それは、誰にも話さないで来た。ひとりで今まで自分の腹の中に秘めて来た。しかし、男の兒を君に頼むにつけ、また、君がそれを引受けて呉れたにつけ、その厚意に對して話すが……』

『何う？』

『私はこれから宗教に入つて、自分の本當のことをしやうと思ふ。これまでも随分このことについては、長い間考へた。』

『それで、何うしやうと言ふんだ？』

『先づ今までの生活をこゝで斷ち切つて、大きな寺なり、本山なりに入つて、自分の修業をしやうと思ふ。これについては随分考へた。二年も三年も考へた。もつと考へた……。私も折角人間に生れて来た。これまでのやうなことをしてゐたのはいつまで経つてもしやうがない。句切がつかない。今、斷乎として句切をつけて了はないと。これからも今までと同じやうな生活をして行かなければならない。それでは自分の一生が無駄になる。で、今度は斷乎とした決心をした。』

『さうか……』

かう言つて友達は考へるやうな顔の表情をして、

『田舎の方は何うする？』

『何うかなるだらうと思ふ。祖先の財産は、馬鹿な生活をしたためにすつかり蕩盡して了つたけれど、

それでも、妻子はまだ安樂に暮して行かれる。唯、男の兒が一番氣がかりだが、これも、君が監督して見て呉れるといふから安心した。あれも親の慾目かも知れないが、馬鹿ではないから、自分で獨りで立つて行くだらうと思ふ。唯、過失のないやうに、君に保護して貰ひさへすれば――』

『それで、僧になつて、世捨人にならうと言ふのか。』

『世捨人？ 馬鹿を言つて困る。捨てるどころか、世を救ふ志を持つてゐるのだ。何んなにすこしでも好いから、本當に人間のためになりたいと思ふんだ。そのための發心だ。そのための修養だ。』

『ふむ……』

と友は考へて、『しかし、妻子を捨てるといふことは？』

『捨てはしない。しかし、妻子を養ふために私は生きてゐるのではない。妻子としても、本當に、私の心を知つたならば、決してそれを捨てたなどと單純に思ふべき筈のものではない。』

『で、その行くところはきまつてゐるのかえ？』

『いや、これから捜さうと思つてゐる。先づ子供の方をきめて、それがきまつたら、何處でも好い、本山に行つて、然るべき高德の師をさがしてもつと修養しやうと思ふ。』

『ふむ、さうか。それも好いだらう。』

かう友達と言つたが、この上言つたところで爲方がないと言ふやうにして、話を別の方に持つて行つ



た。それが貞助にはさびしいさびしい心を誘つた。しかし何うすることも出来なかつた。この友達などにしても、矢張多くの世間の巴渦の人である。それから一步も先きに出ようとはしない。また出ようとも思はない。自分に追はれて唯一生を外面的にすごして行く人達である。世間的効果のあらはれ如何ばかりを見て、軽々に人間の價値をきめて了ふ人達である。かう思つたけれど、かれはそこまで入つて行かなかつた。かれは唯男の兒を託して、そして其處から出て來た。

かれはその日から、かれの知つてゐるいろ／＼な人々を訪ねた。昔の友達の家を郊外に訪ねた時には、その友達が心から自分の心に共鳴して呉れたので喜び勇んで歸つて來た。その友達は言つた。『それは面白い。非常に意味のあることだ。是非それはやりたまへ。覺醒には遅いと言ふことはない。死に面してからでも覺醒は來る。しかし、肝に銘じて忘れてならないことは、その大悲大慈と言ふ積極的の心持を失はないことだ。それさへ持して居れば、いかなる生活も立派な生活である。いかなる漂浪者も立派な漂浪者である。』かう言つた友達の眼は一種の輝きを放つて見られた。友達は無論、さういふところがあつたなら、喜んで君のために世話すると言つて呉れた。

また、その友達は言つた。『しかし、本山と言つても、今の僧侶の中には、高德の師は實に晨の星の如くである。容易に得られない。従つて君が行くにしても、本山といふものに重きを置いて行つてはきつくと失望する。今の僧侶に多きを望むことが出來ない。それよりも、君のその一心を頼りにして、修行を

つんで行くより他爲方がない。』實際さうだと貞助も思つた。田舎にゐた間にも、かれはよく寺に行つた。僧侶とも話した。しかしその會話は決してかれを満足させなかつた。成ほど友達の言ふ通りに相違ないとかれは思つた。

かれはまた會つて知つてゐる名高い僧をも訪れた。そこでもかれはその決心に共鳴して貰へた。

## 七

しかし、下宿屋の二階に一人ほつねんとしてゐると、さびしさが、悲しさが、過去の追恨が、ある處からある處へと行く途中にあるものの疑惑が、いつもかれを脅かした。かれは獨り立つて、無限に眼の前に連つてゐる瓦葺を眺めた。

巴渦の中に没頭してゐた時分の彼、功名にあこがれてゐた頃のかれ、熱中して政治運動に奔走したかれ、酒と女に沈湎した彼、かう思ふと、その間を縫つて、母親のめぐみ深き情が顧みられ、Sの觀音堂に放つた毛の逆立つた鳩が見え、暗いさびしい且辛かつた家庭が見え、幼い女の兒達にわかれて來た悲哀が押寄せて來た。半白にして、かうした悲しい路にある自分の不仕合せなども脈々として迫つて來た。

さうしてかれの思ひ耽つてゐるところへ、何うかすると、何も知らない男の兒が、新たに入つた學校の新しい制帽制服をつけて、トン／＼元氣よく階段に音を立て、入つて來たりした。



『今日は何うした？』

『日曜日です、今日は。』

『さうか、何うだ、面白いか。』

『え。』

莞爾して、『今日、母さんのところに手紙を出した。』

『さうか。』

ポケットから紙片を出して、

『父さん、かういふ本がいます。』

かれはそれを取つて見て、

『二冊、二冊、都合、五冊あるんだな。よし、よし、買つてやる。その代り、勉強しなくちやいけないぜ。』

『え。』

『下谷の方は何うだ？』

『別に……』

『よくして呉れたらう。』

『え。』

かれは慈愛ある父親らしく、ベルを押して、女中を呼んで、近所の菓子屋で、子供の好きなくづ餅を買つて來させたりした。

『父さん、まだ、用があるの？』

『うむ。』

『ぢや、まだ、中々國には歸らないんですか？』

『うむ、まだすこしある。ことに由ると、半年ほど山に行つて來なければならなくなるかも知れない。』

『山つて？』

『山のお寺へ。』

『や。』

かう言つて何も知らない男の兒は菓子を口に入れた。

かれは悲しい辛い氣がした。かれは愈々山に入らうとする時には、その時には、詳しくそのことを手紙に書いて、國の方へも、または友達の群にもそれを知らせる決心をしてゐた。かれは田舎にゐた時分に、ちやんとしらべて置いたその財産の處分を、たとへば妻と幼い女の兒達に與へるもの、または東京に出て來てゐる男の兒の學費にすべきもの、さういふものを一々明細に書いて、そしてそれを親類の重



立つた人達に託さうと考へてゐた。それが、妻や子供に對するかれのせめてもの情だと思つた。

『勉強しなくつちやいかんよ。』

『え。』

『若い中に勉強しないと、大きくなつてからは、いくらしたいと思つたつて、いろいろ事が多くつて勉強なんかしてゐられなくなるんだから……』

『え。』

『それでも、お前そんなに難かしくはないだらう、東京の學校でも……』

『英語がちつと難かしい。』

『さうか、英語はむづかしいか。數學は何うだ……』

『數學は大丈夫だ。』

『さうか。數學はお前は出来る方だな。』ちよつと考へて、『何でも勉強するんだ。そしてえらくなるんだ。』

男の兒は點頭いて見せた。

都會の花の盛りの頃に出京したかれは、その花も散り、若葉青葉の色も濃くなり、時々散歩に出かけて行く日比谷の公園のさつきが明るく初夏の日にかやく頃になつても、まだ、何處にも入つて行くやう

な本山も得ることが出来ずに、さびしい朝夕をその汚ない狭い下宿屋の二階に過してゐた。鬚の濃く生えた、體格のがつしりした、緊張したかれの姿は猶をり／＼その蒼頭から街の方へと歩いて行つた。

## 八

ある日、Gの大きな街の通りをかれは靜かに物を考へるやうにして歩いてゐた。

ふと見ると、かれの前には大きな鳥肉問屋があつて、その店には、はつぴを着た若い者などが其處此處に集つて、頻りに鳥の肉を料理してゐた。一方には鶏やしやもの入つた平たい籠が澤山に重ねられてあつて、羽と羽と重なり脚と脚と重なり嘴と嘴と重なり合つた中で、一匹の雄鶏が頻りにときをつくつてゐるのを耳にした。

かれは夥しく撲たれた。

まさか立留つて見てゐるわけには行かないので、靜かに、同じ足取りで、此處へ二三歩みをつゞけて來たが、熱い涙が全身に漲つて溢れて來るのをかれは感じた。『あれだ、あれでなければいけない。あゝした籠の中にあるて、いつ殺さるか知れない身であるながら、生命のある中はあゝして快活にときをつくつてゐるやうな、さうした強い心でなければならぬ。世尊が死に面してあの大きな教を説かれたのも、その強い張りつめた心があらはれたからである。その強い心！ その心は飽くまでも、死にまで自分も持



つて行かなければならない。』  
かれの頬には涙がひとり手に流れて落ちて来た。

## 絶壁

私は黙つて圍爐裏の火の燃えるのを眺めた。外には凄じい風が山の巔を渡つて、それが谷から谷へとわかれて落ちて行く。と底の底にある深い谷川が、四方にそ、り立つた絶壁に反響して、凄じい音をあたりに漲らせた。

大きな丸太に移つた火と、渦のやうに簇り上る黒い濃い煙とを私は唯凝と見た。

私は屈曲した細い谷川を想像した。そこには一つの岩があつた。そこには水が一とくろ深い潭をつくつて靜かに淀んで流れてゐた。繩のついた桶を其深潭に投じて、毎日そこから水を汲んで來る人間、汲み上げた水桶を擔つて靜かに林の間の道を辿つて來る人間——それは私だらうか。

私は何年も滅多に口を開かない私を其處に見た。それは曾て、『人間は皆な孤獨だ。何をすることも出ない孤獨だ。人間は種々な言葉、種々の表情、種々な心を持つてゐるけれども、それは唯一人々の言葉、表情、心で、互に理解されずに話をしたり思つたりしてゐるばかりだ。』かう言つたことのある私



と同じ私だ。燃える火は矢張私の體の中に凄じい焔をあけてゐる。感情は四圍にそゝり立つた尖つた絶壁のやうに、矢張私を取巻いてゐる。

圍爐裏の火の燃えてゐるところから、奥に入つて行くと、其處に、さう大して廣くない一室があつた。その隅には、机が置いてあつて、種々な書籍やら、日記やら、反古やらが一杯載せてある。その中には法華經の斷冊もあれば、フランス革命史の一冊もある。「En Route」もあれば、燃えた火の餘燼とも言ふべき『戀日記』もある。卓の上には、ピストルが一つ載せてあつた。

その一室には、いつも朝と夕とに靜かに光線がさし込んで來た。それは黄い佗しいしかし明るい光線であつた。そしてその光線は、破れた窓の間から、こつそり忍び込むやうに、室の中を照し、卓を照し、ピストルを照し、机の上の書籍を照し、最後に私のさびしい顔を照した。

そして暫くすると、その光線は、一日の勤めを終つたかのやうに、靜かにさびしくその窓から消えて行つて了ふ。そして卓の上のピストルは、再び薄暗い佗しい光の中に沈んで行つて了ふのであつた。

谷の底の底にゐることを私は意識せずには居られなかつた。それは深い深い谷の底だ。出ようにも出ることの出来ないやうな谷の底だ。それを出ようとするには、少くともその周圍を圍んだ凄じい恐ろしい絶壁を攀ぢ上らなければならなかつた。あまつさへ、その絶壁には、足場とすべき岩もなければ草や木もない。一條の蔓すらもない。私は永久に、さうだ、永久に其處から出ることが出来ないのだ……か

う思つてをりくその黒い滑らかな絶壁を見上げた。

ある日、私は驚くべき壯嚴な落日の光景を其處に見出した。それは何う形容して好いか、何う描寫して好いか、私にはわからないほどそれほど美しいものであつた。切立つたやうな絶壁と絶壁との間から、靜かに靡いて入つて來た光線は、一時暗い谷を極樂境のやうに明るくしたばかりではなく、あらゆるものを輝かし、あらゆるものを閃かし、あらゆるものをして光彩陸離たらしめるに十分であつた。光世のない日輪は、丁度絶壁と絶壁との間に金環のやうに輝き、その餘光は深く曳いて谷の隅々までを遍く照した。

私は眺め盡した。

私の心は明るく、私の胸は爽かに、私の魂は歡喜に顫へた。「いかなる日、いかなる時、かうした落日があつたであらうか。いかなる日、いかなる時、かうした壯嚴な光線が私の胸に滲み込んで入つて來たであらうか。」しかし見よ。そのかゝりきは、次第に薄く、その歡喜は次第に消えて、谷は再びもとの暗黒にかへつて行くではないか。

見よ、美しい日輪は、絶壁の陰に、光線は次第に斜めに、明るい輝きは次第に茶褐色より灰色に……谷はもとの佗しさと寒さと淋しさにかへつて行くではないか。

ある日は私は谷川に添つて下つた。



折れ曲つた谷は、絶壁に添つて、處々に凄じい泡立つた潭を開いてゐた。鳴る音は巨人の叫びのやうに、あたりに反響して聞えた。

谷に添つた路は、初めは廣く坦々としてゐた。草花などが路傍の藪を美しく彩つてゐた。渡るべきところには橋あり、橋のあるあたりには人家があつた。そこには戀もあれば物語もあつた。人間の形が嬉嬉として其間を通つて行つた。

しかしさうしたのも次第に見えなくなつて、谷は益々狭くなつた。絶壁と絶壁との間に水は怒號して流れ、細かく折れ曲つた谷は、行つても行つてもつきやうともしなかつた。

ある期待とある希望とを抱いた私は、疲れ果つるまでその谷川に添つて下ることをやめなかつた。丘と丘との間をも越えれば、山と山との間をも攀ぢた。ある暗い林の中からは、その下に白く泡立つた瀬の渦巻いて流るゝを見た。林からやゝ開けたところへ出た時には、あるものを前に發見したやうに、ほとと溜息を吐いた。

私は人間の形をしたものに訊ねた。

『この末は、何うなつてゐますか？』

『行つて見なければわからない。』

『行つたことはありませんか？』

『行つたことはない。此處まで来たものさへ既に少い位だ。』

『誰が行つたものはないでせうか？』

『行つたものはあるかも知れん。しかし私はまだ聞いたことはない。生と死との間の谷がこれから始まるといふことだ。』

『生と死との間の谷？』

『さうだ。』

『行く道はないでせうか？』

『あるといふことは聞いてゐる。しかし、私は行つたことがないから知らない。』

私は黙つて狭い石門のやうになつてゐる絶壁の方を見た。

『行つたものゝ話では、この石門を越えると、ひろい野があるさうだ。その野は我々人間の頭上を蔽つてゐる空間と同じ空間で、ひろくとした好い處だと言ふが、それには——そこに行くには、祕密な愛慾と恐ろしい煩惱とピストルと經文とを持つたものでなければ行かれないといふことだ。』

『難有う。』

かう言つて私はその人間にわかれた。

私は猶ほ谷川に沿つて下つた。我々の頭上を蔽ふ空間——その空間に一致した空間に出る事は年來の



私の唯一の希望であつた。私は行けるところまで行つて見ようと思つた。谷は愈々狭く、水聲は愈々凄しく鳴つた。ふと見ると石門を前にして、路は絶えてゐた……。黒い滑かな石門の中に、水は泡を立て、流れ落ちて行つてゐるが、それから先は見えない……

絶望して、私は其處から引返した。

ある日は、私は私の裏にそゝり立つてゐる絶壁の一角にある細い道を發見して、それを辿つて行つた。

『さうだ、此處に路がある。』

かう思つた私は勇み立つた。私は今度こそその廣い空間に合した空間を發見することが出来ると思つた。絶壁と絶壁との間からさして来る光線の路——たしかにそこだ。かう私は思つた。

少し登ると、平らなところがある。そこから見ると、下に寺が見える。人間の心理の各方面を象徴した尖つた屋根と開いた窓とが見えた。古い彩色の加はつた窓に日の反射するのが美しく輝いて見えた。私は立つてあたりを眺めた。

私は種々なことを想像した。あらゆる愛慾とあらゆる煩惱とを持つた人間と、そのあらゆる愛慾とあらゆる煩惱とを持つた人間を摸した佛像との相違などを考へた。そしてその大きな佛像がその寺の中にあつて、その前にある大きな扉に面して大勢の善男善女が蟻のやうに集つて來てゐるのである。香烟が遍なくその山の半腹に靡きわたつてゐるのである。唄音と鐘聲とがその下界に満ちわたつてゐるのである。

ある川の縁には、石で刻んだ佛像が數千年來寂として並んで立つてゐるのである。

私は、私の庵室の中の生活を振返つて考へた。其處では、いろ／＼な形をした形相が絶えず私を苦しめた。その中には妻の顔もあれば子の顔もあつた。深く契つた女の顔もあれば、離れずに深く強く絡み着いて來る獸のやうな形をしたものもあつた。ある女は白い衣を着て、髪を長くして、鑷を手にして私の傍に歩み寄つた。そして、『これは私と貴方の涙です、この涙の處分をして下さらなければ、私は歸らない。』かう言つて其女は歎歎けた。

顔は鳥で、體は獸のやうなものもあれば、體は蛇で、顔は美しい女のやうなものもあつた。ある時は、小さな小さな子供が十人も二十人も揃つて並んで私の庵室へと入つて來た。

私は戦慄した。

私は下を見ることをやめた。今の場合寺の屋根や窓を見ることさへ、自分には危険に思はれたのであつた。私は眼を閉ぢて岩角に凭り縋つた。

しかし再び眼を開いた時には、幸ひにも、下は霧に一面に蔽はれて了つてゐた。寺の屋根も古い彩色した窓も香烟も何も彼も、この前から消え失せて行つてゐた。私は急いで細い路を上へと攀ぢ登つた。

路は辛うじて續いた。兩側には草もなければ木もなかつた。唯、細い路が絶壁の間を縫つて狭く續い



てゐるのを私は見た。私はやゝ落附いた氣分で歩いた。

不思議にも、今まで見えなかつた谷が新たに私の前に展開されて來るのを私は見た。下から見た絶壁——到底その上に到達することが出來ないと思つた絶壁が、遙かに下になると共に、更に廣い高い絶壁がその外廓を劃つてゐるのを見た。

夕日は美しく谷を染めた。

突然私の路は絶えた。

私はまた其處にゐた人間の形をしたものに訊ねた。

『もうこれから上には行かれないのでせうか？』

『行かれないと見える。』

かう言つたが『でも千人に一人、萬人に一人、行かれるものもあるといふことだ。』

『それは何ういふ人ですか。』

『よくは知らないが、何でも、藝術とかいふものを持つたものが、これからもう少し先きまで行けるといふことだ。』

『藝術ですと？』

『さうだといふことだ。これから先きに行くと、少し平らな綺麗なところがあるさうだ。それはこの我

私の頭上を蔽つた空間とはまだひとつにはなつては居らないけれども、それでも、我々人間の見ることの出來ないやうな美しいところださうだ。古から、それでも、五人や十人は此處を越えて、向うまでは行けたさうだ。しかし、そこも我々の頭上を蔽つた空間ではないので、矢張失望して、戻つて來るものも偶にはあるといふことだ。』

『“En Route”を作つた人は？』

『此間通つて行つた。』

『トルストイは？』

『あれも通つて行つた。』

『フロオベルは？ モウパッサンは？』

『皆な通つて行つた人達だ。しかし、そこだつて面白い生効のあるところではない。退屈で仕方がないと言つてゐる。』

『私は通れないでせうか？』

『通れるか何うだか、行つて見るが好い。しかし、行つて後悔するよりも、お前は、お前の庵室に戻つてじつとしてゐる方が好いだらう。庵室の中にある方がお前には適當だらう。』

『でも、私の庵室の中は、さびしくて寒くつて仕方がない。それに、いろいろな形をしたものが日夜に



襲つて来てその苦しさに堪へられない。私は、もう、二十年以上も、さういふものと戦つて来た。初めの五年は私はその巴渦の中にあるて戦つた。次の五年はその巴渦から出ようとして戦つた。その次の五年は、戦つても戦つても遂に遂に克てないことを悟つた。あとの五年は私は全く沈黙した。』

『何故沈黙した？』

『人間は孤獨でなければならぬことを悟つたからです。沈黙でなければ、遂に孤獨に打勝つことが出来ないことを悟つたからです。』

『そして孤獨に打克つことが出来たか？』

『出来ません。』

『何故出来ない？』

『何故だかわかりません。』

『それは自分の血が他人の血であり、自分の心が他人の心であり、自分の體が他人の體であることがよくわからないからだ。まだ、沈黙が足りないのだ。』

私は黙つて立つて、前に聳えた絶壁の上を仰いだ。成ほど細い道がそこについてゐるらしく思はれた。しかし、いかにも険しいので、とても其處に登つて行けさうには思はれない。私は止むなく、其處から引返した。

一室の中にほつねんとして私は猶ほ坐りつゝけた。

私は一室の中の長い年月を繰返した。室、壁、長押、卓、すべて同じだ。すべて同じ灰色だ。矢張り同じやうに、窓から黄ろい夕日がさし込んで来た。

圍爐裏の丸太は、何百年を燃えつゝ経過した丸太のやうにぶす／＼とくすぶつてゐた。

かうした沈黙と孤獨の年月を経過した今でも、昔の苦悶や懊惱や愛慾は、鏡に映つた影のやうに、をりをりを襲つて来た。そして空間に向つて憧れ渡る心と體とを再び汚い泥濘の中にひき落さうとした。ある光景とある光景とは、無数の繪巻物になつて私の静座の眼の前を掠めて通つた。私は妻子の涙に引寄せられる私を見た。美しいやさしい情にひかされる私を見た。ある時は私は自己の持つた敗徳と罪惡との苦痛に堪へられなくつて、強ひてその敗徳と罪惡とを承認する私の姿を見た。それは血みどろになつた私の姿だ。大童になつた醜い私の姿だ。

ある時は降り頻る風雨の中をびしよぬれになつて歩いてゐる私を見た。私は醉漢のやうにして蹠踏として歩いた。頭から足の爪先まで雨の滴がしたゝり落ちた。髪はぬれてひつたりと首筋にくつついてゐた。それでゐながら、私は何か大聲を擧げて、叫んで歩いてゐた。丁度一生の大事事件でもあるかのやうに――。

『何だ、馬鹿！』



ある處では、私はかう言つて叫んだ。私の前には、あらゆる美しいもの、やさしいもの、正しいものは亡びた。私は強ひて否定を肯定した。

歡樂の巷にゐる私は、中でも殊に慘めであつた。卑められ、虐げられ、あなどられ、笑はれ、罵られた。執着と煩惱と愛慾とが雜り合ひ絡み合ひ纏れ合つた。闇の中に泣いてゐる男、明るい灯のかけに歎歎けてゐる男、それは果して私だらうか。ある時は私は "A Rebours." 中の Des Essences のやうな境に身を置いてゐる私を見た。あらゆるものから私は離れて住むことを計畫した。所謂ヒュマニチーなるものは中でも殊に嫌つた。社會や人道は箇人を測り知れない泥濘の中にひき落すものとして少しも疑はなかつた。私は其時分、黄い色が好きだつた。紅よりも紫よりも黄い色が最も神祕に近いと思つた。私は人の顔を見ることを避けた。人と語ることを避けた。私は黄い壁の中にひとり住んでゐる私を見た。

戀を得た喜悅よりも戀を失つた悲哀の方に私は一層深い興味を感じた。『もう、お前とはこれでおわかれだ。それがいやならば何故お前は私に惚れた。何故私を最後まで振つて振りぬかなかつた。別れる原因は他にはない。それはお前が俺に惚れたからだ。俺の所有物ときまつたものに、其處に、何の興味があらうぞ。俺の言ふなりに何うにでもなるものに何の興味が起らうぞ。』こんなことを言つて私はある女と別れた。それは細い巷路のやうなところであつた。黄いくちなしの實が垣根から覗くやうにして見えてゐた。

さまざまの形相とさまざまの光景とが私の限の前を過ぎて行つた。心といふもの、複雑さ廣さ不思議さよ。かう思つて、私は眼を閉ぢた。

偏つたもの、歪んだもの、不整なもの、不統一なもの、さういふものが絶えず私の心の興味を支配して來た。私は肉體と精神との亡靈が絶えず私にある復仇をしてゐるのを感じた。

そこに一つ鏡があつた。

それは私が此室の奥の物置からさがし出して來た古い古い鏡だ。硝子の鏡が始めて此の土地に渡つて來た時分に、この庵室の昔の主が、高い價を拂つて買つたものであるといふことは、その鏡のつくりや裝飾やらで知れた。裏にはある象形人物が浮彫にしてあつた。私は埃を拂つて、それを私の卓の前の柱にかけた。

其處には終日長く、机の上の書籍と花瓶に生けた赤いダリアとが映つてゐた。丁度靜かな秋の空がその前にあらはれたものを明るく鮮やかに映したやうに――。

時には私の衣の裾が映り、私の青白い手が映り、ピストルが映り、『戀の日記』が映り、卓の上の白い陶器が映つた。私はある時、その明るい鏡の底に蒼白い髪の長いある顔を發見した。

不思議な形相だ。

『お前は何だ?』



答がなかつた。

『お前は何だ？』

その顔は笑つた。しかし、矢張答へなかつた。

『本當に、何だ。話して呉れ。頼むから話して呉れ。』

『Horia—』

『お前か Horia が。何うしてお前はこゝに來た？ 海を越えて來たのか。山を登つて來たのか。』

その形相は頭を振つた。

『また、このおれに取つかうと思ふのか。それで來たのか？』

『……………』

『黙つてゐてはわからない。お前は俺の孤獨の隙を覗つてやつて來たのか。昔からお前はゐた筈だ。千年も二千年も前からゐた筈だ。そしてお前はいつも孤獨の境にのみその形を現はして來ると聞いた。さうか。』

その形相は點頭いて見せた。

『お前は海を越えた名高い詩人の頭に住んだことがあるだらう？』

その形相は笑つたが、やがて恐ろしく空虚な聲で言つた。『私は今、來たのぢやない。私は何處にでも

ゐる。其處にも此處にもゐる。今までも常にお前の體の中に住んでゐた。たゞ、形を現はさなればかりだ。』

『何うして、形を現はさずゐるた？』

『要求がなかつたからだ。要求さへあれば、私はいつでも形を現はすのだ。』

『俺は要求したか。』

形相は黙つて點頭いた。

『これから始終この俺に附纏つて離れないのか？』

答がなかつた。

私は深く其鏡の底を見入つた。形相は段々小さくなつて行つた。遂には底の底に沈んで見えなくなつた。あとには依然として卓の一部と赤いダリアとが靜かに映つた。

霧の中から無限の喧噪が手に取るやうにきこえる。叫ぶやうな聲もすれば、笑ふやうな聲もする。泣くやうな聲もする。歎歎けるやうな聲もする。そして、それが一つの雑音になつて、靜坐した私の耳に入つて來た。行進曲のやうなものの中でも殊にはつきりと聞えた。

そしてその聲は何を言つてゐるのかよくわからない。何か話してゐるには相違ないが、それが一つの音と他の音と混亂して、時には高く時には低く、唯騒々しい音と調子とがあるばかりである。と、急に悲



壯な張詰めたセンチメンタルな聲が起つて、裂帛のやうな急調を促して、忽ちそれが絶えて了つた。あとは暫ししんとした。

底で低い雑音が響いてゐた。

そしてその雑音が一刻々に波動を起して、次第に高くなつて来るのを私は耳にした。それは丁度泥濘の中から無限の亡霊が浮び上がらう浮び上らうと努力してゐるさまに似てゐた。高くなつて来る聲は浮び上つたものゝ聲だ。確かにさうだ。と私は思つた、しかし大抵はその途中で、他の大勢の亡霊に引摺り落されて同じ泥濘の中に落ちて行くのであつた。

また悲しい聲がきこえた。

しかし、あとからあとへと續いて湧いて来る雑音は、決してその最初の希望と期待とを失はなかつた。如何なる難關をも突破するやうな強さと若さと鋭さを持つてゐた。『己の生活は己がして見なければわからない。己の人生は己が通つて行つて見なければわからない。』あらゆる箇々の聲は、皆なさうした心と言葉とを旗じるしにして、上へ上へと浮び上つて來た。

霧は漸く深くなつて行くらしかつた。騒音は次第に底へ底へと沈んで行つた。段々遠く微かになつて行つた。

今度は谷川の音が聞え出した。

と、私の經て來た人生は再びあり／＼とその前に現はれて見えた。私は眼を閉ぢた。

重なり合つた木葉のやうだと私は思つた。何千年、何萬年、それが全く重なり合つて地に委した。泥土に委した。戀も苦痛も歡樂も何も彼も皆同じやうに、名譽も富貴も貧賤も何も彼も同じやうに……。

『あゝまた人生の波の音がする。あの騒音がきこえる。』

かう獨語した私は再び靜かに耳を欹てた。霧の海の深い底には、不整な、混亂した、ある一種の調を持つた悲壯な音がそれからそれへと長く續いた。

沈黙は再び全く私の一室を封じて了つた。落日にも再びその美しい壯嚴な光景を見せず、Horiaもその不思議な姿を鏡の底に現はさず、霧の海も底に悲しい騒がしい音を立てなかつた。朝毎の霜は唯赤裸々の木々の梢を白くするばかりであつた。

私は終日唯黙して靜坐した。

『さうだ。この路があるばかりだ。この路を他にしては、私は行くべき路を知らない。生死の谷を越えることも出來ず、藝術の山を攀ぢることも出來ない私は、唯拱手し靜坐してゐるばかりだ。沈黙、唯、沈黙があるばかりだ。』

ある時は又考へた。

『この沈黙した形、そこに、刹那即永久の谷があるのではないか。靜坐——この靜坐は刹那にして且つ



永久たるものではないか。卓、書籍、光線、鏡、赤いダリヤ。かういふものゝあると同じやうに、この我があり、この我の心があるのではないか。否、この我、この我が心、この心がこのまゝにして、我々の頭上を蔽つた空間と、同じ空間を持つてゐるのではないか。かうしてこの一室に坐つた自己の形が、そのまゝ空間になるのではないか。鏡の中に一度現はれた Horta、それも矢張自分と同じものではないか。』

ある時は、私はいつもに似ない寂寥と焦燥とを渾身に感じた。自己の周囲の壁、その壁が牢獄ではないかと思はれた。』一刻も早く、此處を抜け出て了はなければならぬ。このまゝにしては身は亡びるばかりだ。腐つて、たゞれて、亡びて了ふばかりだ。孤獨の快感は、私を亡すこと、女色と鴆毒とに均しい。爾は何故にかくしてあるか。かくしてあらねばならぬか。何故にかうした一室の中に身を閉ぢこめて静坐してゐなければならぬか。』

私は答を待つた。しかし、何の答も得ることが出来なかつた。

『この骨に徹する冷めたさ。この魂に滲み入るさびしさ。爾はこれを如何に堪へようとするのか。爾は如何にこれを超脱しようとするのか。或は、或は、この骨に徹する冷さと魂に滲み入るさびしさをそのまゝ、自己の中心にしなければならぬのか。』

またある時は経過した。私はある日、深く底に穿たれた洞窟をその静坐の下に発見した。暗黒は暗黒

に續いた。四壁のまゝに、私は深くその洞窟の中に身を沈めた。其處には些の光線もなければ、些の色もなかつた。私はある暗い洞窟を通過した。ふと水の滴る氣勢がした。形は見えずに、ある聲が其處から聞えた。

『誰だ?』

『孤獨の道を行くものです。』

『孤獨はさびしいか?』

『さびしい。』

『孤獨は辛いのか?』

『辛い。』

『さびしい辛い孤獨の道を、お前は何故に守らなければならないのか?』

『何故か、私は知つて居りません。知らずに、私は此の道へと入つて來ました。』

『入れ!』

かういふ聲がした。

で、私はその暗い洞門の中にある更に小さい洞門をくゞつて入つた。暗さは更に一層の深い暗さになつた。全く漆のやうな暗黒である。四壁からは冷たい水の滴の落つる音が、絶えず瀧津瀬のやうにきこ



えた。

暗い中を無数の不思議な形相をしたものが通つて行つた。それが時には影のやうに、時には幻のやうに見えた。あるものは早く私を掠めて通つて行つた。

ある聲とある聲とは話した。

『光の見えるところまで行つたか？』

『行かない、とても行かない！』

『でも、引返しても仕方がない。』

『まだ、この先には凄じい瀧津瀬がある。高い岩石がある。この道が一番辛いといふことだ。』

『しかし、光に達するには一番正しい道だと言ふではないか。』

『正しいかは知らないが、容易ではない。私はこれから五つ洞門を越えたが暗くなるばかりで、少しも明るくはない。』

『然し初めて最初の光を仰いだ時は、到底形容することの出来ない歓喜を感ずるといふではないか。あらゆる苦痛も、あらゆる艱難も物の数ではないと言ふではないか。まだその光を見ないか。』

『見ない。』

二つの聲は絶えた。種々の形相は私の立つてゐる傍を行つたり來たりした。洞門がまた一つ私の前に

現はれた。

黄い美しい花が暗黒を地にして、くつきりとそこに現はれて咲いてゐるのが見えた。世間では到底嗅ぐことの出来ない匂ひがあたり高く薫じた。

『孤獨に咲いた花だ。』

かう誰かが説明してきかせた。

洞門の前には、無数の群集が織るやうに集つてゐた。誰も彼も争つてその中に入らうとしてゐるのであつた。『他人の心、自己の心。』かう言ふ聲が喧しく聞えた。

群集を押わけて私が入つて行かうとすると、ある力とある聲とが、急に私を遮つた。聲は言つた。

『もう一度歸れ。まだ、お前は庵室の中にもなければならぬ。』

で、止むなく私は其處から引返した。

私はまた私の一室に歸つた。やがて谷の花は咲き、山の鳥は歌ひ、川は雪解の水に凄じく音を立てた。一年はまた過ぎた。

洞門の中で見た『孤獨に咲いた花』の色彩は、長く私の眼に残つた。そのかをりは長く私の周圍に薫じた。私は暗黒の四壁から冷たく滴り落ちる水の音を聞いた。『生死の谷でもなく、藝術の道でもなく、私の通つて行く路は確かに其處だ。』私はかう考へて、黙つて猶ほ靜坐を續けた。



ある日、戸を叩く氣勢がした。しかしさういふことは今までにつひぞ無かつたので、私は立つて行かうとしなかつた。戸を叩く音は段々高くなつた。

遂に私は立つて行つた。

扉の半ば明いところには、ある人が立つてゐた。その人は蒼白い疲れた顔をして、手にはステッキを持つてゐた。五年前の私の苦惱と煩悶とを私はその人の顔に見た。

『何處から？』

『人生から。』

『何を求めて來たのです。』

『人生の波から辛うじて浮び上つて來たものです。私はそこから浮び上るのに、全力をあげました。今でも、いろ／＼なものが私を元のところに引き戻さう引き戻さうとしてゐます。私は疲れ果て、了つた。』

『何故、人生の歡樂を求めやうとしないのですか？』

『歡樂は歡樂ではありません。苦痛は苦痛ではありません。私は何うしても、その中から遁れて來なければならぬと思ひました。私は二十年人生の渦巻の中に入れて戦つた。權力とも戦ひました。名譽とも戦ひました。中でも愛慾とは最も烈しい戦ひを戦ひました。疲勞、困憊、さういふものは、皆なその

戦から贏ち得たものでした。しかし、私はその盡きない戦ひから、漸く遁れて浮び上ることが出來ました。』

私は私の苦痛と歡樂と疲勞と困憊とをその人の顔に見ることが出來た。五年前の私は、矢張その人と同じであつたことを私は考へた。私は言つた。『まア、お上んなさい。しかし、こゝは私の室だ。私きり入ることの出來ない室だ。こゝには、貴方を長く留めて置くことは出來ません。貴方は貴方で、自分の孤獨の室を新しくつくらなければなりません。そして辛い長い努力をつゞけて行かなければなりません。しかし、まア、お上んなさい。貴方は疲れてゐらつしやる。休まなければならぬ。』で、新しい客の爲めに私は谷の水を沸かして勧めた。

暫くして客は矢張私と同じ沈黙をつゞけるために、別な庵室をもとめて林の中へと出て行つた。日は月と経つた。谷の草花はまた咲いた。卓、ピストル、鏡、すべて元のまゝにそこに置かれてあつた。夕日は窓にさしてそして消えた。

靜坐した私の姿は、朝に夕に猶ほ依然として其處に見えてゐた。



## 林に添つた道

一

もう三里ほどは歩いた。

行つても行つても盡きない杉の大きな並木路であるK町からI町まで五里、それからまだ二里歩かなければ、目的のN町に達することは出来ないのは知つてゐたし、汽車が出来てから、此の道はすっかり荒廢して、昔は冠蓋相望むと言はれた賑かな驛路も、今は一人通らなくなつたといふことも知つてゐたけれども、それでも餘りにさびしすぎ、餘りに荒涼すぎ、また餘りに單調すぎるとKは思つた。

Kは十九歳の少年で、旅に出たのは初めてであつた。世間が怖いやうな、他人が恐ろしいやうな、または何處から何んな災厄がやつて来るか知れないのを恐るゝやうな、小説本で見たごまの灰とか、悪漢とかが不意に自分の前にあらはれて来て、胴巻の中の路銀を無理やりに奪ひ去つて行きはしないかといふやうな不安が、絶えず胸に渦を巻いて、昨夜とまつた旅舎でも、落付いて安らかに眠ることは出来な

かつた。そこまで来る乗合馬車の中でも、かれは何遍となく懷に手をやつて胴巻に觸つて見た。

『坊ちゃん一人？ Nに行くの？ よく一人でやつて来たわねえ。本當に可愛い坊ちゃんだ……。』  
こんなことを昨夜の旅舎の女中が言つたが、その時にも何だか怖いやうな、氣味がわるいやうな、うつかりすると、何んな目に遭ふか知れないやうな氣がして、碌々口もきけずに顔を赤くして黙つてゐた。その癖、Kは、その女中が綺麗な、色白の、肌理の細かい肌をしてゐるのや、派手なメリンスの腰巻を歩くたびにチラチラ見せてゐるのや、笑ひかけて来る顔に一種色つほい人なつこい表情のあるのやを見遁さなかつた。その他にも、その旅舎には、まだ女中が五六人ゐるが、中で十四五の、豊かな頬をした、可愛い顔の若い女中をかれは忘れなかつた。厠に下りて行つた廊下でその女中の向うから来るのに逢つた時には、何となく胸が躍つて、顔が赤くほてるのを覺えた。

そればかりではなかつた。かれは昨日、ある處からある處まで歩いて、午過ぎにそこで馬車に乗つたが、その馬車の立場が丁度街道に並んだ遊女屋の角で、大きな二階建の家に、淺黄の暖簾をかけてあるのを見たり、女がだらしない風をして、なまめかしく路傍の人に話しかけたりしてゐるのを見たが、その時乗合客の一人が馭者に向つて言ひかけて笑つてゐた言葉——かれにはよくわからないやうな言葉、その言葉からかけて、ずつとひろくひろがつてゐるその色つほい知らない社會が繪か何そのやうに想像されて見えた。



（あの時、言つたことは何ういふ意味だらう。何故、あの時、馭者と乗客とは面白さうにして笑つたらう。いづれ、その女に關係した言葉には相違ないが——）こんなことを考へながらKは歩いた。

つゞいてKは昨夜泊つた大きな旅舎から、愉快な心持で出發して來て、雲のほつかり山から湧き上るやうな路を歩いて來たことを思ひ浮べて見た。またつゞいてさびしい杉の並木路——初めは松並木であつたのが、いつとなく杉並木に變つて、それが爪先上りといふほどではないが、いくらかのぼりになつてゐるやうな路、行つても行つても同じやうな杉ばかりの路、その杉の並木の間からは不思議な形をした岩石の山の一部の見えるやうな路、右にも左にも草藪と樺木の背の低い林とが連なつてゐるやうな路を随分長く歩いて來たことを思ひ出した。

その間には、人家と言ふものもなければ、宿場といふやうなものもなく、偶々あるのは、林に添つた山小屋らしい中に、あらくれ男が一人二人大きな鋸で板を挽いてゐる位なものであつた。旅客といふ旅客には一人も逢はなかつた。

初めはその人のゐないのが、人影すら見えないさびしさが、却つて不安を除き去つたやうな氣がして、元氣に、詩などを朗吟したり、何かして歩いて來たが、またその聲のあたりに反響してきこえるのを、自分の伴侶か何ぞのやうにして、一步一步力強く踏みしめて歩いて來たが、次第に疲れが出たといふやうに、またあまりに單調なあたりのさまに退屈したといふやうにしてKはわざと路から林の中に入つて、

ナイフを出して、樺木の枝の素性の好いのを伐つて、それをステッキにしたりなどした。

（あの言葉の意味は、何ういふ意味だらう？）

またKはこんなことを考へた。昨夜の女中の赤いメリンスがチラチラと眼の前に動いて見えた。

## 二

晩春の暖かに明るい日影が、草藪に雜つた小さな山躑躅に榮えて照つた。林に囀つてゐる小鳥の聲は、何となく楽しい戀の歡びを唄ひかけでもしてゐるやうにきこえた。

一人であるといふことが、あたりには山の影と、日の影と、草木と、小鳥と、それより他に何にもないといふことが、誰もかれの歩いてゐるのを見てゐないといふことが、いつかKを一人である時によく逞うした性慾の方へと伴れて行つた。

三四里歩いてやゝ疲れかけてゐる心と體の甘い倦怠も、ほかほかと上からさして來る暖かい日影も、俱にさうした心をかれに誘つて來るやうな氣がした。

Kにはまだよくわからなかつたけれど、人生の最大快樂であるらしいシーン、これまでも繪や何かで人知れずこつそり知つてゐるにはるても、それが何處まで本當で、何處まで誇張であるかわからないやうな祕密なシーン、祕密であつてそしてこれにのみ人生の辛苦を忘れてゐるやうな歡樂、否、豪い人